

NO. 43
AUTUMN
1973

英語展望

ELEC BULLETIN

特集 アメリカの夢

- 「アメリカの目指したもの
——建国から今日まで」 本間長世
「平均的アメリカ人」 猿谷 要
「ウォーターゲートをめぐる」 國弘正雄

国際展望 古垣鐵郎・岩村忍・平野敬一・今村茂男

- 「私の英語歴」 河崎一郎
「日英両国語基礎語彙の比較」 服部四郎
「Modality, Subject, Negation など」 中島文雄
「日・英慣用表現の比較(6)」 長谷川 潔

英語展望

NO. 43
AUTUMN
1973

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc., Tokyo



【国際展望】

ふたつの訪問.....	古垣 鐵郎	2
言語と文化.....	岩村 忍	4
幻滅のこと・新聞のこと.....	平野 敬一	6
OHOHO 現象.....	今村 茂男	8
私の英語歴.....	河崎 一郎	10

【特集●アメリカの夢】

アメリカの目指したもの——建国から今日まで.....	本間 長世	12
平均的アメリカ人.....	猿谷 要	16
ウォーターゲートをめぐって.....	國弘 正雄	24
日英両国語基礎語彙の比較.....	服部 四郎	29

【英文法の体系 2】 Modality, Subject, Negation など中島文雄 34

日・英慣用表現の比較(6).....	長谷川 潔	39
Silence Is Not Always Golden (4).....	David Hale	45
Verbal Patterns 試案.....	大内 義徳	50

【書評】『変容する英語』.....武田勝彦 59

『英語教育の中の英語学』.....毛利 可 信 61

『英文学研究入門』.....Edmund C. Wilkes 63

新刊紹介.....65

展望通信.....67

表紙デザイン・カット
太田 英 男

ふたつの訪問

FURUKAKI TETSURO
古垣鐵郎

たびたび、中島文雄先生から町重な執筆のご依頼を受けながら、私は身辺雑事にとりまぎれて、不本意な延引を続けていた。やっと先日、吹米各地の飛脚旅行を了えたところで、又候、中島先生と同席する機会に纏り合わせてしまった。その時、私は先生の友情にみちた両眼の奥に走る厳しい催促の矢を感じて、も早やこれまでと観念した。

眼と言えば、こんど3年ぶりにパリでお会いした、故 Windsor 公未亡人 Wallis 夫人の美しくつづらで、奥ゆきの深い、魅力あふれる眼ざしを未だ嘗て他に見たことはない。勿論この素晴らしい印象は今に始まったことではない。Windsor 公が未だ Prince of Wales として世界中の老幼男女の idol であった輝かしい独身時代の終り頃に、偶然にもロンドンのさる高級レストランで、当時の Mrs. Wallis Simpson とお二人づれの処をお見掛けした頃からの変らぬ私の強烈な印象であった。

それからの三十余年、第二次世界大戦をさし挟んで、世は移り人も代った。その中で Windsor 公ご夫妻の迎られた運命ぐらい激しく厳しく、しかもその基底においてはいささかも易らず動かされずに静寂な最期を全うされたのは古往今来類例希なりと言わねばなるまい。公はしばしば、ご自分の迎られた生涯を回顧して「今ふりかえて考えても自分の選んだ道が正しかった」と述懐され、「もう一度生まれかわっても、私は同じ道を選ぶことに躊躇しないだろう」とまで言いきっておられた。

私は秘かに思う。現今の国際関係を通観し、また断え間なく変動して止まぬ世界情勢を考える時、これは最も保守的で古典的な王室に生を受け、一度は王位につかれた貴人が、終始天性の純情と誠実さを失うことなく、如何なる地位や境遇に置かれても、人間性の尊厳を高くかけて、偽善と虚構に組することなく、雨の日も風の日もよく耐えよく忍んで真実一路のゼントルマンとして生き抜かれた未曾有の貴重な記録であった。公は決して当時一般に世界中で言いはやされたような、恋のために国を棄てて自分独りの幸福を求めた一介の貴公子ではなかった。事実は正にその反対であった。公はその愛する一

人の「平民」女性との正当な結婚を「国王なるがゆえに」(Morganic Marriage) 政府からも、議会からも、教会からも拒まれた時、敢て国民に訴えて愛する祖国を二分してまで我意を通す方法を自ら斥けて、王位を愛弟ジョージ殿下に譲られ、自らは国を去り、余生を「パリの島流し」に甘んじられたのだ。公はこの悲壮な初一念を見事に36年間、死に致るまで貫かれたのだ。それは想像以上に苦痛にみちた生涯であった。特に大戦中、ドイツ軍の占領下にあつて、敵側の陰険にして執拗な働きかけに対し、毅然たる John Bull 魂を發揮してよく祖国の安全と国民の倅せを守り抜かれた。その史実は最近英国外務省より一部発表されて、人々は一入感謝と敬愛の念を深くしたのであった。

第二次大戦終了後7年以來、私ははからずもパリに祖国を代表して働く身となった。そこで再び私一家は Windsor 公夫妻との旧交を温めあう奇遇に恵まれた。パリではお互いに心おきなく観劇や、食事や、夕方のコクテルなどを一緒にして、あたかも30年の陰鬱な歳月が一日にして飛び去ったような清澄で明朗な錯覚を味わった。私たちは人生の秋色の深まるにつれて、一段と身分や立場や国籍の差別が遠く彼方に消え去る思いに暮れながら語りあかしたこともあった。そのような団欒のひと時、Windsor 公はいつしか若き日の快活さと大胆さを取り戻して大いに語り、大いにはしゃいで時の経つのも忘れてしまわれるように見うけられた。すると、その時である。公夫人は頃合いを見て、遙か彼方から爛々と輝く眼ざしを夫君に向けて射込まれるのであった。それは「もう時刻ですよ」との合図であった。そのときの名状し難い優雅で強烈な瞳の表情には万斛の愛情と理解がこめられていることを私共は感銘した。私の妻などはその刹那、まるで電光に射すくめられたように、また雷撃に打ちのめされたような感じで、終生忘れ得ぬ思い出にしている程である。

その Duchess of Windsor の思い出深い、つづらな両眼が、今年5月中旬、私をパリ市の西北に広がる Bois de Boulogne の奥にある瀟洒な館に待ちかまえていた。

思えば昨年5月28日未明、この邸内で嘗ての Edward 8世は、ただひとり最愛の公夫人にみとられながら78年の波瀾多き生涯を閉じられたのである。幼少からその英明と勇気を広く高く謳われたその人の終焉とは信じられないほど忙しくもの静かな最期であった。

しかし、ひとたびこのニュースが伝わるや、世界中の新聞や放送や映画や雑誌は最大級の関心と敬意を表して大々的に報道し、ひとしく公の高潔な人となりを偲んで哀悼の意を表し、今更のように公のかくれた功績を讀んで感謝し、その死を惜しみ、その運命に深い同情を寄せたのであった。

未亡人の両の眼ざしはいささかも昔にかわらなかったが、今や八十路になんなんとする体つきは、スマートな服装につつまれながらも、幾分衰弱の兆をお見受けして私の胸をしめつけた。昨年秋「非常におろかにも」と前提して何気なく語り出されたが、部屋の中で滑りころんで、腰の骨を負傷され、入院して手術を受けられたと言う。その手術は「奇蹟的な上首尾」だったが、それから半年ほど療養を必要とされたのだから、その苦痛は並々ならぬものであったろう。

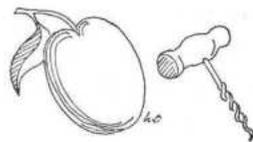
辞去する私を玄関に待つ車の側まで見送られ、今は孤りとなった思い出深い館をかえりみて「私共は35年間一日も離れたことはありませんでした」と漏らされた。未亡人は明朝勿々、家人らの勧めで南仏に保養に向かわれる予定であった。それは彼女に近寄り一周忌の悲しみを柔らげて差し上げようとの家人たちのしおらしい思いやりであった。こみあげるいたわしさをこらえて、私は「Duchess とそこの世に又とない倅せな方です」と言い残して、パリの夕闇に消え去った。

翌日、私は心も軽く、多年の宿願であった Jersey 島の旅に出た。40年来の親友、元 BBC 会長、そして Times 紙の主筆から社長を勤めあげて数来この方、この島に余生を楽しんでいる Sir William Haley 夫妻が待っていたからである。パリ空港から一時間のこの島は奇しくも憂鬱限りなき現代世界に実存する Utopia であった。それが万事不自由で不快きわまるこの世の中に、^{まっ}現に実在していることを知った私は己れの不明をも忘れて心から驚嘆し賛美し且つ羨望した。この島は全く英本土から独立して島出身の領主の下に統治され、独自の立法、行政、司法機関を有し、民選の警察も活動している。面積は116平方キロ、ちょうど伊豆大島(114平方キロ)ぐらいだが、全島を12州に分けて整然と統治され、英国政府も議会も労働組合すらも口出し出来ないのである。英国で郵便ストや新聞ストがあった時も Jersey では毎日、新聞が発行され、手紙が配達された。人口はほぼ7万。

風光明媚、気候温暖、太陽に恵まれ、地味もまた豊饒で馬鈴薯を始めとする農産物は地底の花崗岩とともに主要輸出品である。従って観光客が多く、昔は海外からの政治犯人や亡命客の楽園であった。文人 Victor Hugo や軍人 Charles de Gaulle も2回にわたってこの島に身を寄せている。島民たちは環境と風致保存の立場から高層建築や広大邸宅による土地独占を禁止している。島内には立派な道路が縦横に走り、その両側には二階建の別荘風の住宅が仲よく立ち列んでいる。一軒一軒、主人の嗜好を反映して、心にくいスタイルを示し、或は軽快な、或は古典的に、あくまで個性を横溢させて、各自が自分の家に独自の命名をして張り出しているから、番地や番号などは全然見当らない。私が客となった Haley 家の入口には単に「Beau Site」(見晴し荘)とだけ記されていた。南向きのベランダから海を見降す風景をたえたものと思う。Jersey 島の首府 St Helier は勿論、島内形勝の地には到る処、大小の近代的瀟洒なホテルがあり、首府の中心街には英米の銀行が軒を列べている。聞く処によると日本の大銀行も支店設置を希望したが、婉曲に断られたようである。

この島はまた所得税も相続税も殆んどかからないので、特に英国人たちはこの島に居住権を得たいと熱望し、土地の女性と結婚した英国銀行の若い出張員は、後年帰任を命ぜられるとその銀行を辞めて島に居残る者が多いと言う。豊富な農産物の上に Jersey 種の牛は Holstein と共に世界的名声を博し、上質の牛乳、チーズ、バターは日本でも有名である。海峡諸島それぞれに黄色のわすれな草や白色のはこべ草、紫色の都わすれ草が咲き乱れている。その中で島民は鼓腹げきじょう、白楽天の詩ではないが、皆わが好むところ、時に一ぱいの酒を飲み、或は一篇の詩を吟じ、妻子は喜々とし、鶏犬はうち興じ、優游自在の境地を楽しんでいる。白楽天は晩年、「われ將にその間に老いを終らんとす」と詠いあげたが、私はただ甘酸っぱいためいきを繰り返すのみである。

(津田塾大学理事)



言語と文化

IWAMURA SHINOBU

岩村 忍

I

日本では文化ということばは、だいたい二つの異なる意味に使われている。通俗的には文化というと各種の芸術的表現というような漠然としたものを意味する。しかし学問の領域、たとえば人類学などでは、かなり明確な内容をもっている。人類学においても、もちろん「文化」の定義についてはいろいろ議論が行われてきて、形質人類学以外に文化人類学と社会人類学その他の部門が発生したが、専門家以外では文化と社会構造とはだいたい同じような意味で使用されていると理解してさしつかえはない。ここでわたたくしが文化といっているのは通俗的、一般的な意味における文化ではなく、人類学的な意味での文化であることを断わっておきたい。

人類学者は、言語はあらゆる人間活動において中心的な機能をもつものと考えている。したがって人類学者やその他の社会学者たちは、言語というものを単なる人類学的 field work の必要手段として考えているのではなく、文化の解明にとってもっとも重要な研究対象の一つだと見ている。このような立場から、言語を文化のもっとも重要な要素の一つと考えるならば、文化と言語との関係についてのいくつかの問題が提起されるであろう。たとえば、言語が文化の全体構造において占める位置、文化における言語以外の要素と言語との関係、言語の構造と他の要素の構造との相似性、文化の総体的機能における言語の役割、言語と言語以外の人間行動とのあいだの関係などがある。

II

文化と言語との関係においてもっとも重要な点は、いうまでもなく言語行動は遺伝的なものではないということである。すなわち言語は先天的ではなく、後天的に獲得するものだという点にある。さらにいいかえれば、言語は文化によって伝達されるということである。しかしながら言語は遺伝としてではなく、文化として世代から世代へと伝達されるという事実は、必ずしも人間は生ま

れつきの言語能力をもっているということを否定することにはならない。このように考えると、一方では人間の生まれつきの能力としての言語と、他方では文化によって規定される言語とを区別して見るべきだということになる。人間や群棲する動物が使用する他のコミュニケーション手段と言語との相違は、第一に人間は自由にシンボルをつくる能力をもっているということである。シンボルとは信号の一種である。テレビの天気予報に雨傘が出たら、これは雨の信号であり、雨ということばはシンボルである。動物も一定の信号に対して一定の反応を示すこともあるが、人間は一定の信号に対して自由、随意に意味をあたえる、いいかえればシンボルをつくることができる。これがコミュニケーションにおける人間と動物の相違である。さらに、言語は他のコミュニケーションの手段、たとえば身振りなどとは非常に異なる構造をもっている。人間のはなしことばの最小の単位(音素, phoneme)はいろいろな言語によってちがうが、すくないので13, 多いのでは50ぐらいあるとされている。この音素が集まって意味のあることばができるわけである。人間はそのながい歴史のあいだに、わずかな音素のいろいろな組合せによって数万、数十万の意味をもつことばをつくってきたのである。しかしながら、言語とは単なるシンボルの集合ではない。音素から成立する一つ一つのことばは意味をもっている。このような意味をもつことばの最小の単位は形態素(morpheme)と呼ばれている。このように言語というものは二つの段階あるいは二重性をもっているといえる。このような言語の二重性は、言語以外のコミュニケーションの手段と言語とのあいだに存在する重要な相違点であると考えられる。

III

言語は文化を構成する種々な部分の一つであるというだけでは充分ではない。文化の発展、進歩、伝達、伝播は言語の使用によってはじめて可能になる。文化の伝達、伝播は話しことばと書きことばを含む言語によって

行なわれる。工芸や簡単な技術のようなものは言語なくしても伝達、伝播はある程度までは可能である。しかし社会、宗教、政治、経済のような制度は言語なくしては成立しない。聾啞で文盲の人たちだけの社会というものは想像できないであろう。

さきに述べたように、言語は音声的単位である音素と文法的単位である形態素で構成されているものと考えることができる。いいかえれば、言語の内部ではこの二つの要素が結合されている二重性、あるいは二つのレベルが存在する。このような考えに立って、言語学における音素（音声として観察できるもの）と形態素（構造的なもの）の研究方法を文化にも適用しようとする試みがおこった。言語を音素と形態素に分析すること、いいかえるならば言語の構成を明らかにしたことは、言語学の研究の基礎的な対象を確立したものといえよう。このような言語学の方法は他の社会諸科学、特に人類学にきわめて大きな影響をあたえずにはおこななかった。

このような言語研究は構造言語学と呼ばれるが、この傾向は20世紀初期のフランスの言語学者 Ferdinand de Saussure やアメリカの人類学者 Franz Boas にはじまるもので、その社会科学に対する影響は特に大戦後に著しくなった。

ド・ソーシュールは言語構造の二重性を *langue* と *parole* と呼んだが、これは人類学では *habits* と *behaviour*、情報理論では *code* と *message* に対応するものと考えられている。大戦後においてはアメリカの人類学者のある人たちは、*etic* と *emic* という新語をつくり出した。前者は *phonetic* から、後者は *phonemic* からとったもので、かれらは文化の各部分もまた内部的に結合された二重構造をもつもので、親縁関係、宗教、説話、工芸、音楽などにもそれぞれ言語と同じような構造の二重性が見出されるとしている。したがってこの言語構造の研究法を文化構造に適用しようとする新しい試みがはじめられた。

IV

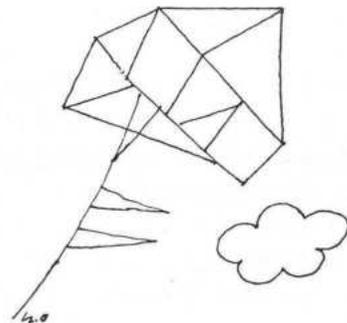
以上にきわめて簡単に述べた言語学における構造的アプローチによって、言語学と人類学との協力関係は著しく具体化してきたといえよう。近代の言語研究あるいは言語学には、大別して二つの潮流が見られる。その一つは書写言語——古代、現代を問わず——を主要な資料とする *philology* の傾向であり、もう一つは人類学における口頭言語——文字をもたない——を対象とする研究である。しかしながら、一方において言語の、他方において文化の研究が進むにしたがって、この両者のあい

だの共通点、相似点がしだいに明らかになってきた。たとえば、両者が人類に限られるものであること、形質的に遺伝するものでないこと、定型化 (*patternization*) の傾向があることなどが挙げられるであろう。このように考えるならば、それでは言語と文化との関係はどのようなものであるか、という問題が起こってくる。

この重大な問題に関して、たとえば Edward Sapir はつぎのように考えた。人間の住む世界を人間は客観的に認識しているものではないし、また社会現象をあるがままに理解しているものでもない。人間が考えている世界像というものは、その人間の属する社会集団の言語によって無意識的に規定されるものだとしている。したがって、特定の言語を使用する社会は、それ自身の特定の世界観、価値観、哲学をもつことになる。これは一種の文化と言語の相対主義の立場であるといえよう。文化の大部分は言語という媒体を通じて伝達されるという事実を認めるならば、文化と言語の関係をこのように決定論的に見ることは避けがたいと思われる。いいかえれば、言語を信号の体系と見なすことは、客観的経験は個々の言語体系におけるカテゴリーに従って整理され、貯えられ、伝達されるということを意味せざるをえないであろう。

文化あるいは社会構造において言語が占める部分がきわめて重要なものであることに疑いはない。しかし社会的（文化的）システムと言語的パターンの変化過程における相関関係については、まだ解明されていない点がありにも多い。これからの言語研究は、おそらくいっそう社会諸科学との密接な協力と提携の方向に進むのではなかろうか。

（京都大学名誉教授）



幻滅のこと・新聞のこと

—イギリス偶感—

HIRANO KEIICHI

平野敬一

この5月から6月にかけて、公務ではあったが、イギリスを訪れる機会をえた。これは私にとって実に8年ぶりの訪英だった。8年もたてば、いかに保守的なイギリスでも少しは変わっているだろうし、こちらもその歳月相応の変りかた（老化という）をしているので、とうぜん印象は8年前と同じでありえない。

前はそれほど感じなかったが、今度はどういふわけかロンドンの街がひどく汚らしいように感じられた。特に喫煙し放題の、吸いながら床に散乱している地下鉄の車内の不潔さは、昔よりひどくなったように思われたし、ダウントウン全般が、なにかうすよごれた淀んだような停滞を感じさせた。8年前のロンドンだって、それほど清潔なはずはなかったのだが、久しく離れていると歳月と隔たりとが、ある種の浄化作用を行なうらしく、私の中のロンドンのイメージが年々美しくなっていく、現実のロンドンからいつのまにか乖離してしまっただけなのである。（昔の恋人のイメージが思い出の中で美化されていき、現実のその人と似ても似つかぬものとなっていくのに似ているのかもしれない。）現実のロンドンにふれ、いつのまにか美化され、現実離れしてしまっただけ自分の中のロンドンのイメージを修正しえたというのが今回の訪英のいちばんの収穫だったかもしれない。現実から離れているうちに必然的に醸成されていく幻影や幻想を現実につけて消去したり修正したりする作業——これを幻滅（disillusionment）というなら、人は幻滅を味わうためにときどき現実にふれる（つまり現地へ行く）必要がある、ということになるのかもしれない。

私たちは幻滅をすぐ失望や落胆と結びつけたがるが、幻滅とは要するに現実認識の一方法であって、もっと積極的意味合いをもたせていいように思う。覚醒や発見も、それぞれ幻滅の別名とっていいはずである。

外国文学研究者が比較的（他の専門に比べて）外国へ行きながら、外国人と接触しながら（少なくとも私にはそう思われる）のは、会話が苦手といったそういう実用次元の理由からではなく、読書や研究によって長年培ってきた自分の中の幻が現実によってぶちこわされ

るのは困るという気持からであろうと私は解している。つまり幻滅がいやなのである。幻滅の悲哀を味わうよりは、自分の中の幻を後生大事にあたためていたい。あるいは現実に接する必要が起っても、その接触を、すでにできあがった幻をこわさない程度にとどめておき、現実には深くゆさぶられることを拒むのである。これはなにも日本の外国文学研究者だけにみられる現象でなく、自分の中の“imaginary England”をこわしたくないから絶対にイギリスへ行かないとがんばっている強情なアメリカ人英文学者を私は知っている。

とはいうものの、私はロンドンに対していただいていたわが幻的イメージを修正しながら、あらためて外国文学研究者にとっての fieldwork（現地作業）の必要性を痛感させられた。フィールドワークを避けたがる心理は、重病の宣告を下されるのを恐れて医者診断をこぼむ病人の気持ちに似ていないとはいえない。だれだって「お前さんのいただいているのは、まったくの幻想さ」と宣告されて、おもしろいはずはないのだから。

もっとも、イギリスで私はこの幻滅という形ではばかり外界と対応していたわけではない。ばくぜんと感じていたことを確認させられた場合もあるし、まったくあらたに知りえたことがらも少なくない。

さまざまの雑多な印象の中で、特に強く残ったものを一つだけ述べたい。それは、イギリスのいわゆる“quality paper”（*The Times* に代表される）の質の高さである。東京に住んでいても、その気になれば、ロンドンのタイムズ紙を読めないわけではない。たとえば銀座のイエナあたりへ行けば航空便で入荷する日刊のタイムズ紙がわずか2、3日のずれで手に入る。しかし、新聞というものは、現地を離れると、読んでいてもピンと来なくなるものらしく、私は東京にいれば、タイムズ紙を無理をしても読もうという気持にはちょっとなれない。ところが、ロンドンに滞在していると、なんとなく、そしてきわめて自然に、タイムズ紙を読むようになる（前回の滞英のときもそうだった）。私は3週間あまりの滞英中ほとんど欠かさずタイムズ紙を読んでいた

が、改めてこの新聞のレベルの高さと芯の強さに感心させられた。8年前のときより今度その点を強く感じたのは、この期間の日本のいわゆる一流新聞の低落現象が特にはなはだしかったからにちがいない。

たとえばこういうことがあった。タイムズ紙はある日の社説でウォーターゲート事件を取り上げ、アメリカの新聞や国会筋がニクソンに対して予断をもって（つまりはじめから悪人と決めこんで）いささか感情的にことをすすめているが、これでは公正な結論は期待できないのではないかと極めて慎重な、そしてニクソン追求に情熱を燃やしている正義派に水をさすような見解を表明した。いかにもタイムズ紙らしいバランスのとれた主張なのだが、私などにもこれはニクソンの肩をもちすぎた社説と受けとれた。果然、タイムズ紙のこの社説は、他の新聞や週刊誌の袋だたきにあった。ここまでは、どこにでもある話なのだが、タイムズ紙のタイムズ紙らしいのは、こういう自分の主張に対する外部からのいっせい攻撃（中にはかなり痛烈なものもあった）を、ていねいに新聞記事として紹介している点である。アメリカのワシントン・ポスト紙の鋭い反論など、ほとんど全文が紹介されていたようにおぼえている。「本紙社説、袋だたきにあう」というのは、たしかにタイムズ紙の読者にとってはニュース価値があるし、読者に知らせるのは当然かもしれないが、日本の新聞には、こういう芸当はまず期待できない。いつか朝日新聞の「定評」ある北京報道が文芸春秋誌に具体的に痛烈に批判されたときも、朝日の読者は、こういう重大なことがらを知らされなかった。（おそらく読者の「信頼」を裏切ってはまずいという判断からであろう。）またタイムズ紙が平気で自紙の記事の誤りや判断の間違いにふれるのにも私は感心させられた。「この点本紙は前に誤った判断を下したが」といったような文章（切り抜くことを怠ったので引用できないのが残念）に出会ったりすると、私は日本の新聞との違いをいよいよ強く実感させられるのである。

もう一つタイムズ紙に感心させられたのは政治的配慮によって筆を曲げることがない（らしい）という点だった。ことごとくに日本の新聞と引き比べるのは、あるいは自虐的というそりを受けられるかもしれないが、日本の新聞では、そのときそのときの“sacred cow”がかならず存在していて、その「聖牛」は批判や風刺のらち外におかれる。いまはどこかの国が日本の新聞の「聖牛」になっているか言うまでもなからう。新聞社としては善意(?)の配慮が働いているのかもしれないが、「聖牛」の存在を許すこと自体が、新聞としての自己否定につらなるという感覚があまりにも乏しいように思われる。

こういう例がある。この8月に来日が予定されている国立平壤マンスデ芸術団 (Mansudae Art Troupe) が去る3月にイギリスを訪れているのである。同芸術団がイギリスで公演していた当時のタイムズ紙は未見なのでその際同紙の取扱いを云々できないが、私がイギリスにいたときちょうどこの芸術団の国もとの英字紙 *Pyeongyang Times* の報道ぶりがタイムズ紙に紹介された。平壤タイムズ紙によるとマンスデ芸術団の公演はイギリスで熱狂的歓迎を受け、特に最終公演は何日も前から切符が売切れ、感激その極に達した観衆の熱狂した要望にアンコールを以てこたえたという。タイムズ紙はこの報道を紹介したのち、たんたん事実をあげるのである。すなわち、マンスデ芸術団のイギリス公演の平均客入りは35パーセントにすぎず、最終公演は切符も売れ残り、アンコールもなかった。“And there were no encores”が最後のセンテンスになっていて、この記事にそれ以上なんのコメントもついていない。しかし読者には、ちゃんとタイムズ紙のいわんとするところがわかるのである。つまり政治的配慮などせずにこういう記事をのせうるところがいかに爽やかであり、平壤報道のインチキブりを声を大にして糾弾したりしないところがいかにもタイムズ紙らしくて好ましい。日本の新聞だったら、こういう気のきいた取扱いはできないのではないかなと思う。8月のマンスデ芸術団の来日を前にして日本の新聞は紹介記事をのせはじめた（たとえば、朝日新聞夕刊に連載の「チュチュの芸術家」）。紹介内容の当否は私には分らないが、気になるのは、その紹介のしかたが、あまりにも畏敬の念にみち敬虔(虔)にさえなっている点である。たかが芸術団などとゆめゆめ軽んじてはいけなく、茶化したり批判したりするのは以ての外—という雰囲気になっている。この調子では日本公演後 *Pyeongyang Times* でたとえ事実と相違する報道がなされても、日本の新聞はその間違いを指摘するような「非礼」をけっておかさないであろう。政治的配慮があくまで真実に優先するというのが、どうやら日本の新聞の不文律になっているらしいからである。

私はイギリスでは幻滅を感じるが多かったし、経済成長その他いろいろの面でイギリスが日本の後塵を拝するようになった現実を感じることができたが、タイムズ紙に代表される一流新聞の質の高さという点では、残念ながら、日本は、まるっきり問題にならないという思いがした。だいいち、日本の「一流」新聞は、自己風刺の能力すらまだもっていないのである。前途、程遠し。

(東京大学教授)

OHOHO 現象

IMAMURA SHIGEO

今村 茂男

ひとつの国民の特性の中には、その国民が密集しているその母国で最も集約的にあらわれるものと、その国の中ではかえって見失われがちなものがあるようである。たとえば日本人のせっかちさは、通勤時の交通ラッシュに端的にあらわれ、外国人はもとより、たまたま日本へ帰る私などでさえ、あ然とし恐怖感をいだくことがある。それにひきかえ、日本人、とくに男性が、しくじりをした時やてれた時などにすぐ頭をかくという習慣は、日本ではあまりにも見馴れていて気にならない。ところが外国にいる日本人がこのくせを出すと、とても目につき、こっけいとも何とも表現しがたい気になる。

この後者のひとつの例としてOHOHO現象がある。これは日本女性が、日常会話の中で、電話口で、はては授業中の教室でも、すぐ「オホホ」「オホホ」と軽い笑い声をあげることを指す。日本の大学の授業中にもこれをやられ、じれったく思うこともあったが、あまりにも日常的なので、さほど気にもしなかった。

米国の大学では、日本の大学にくらべ、教授が学生個人個人と話をする機会がかなり多いように思う。とくに私の場合は、過去9年間、ミンガン州立大学英語研究所の所長として、各国からの留学生とありとあらゆる問題について個人的に話し合うことが仕事の半分以上を占めていた。現在まで、日本人学生は各人留学生の約10%であり、その日本人の中では男子4、女子1くらいの割合だったから、日本人女性は英語研究所の総学生数の2%、つまり100人に2人くらいの比率になる。従って日本人女子学生と話をする機会はいらないのであるが、そのたまの機会にOHOHO現象にぶつかると全く当惑する。しかしそれは瞬時のことで、とくにうじうじした人でない限り話を進めることができる。

ところがアメリカ人とはそうは行かない。「日本からのミスだれそれは、授業中に答える番がまわってくると必ず giggle するので、ドリルのタイミングがはずされて困る」、「ミスだれそれはあてると giggle するので、答えが判らないのだろうと思って、embarras しないように次の学生にあてようとすると、するすると答えをす

る。判っているのならどうして giggle する必要があるのか」、「日本人女性が giggle するのは何を意味するのか」などなど、教師たちに何度聞かれたり不平を言われたりしたかわからない。これは教室内での現象で、教師をいらだたせる程度のもので済むが、教室外で、しかも本人にとってかなり重要なこと、とくにはっきり“No”と答えるべきことのやりとりに「オホホ」をやると、とんでもない結果を招きかねる。こうなると、他愛もない日本伝統のしぐさ、それも日本にあっては女性らしいとほめられさえするかも知れないしぐさが、国際的にはとんでもないコミュニケーションの障害になるのである。

言い古されたことではあるが、男女をとわず、日本人が何か失敗や失礼なことをした時に、「すみません」と言って愛想笑いをするのが、外国人にはとても気にさわる。真顔で“I'm sorry”とやれば、“That's OK”くらいで軽くすんだのに、つい「エへ」笑いが伴ったので、「本当にすまないのならなぜ笑う」と腹を立てられた件はよく聞くし、私も目撃したことがある。

OHOHO現象をさらに拡大解釈するとこういうことも言える。西洋人の多くは、人と話をする時には相手の目を見てものを言うのが礼儀と心得ている。これが強い習慣になって、車を運転しながら横に坐っている人に顔を向けたり、中には後席に坐っている人をふり向いて話しかけたりする人がいる。ハイウエーを70マイルで突っ走っていたり、カーブにかかっている時でさえこれをやるものだから、こちらが乗客の場合は、何さまいのちに直結するだけにひやひやするのであるが、とにかくそれほどまでに相手の目を見て話すことが大切なのである。ところが日本人などは、むしろ伏目がちにもものを言う傾向がある。とくに私なんかのように背の低い者は、背の高い相手をふり仰いで話をするのが肉体的に苦痛である。また米国生活20余年になる私でさえ、まっ青な目玉をした人と話をしていると、吸いこまれそうになるというか、焦点が定まりにくいと言うか、何となく長時間は正視しにくいのである。そこで目をそらせて話をしてしまう。これを西洋人から見れば、目をそらせて話をする人

は本気で聞いていない、誠意がない、何を考えているか判らない、というように解釈しがちであり、ひいては信用がおけないという結論を出す傾向がある。とくに西洋人と話し馴れていない日本人が、ことばの不自由も手伝って、目をうろろうさせたりすると、その印象は一層強くなる。こころへんにも、西洋人、なかんずくアメリカ人が、どうも東洋人を正しく評価しきれない原因のひとつがあるような気がしてならない。

人生の半分近くを米国で暮した今日、強く感じるこのひとつに、日米の相互理解は双方ともまだまだ不十分とは言え、日本人の米国理解にくらべ、総体的に米国人の日本理解の程度が極めて低いということがある。ここらで日米相互理解の重点を「日→米」から「米→日」の方向に移して行く必要があると思う。最近設置された国際文化交流基金の趣旨もその辺にあるものと察せられる。それについては、国際理解の障害になりうる現象に再検討を加える必要があるのではないだろうか。何も日本の伝統をかえると主張しているのではない。上記の各種OHOHO現象も、日本人の生活習慣にとって有益な存在であれば、それは日本人どうしのコミュニケーションには温存すべきものである。しかし外国との交流場においては、言語と同様に OHOHO 現象もコミュニケーションを促進したり妨害したりすることを忘れてはならない。

日本では外国語教育、それも英語教育が極めて盛んで

あり、その量についてはまさに世界随一であろう。またこの頃は Edward T. Hall の言う silent language, つまりジェスチャーなどについても研究や指導が行なわれているようである。が、日本人に個々の身ぶりやしぐさと言語教育との関連については、あまり研究されていることを聞かない。「オホホ」と笑ってすませる問題ではないと思うのだが。

最後に OHOHO 現象の出典について。2年ほど前、米国の主要な集中英語講座の担当者十数名が会議をしていた席上、TOEFL やミシガン・テストなどの英語能力テストと専門学科学習開始時期との関係について討論していた。いくら留学生自身が自信があるからやらせてくれと言っても、英語の点がこれくらいはないと専門課程に進ませるべきではないだろうと話がまとまりかけた時、ハワイ大学英語研究所(現同所長)のプレイスター教授が、「それでもなあ、あの BBE Factor があるからなあ」と言った。居合わせた一同、聞いたことがない用語だったので、語学教育か心理学の新語かと思って問いただしたところ、「いや、あの Big Brown Eyes (東洋人、とくに女性の目を指す) だよ。あれでじっと見つめられたり、とくに涙でもたたえられたりすると、俺にはどうしても no とは言えない。諸君は BBE Factor はこわくはないかね」とのこと。これにあやかっただのお粗末 OHOHO 現象考である。

(ミシガン州立大学教授)

(p. 15 よりつづき)

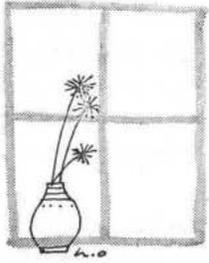
ベトナム戦争からさかのぼって、冷戦初期におけるアメリカ外交も関連していたという議論を展開する者が現われている。

このような、狭い意味でのアメリカ的特質の再検討とならんで、合理主義と科学技術とに基づく現代文明が反って人間の存続に対する脅威となるに至ったという問題も、アメリカ文明の問題として取り上げられている。環境破壊、人口爆発、資源の減少などを前にして、終末論的議論がアメリカでも流行しているらしいが、終末論に打ち勝つための議論も出始めているようである。しかし、そうした議論は、アメリカだけのものではないのであって、人類は何を目指すべきかという問題にまで発展してしまうのである。

今日の世界において、デモクラシーはアメリカだけではないし、現代文明の危機を切り抜ける解決策もアメリカから出なければならぬわけではない。けれども、アメリカがこれまでの歴史的伝統に制約されながらいかにしてリベラル・カルチャーの精神を新しい状況の下で発

揮してゆくかという問題は、アメリカと密接な関係にある日本人として注意をそらすことのできない問題であるし、現代の終末論をいかに克服してゆくかという問題も、高度産業社会に生きる日本人として他人事ではないことである。日米間の相互理解ということも、単に政治や経済のさしこめた問題についても誤解がないようにするというだけではなく、文明の根本について意見を交し、おのおのが進む道と相協力すべき分野について誤解がないようにしないと、政治、経済の問題さえも円滑に解決策を作り上げることができないという事態になりかねないのである。(東京大学助教授・アメリカ史)

☆ ☆ ☆ ☆



私の英語歴

KAWASAKI ICHIRO
河崎一郎

私の英語を勉強した時代はもう半世紀近く前ですから、今とは英語を学ぶ環境も随分ちがっていました。中学1年から英語を習ったのですが、その時から私は英語が非常に好きでした。当時は外人教師の時間がいまより多かったようで、わりと低学年、中学2年くらいから週に1回 *native speaker* が来て会話を教えました。私は大阪の北野中学でしたが、大体当時はどこでもそうだったようです。各学校に配属されてたんですね。で、中学時代からその会話の先生のところへ押しかけていったりして、会話を非常に興味を持ってやりました。先生もいまと違ってもっとひまもあったし、そんな熱心な学生がおるかというので、家へ遊びに行ってもいやな顔もしないで、ときにはご飯を食べさせてくれたりして、非常に会話を楽しみました。

それから英米人の牧師の説教、それにバイブル・クラスが教会でありまして、私はクリスチャンではないんですが、そういうところに行って *native speaker* の発音を聞いたりした。それも当時は東京だって外人はそんなにいまみたいに見うけない時代でしたし、大体英語の塾といったものもほとんどない時代で、外人をつかまえて話をするのに本当に苦勞しました。いまはそこいらにうろうろしていますが、そのかわり当時は外人の先生たちももっと *devoted* だったようです。そんな熱心な学生も多くなかったからかもしれません。ともかくできるだけそういう外人の先生、主に学校配属の外人教師とか、教会の牧師の説教などを熱心に聞きにいったものです。

それからいまひとつ、中学2年あたりから私は時事英語を熱心に読みました。当時は「英文毎日」というのが一番やさしく、*The Japan Advertiser* というのが一番むずかしかったのですが、私は「英文毎日」から入りました。それを字引きを引いて毎日読みました。だんだんわかってくるとうまますます興味がのり中学の終りには *The Japan Advertiser* までなんとか読めるようになりました。いまから考えると時事英語の勉強が非常に役に立ったと思うのです。文学なんかよりもよかったと思います。そのころは高等学校あたりでも相当むずかしい *Galswor-*

thy とか、それに *Tennyson* ですとか、英文学のむずかしい本を教わりましたが、私はまず時事英語に非常に興味を持ちました。

それから、当時の旧制高校へ行きましたら今度はまた外人教師のクラスが多いのです。これまたそういう先生をできるだけ利用してできるだけ *practical* な勉強をやりました。そのころですが、横浜にアメリカからの *Floating University*、洋上大学というのが来たことがありました。英字新聞か何かで知ったのですが、私は夢中になって横浜に行き、だれの許可もなく棧橋から *gangplank* を上がって碇泊中の船に飛び込んでいった。そして誰にもとがめられなくてそこのアメリカ人の学生をつかまえて会話をやったことを覚えています。

やはり旧制高校のころですが、日米協会でリンカーンの *Centenary Celebration* というのがありました。イリノイ州スプリングフィールドの *Centenary Association* というのがスポンサーで日米協会が窓口になって *essay contest* をやりました。それに私が当選しまして、アメリカ大使が賞品授与のパーティを帝国ホテルでやったのを覚えてます。

そんなことで、書く方はやはり英字新聞を早くから勉強したのがよかったように思います。特に *The Japan Advertiser* はアメリカ人の経営でして、本国から優秀な記者を集めていましたし、文章も内容も充実していました。これの社説などを毎日勉強しまして、それが非常に役に立ったと思います。やはり英米人の書いた英語、いい *expression* を覚えるということは一番書く方には役に立つと思います。もちろんしゃべる方にもですが。それから私が大学に進んで東大生のとき、イギリスのシェイクスピア協会が英文の懸賞論文を募集しまして、文学部の学生なんか随分応募しましたが、私は法学部でしたが1等になったといったこともありました。

それから外務省に入り、イギリスに行ったわけです。よく日本式の悪い英語がたたって読み書き、文法はできても、会話の方は全然ダメで外国に行って非常に困るという例は多いんですが、私の場合はそんなことはなく、

もうイギリスに着いたその日からむこうの人の言うこともわかったし、別に不自由は感じませんでした。これはやはりこちらでできるだけ外人に接したり、とにかく好きで熱心に勉強した結果だと思ってます。ですからそれまで習った英語、ことに発音なんかを改めてやり直すという必要もなく、そのまま経験を積んだという事になります。いろいろ必要な本、興味ある本を読んだり、外務省での仕事がすなわち英語修業になったわけです。

語学というものはやはり生まれつきということもあると思います。語学の才能があるというのか、すぐ覚える人とそうでない人といいます。私の場合、才能というか生まれつきは5割で努力は5割くらいじゃないかという気がするのです。それになにより私は語学が好きだということ、好きで夢中になってやったので、苦勞したという気がしませんし、効果があったと思います。英語の他に外国語は6つできますが、それもそれぞれの国でわりと早く覚えました。レッスンなんかとらずに、フランス語とドイツ語は学生時代にやりました。外務省の試験は英語とフランス語でした。それから在外勤務をやってからロシア語、ロシアには長くいましたし、それまでの西欧語の経験が役立ちましてかなり上達しました。それで終戦後失業したらロシア語を教えようかと思っていたくらいです。実際に教えたこともあるんですよ、頼まれてね。予備校の夜学の塾でしたが、まあすぐに友人に譲ることになりました。それにスペイン語、それからポーランド語。ポーランドには6年いましたし、日本では私などが一番うまい方でしょう。それからチェコ語。要するにスラブ、東欧語が多いのです。東欧には12年いたことになりますから。

もちろん外国に行けばその国の言葉がすぐに出来るようになるわけでもないし、また外国に行かなくても努力しだいで外国語が出来るようになるわけです。要するに私の強調したいことは好きでやるということ、「好きこそ物の上手なれ」という諺がありますが、その通りだと思います。この間 Foreign Teachers Association に guest speaker として呼ばれて講演をしましたが、その後の懇談会でどうすれば英語がうまくなるかという話が出ました。そこの会長のウィルキンソンという人ですが、どうすれば英語がうまくなるのかということをよく学生から聞かれるというのです。だから私は、そんな秘訣みたいなものはありようもなく、ただ好きで熱心にやる以外に道はないのではないかと、interest を持つということが先決じゃないかと答えたわけです。そのときに外人教師が言ってましたが、いま非常に英語熱が盛んなようだが、実際よくできる人は非常に少ない。仕事の関係

で必要に迫られた人とか、三度のめしより英語が好きだというような学生以外はあまりうまくないし、熱心でもないと言っていました。あまり熱意のない人に教えるのは外人教師の方も frustrating だし、それから未だに恥ずかしがる



というんです。Self-consciousness と bashfulness これを remove するのがたいへんな苦勞だし、週に1回や2回の外人のクラスではどうにもならんと思うと言う人が多かった。だからいまでもみんなが英語をやっているようで案外成績が上がっていないようです。

しかし昔に比べればチャンス、facilities は大変な違いです。テレビやラジオの講座もあるし、テープレコーダー、カセットの類はいくらでもあるし、金さえ出せば外人の total immersion というのもある。ただちょっと注意をしなければならぬのは、質のよくない外人教師も少なくないということです。浮わついた英語熱に便乗して中には native speaker でない外人もいますからね。やはりいい人と悪い人と select する必要があります。ただ西洋人だというだけで高い金を払うのもむだですから。

英語熱といえば小さな子供の、幼児教育が流行のようですね。たしかに将来外国で仕事をする人とか、外国人と接触のある仕事をする人は、それは若いときからやられたらいいと思います。しかしネコもシャグシも英語の幼児教育というのは無駄な面もあるのではないのでしょうか。普通の日本人の生活では英語を使わないでしょうし、英語が退化、rusty になりますね。日本語と西欧語では発想法といいますか、論理構造が違います。日本語でばかりものを考えていると、いざ横文字の言葉で自己表現をしようとしても自由に出てこない。ですから日本というのはおおよそ外国語を話すのに不適当な climate です。それでも英語は、新聞もありますし、普及はしていますから、いわゆる特殊外国語のことを考えると比較的利益だと言えますね。要は不断の熱意を持って勉強するという事に尽きるんじゃないでしょうか。

(Japan Unmaskedの著者、元特命全權大使)

アメリカの目指したもの——建国から今日まで



HONMA NAGAYO
本間 長世

1. アメリカ史の関連性

日本とアメリカとのコミュニケーション・ギャップが説き立てられ、アメリカを理解する必要性が強調されたにもかかわらず、日本人のアメリカに対する理解が着実に深まってきているという徴候が見られないのは、不思議でもあり残念でもある。その原因はいろいろ考えられるが、その気になりさえすれば、アメリカを理解するのは実は簡単なのだという安心感のようなものが、理解の促進をはばむ根深い要因となっているのではないか。ソ連研究や中国研究とは異なって、アメリカ研究については情報は豊富であるし、ことばも日本人にとっては最もなじみの深い英語であるから、情報を体系的に整理しさえすれば適確なアメリカ像はおのずから浮かび上がってくるはずだという考え方が、社会の各分野にかなり広くゆき渡っているように思われる。その結果、誰でもアメリカについての「インスタント専門家」になれることになって、実際にはアメリカ研究の専門家は意外なほどに少ない。

アメリカ理解に関する専門家と「インスタント専門家」とを分けるひとつの指標は、アメリカの歴史的発展の文脈の中で今日のアメリカをとらえるという態度があるかないかということであるというのが、私の年来の考えである。専門家が必ずしもすぐれた洞察を備えているわけではないし、逆に「インスタント専門家」がアメリカの将来を見通して雄弁に語ることもあり得るが、アメリカの社会ないし文化の歴史的な性格を研究することが不十分であっては、一般的レベルでのアメリカ理解はなかなか深くはならないに違いない。

アメリカ国内では、歴史研究と文学研究とを総合した形でのアメリカ研究が大きな成果をあげてきているが、日本では地域研究としてのアメリカ研究はどちらかという社会科学的研究という印象が強い。理想的には、英語についての理解も深く、人文科学および社会科学の両者のやり方を心得ていて、その上で対象をアメリカの社

会と文化とに定めて研究する人が現われることであるが、いずれにせよ歴史研究がアメリカ研究の中心となるべきなのである。

しかし、アメリカの歴史にそれほどの深い意味があるだろうか、そもそもアメリカの歴史は、アメリカ人自身が認めているように、ヨーロッパや日本の歴史と比べてあまりにも短いではないか、という反論が出るであろう。確かにアメリカの歴史は浅い。昨年の大統領選挙で圧倒的な勝利をおさめたニクソンは、ウォーターゲート事件のために信頼性や指導力が衰えてしまったが、そのニクソンの宿願は建国二百年記念の年である1976年に大統領のいすに坐っていることだった。たかだか200年の歴史というのでは、歴史感覚を身につけようとするにはあまりにも短か過ぎるという不満が出て当然であるし、すぐれた歴史家だったリチャード・ホフスタッターも、アメリカの知識人の歴史感覚が希薄であることを指摘している。

しかし、いくつかの点で、アメリカの歴史的発達と今日のアメリカのあり方との間には、他国の場合とは異なった特別な重要性が認められるのである。

第一に、アメリカ合衆国の建国以前に百数十年に及ぶ植民地時代の歴史があり、その間に建国後の発展の性格を決定するような出来事が起こっている。アメリカのナショナリズムがイギリス本国との抗争を通じて形成されたという限りでは、「アメリカニズム」は18世紀後半以来のものということになるが、「アメリカ的なもの」を植民地時代の体験——ピューリタンたちの「パイプ・コモンウェルス」の建設、フロンティアの開拓、アメリカン・インディアンとの接触、タウン・ミーティングを通じての住民の政治参加、植民地議会を通じての議会政治への訓練など——に求めることは、アメリカ人自身によってくり返しなされてきている。さらに、植民地時代の人びとが、新大陸における自己の体験の意味を、イギリス本国ないしヨーロッパに向かって報告し続けたということも、建国以後のアメリカとヨーロッパとの関係のパターンを作るものだった。新大陸での出来事は、≡

ヨーロッパ人に確認されねばならないという態度は、各植民地に共通した態度であり、有名なクレヴークールの『アメリカの農夫の便り』や、ジェファースンの『ヴァージニア覚え書』なども、そのような系譜に属するものとみてよいであろう。アメリカ人の歴史感覚は希薄であるというのであれば、それにもかかわらず、あるいはまさにそのゆえに、植民地建設以来の歴史の歩み全体が直ちに今日のアメリカと関連性を持っているという感覚も、並存しているようである。

2. アメリカの発展

アメリカ合衆国はイギリスから独立するに当って独立宣言を発表し、また独立戦争が終わってから、13州の「さらに完全な統合」を達成するために、成文の連邦憲法を作って新しい中央政府を発足させた。すなわちアメリカは、建国の理念が文書によって明確に述べられている国であって、アメリカ国民は危機に際してつねに建国の理念にたち戻ることができる。このことは、アメリカ人の歴史的体験の特色の第二番目に挙げてよいことであろう。

独立宣言も連邦憲法も、大きく言って18世紀啓蒙思想の産物である。むしろ、ヨーロッパでは思想の段階にとどまった啓蒙主義が、アメリカにおいては新しい秩序の下における新しい国として具体化したところに、アメリカの啓蒙思想のすぐれた点を見出している歴史家もいる。実際、アメリカの啓蒙思想を代表する人物を数え上げると、フランクリン、ジェファースン、マディソンなど、いずれも独立革命から建国初期にいたる政治的指導者たちであり、アメリカ啓蒙思想の理性への信頼は、プラグマティックないし実際の合理的主義だったことに気づくのである。

独立宣言の前文で自明の真理として強調されているような自然権の思想は、19世紀のヨーロッパにおいて批判を受けただけでなく、アメリカ人の中にも自然権を否定する政治家や思想家が現われた。しかし、大勢としては、リンカーンのように、独立宣言と憲法とをアメリカ民主主義の根本を定めた文書として、アメリカの歴史の道程は建国の理念の発現であるべきであるという考えが強く、今日に及んでいる。連邦憲法の草案が13州に廻された時には、その批准をめぐる賛成と反対とに意見が分かれ、憲法が正式に成立するまでの政治的争いはかなり深刻だったが、ひとたび成立してしまうと、憲法はアメリカ国民にとって神聖な文書となり、憲法によって規定された大統領の職も、誰がその地位を占めているかと

いうこととは別に、それ自体の尊厳さを備えるに至った。最近のウォーターゲート事件においても、ニクソン大統領個人に対する信頼性は低下しているにもかかわらず、ニクソン大統領の辞任を求める声が大きくなるのは、大統領職の尊厳を守りたいという気持のあらわれだという説明が、アメリカの憲法史家などによって行なわれている。

しかし、連邦憲法には政党に関する規定がなかった。憲法草案の起草者たちには、アメリカという新しい共和国が政党政治によって動かされてゆくという考えはなく、建国期の指導者たちは、党派心というものを極めて有害なものと考えていた。それにもかかわらず、実際政治の要請から、初代大統領ワシントンの下でフェデリスト党とジェファソンアン・リパブリカン党とが出現したのである。近代政党政治の長い伝統を有し、しかもそれが二大政党政治という形で発達したことは、アメリカ史の特色の第三番目に数えることができよう。

いうまでもなく、アメリカの政党政治の歴史にはさまざまな曲折があり、歴史家たちの解釈もまちまちで、政治史研究は現在最も活発な分野のひとつである。けれども、1828年にアンドルー・ジャクソンが当選してから1840年の選挙が行なわれるまでの間に、政党の役割や選挙の仕方などがほぼ今日のアメリカの政党の活動を思わせるようになったことは間違いない。無論、今日のエレクトロニクスの技術と広告業の世論操作の方法などはジャクソンの選挙参謀が夢想だにしなかったことであろうが、職業的政治家が出現したことや、大統領選挙が大衆の支持を求めるものであるために、各種の人気取りの手段が考案されて、大統領選挙が一種のお祭り騒ぎの性格を帯びるようになったことなどは、この時期を境としている。

大統領制と政党政治とが相並んで進んでいったことは、アメリカ政治の性格に大きな影響を与えた。大統領は、幅広く全国民の支持を得なくてはならないため、大統領の演説や教書の調子は、時代が下るにつれて、一般的で、抽象的で、道徳的で、いわゆる格調の高いものとなる傾きがあった。たとえば、大恐慌下のアメリカにおいて1933年に就任したフランクリン・ローズヴェルトが、就任演説の中で「恐れねばならない唯一のことは恐れることそれ自体である」と述べ、国民の士気をふるい立たせたことは良く知られている通りであり、この演説はローズヴェルトのレトリックが空虚であるという例に引かれるのでなく、大統領が国民に対してとるべきリーダーシップを見事に発揮した例として記憶されている。

南北戦争はアメリカが体験した最も深刻な危機であ

り、北部と南部とはいまだに南北戦争を戦っているのだという歴史家もいる。アメリカという国が連邦制であって、中央政府の他に各州政府が大きな権限を持ち、したがってアメリカの法体系および司法制度も極めて複雑であることは、今日のアメリカ政治の大きな問題であるが、南北戦争は連邦制度の特殊性と、南部という「セクション」の独特の歴史的運命というものを示したという点で、アメリカ史の特色の第四番目にあげるべきものを浮き彫りにしている。

しかし、それ以上に重要なことは、南北戦争が最初は連邦の維持を目的としながら、戦争の最中にリンカーン大統領が奴隷解放令を出したことによって「自由」の実現も戦争目的に加えられ、やがて黒人が白人と同等の権利を享受すべきであるという「平等」も戦争目的に加えられたという過程である。平等の理想はまだ達成されておらず、今日においても黒人は差別撤廃のための闘いを続けており、また他の少数人種集団もそれぞれに自己主張を行なっている。

3. 現代アメリカの歩み

南北戦争後のアメリカは、産業資本主義がめざましい発達を遂げ、移民の子から文字通り百万長者となった鉄鋼王カーネギーのごとき人物が現われる一方で、ホレーショ・アルジャーは少年小説の分野で立身出世物語を書き続け、社会学者のヴェブレンは『有閑階級の理論』を著わして成金の心理を分析した。アメリカ社会に俗物精神がひろがり、アメリカ人気質といわれる自国についての自慢が多くなったのもこの時代である。

アメリカが豊かになる一方で、ヨーロッパでは、戦争や、迫害や、経済の不況などから、故郷にとどまるよりは他国へ移り住みたいと望む人びとが増え、その結果アメリカには19世紀後半から20世紀初めにかけて、特に南欧および東欧からおびただしい移民が流れ込んできた。

アメリカが移民から成り立つ国であることは、アメリカの建国と共に古い事実であるが、移民という要素をアメリカ史の特色の第五番目にあげるのは、19世紀後半に圧倒的となった「新移民」たちがアメリカ社会に同化し得るかどうかという問題が、当時のアメリカ国民に深い不安をひき起こしたということと、カトリック教徒およびユダヤ教徒を中心とする新移民の子孫の存在が、今日のアメリカを理解するための最も重要な問題のひとつとなっているからである。特に、一世および二世の移民が、アメリカの社会のみならずアメリカの歴史をも受け入れ、ワシントンをわれらの大統領と呼び、エマーソン

やホイットマンを自分たちの文学者として認めるという過程は興味深い。アメリカ人として生まれるのではなく、アメリカ人になるという人びとは、今日もまだあとを絶たないわけであるが、日本人にとってこのことがいかに理解し難いかは、たとえばウォーターゲート事件調査特別委員会の委員であるハワイ選出のダニエル・イノウエ上院議員が、いくつかの日本の新聞にダニエル・井上議員と書かれていることにも反映されている。

20世紀になってからのアメリカは、世界の列強のひとつとして、まず第一次世界大戦に参戦し、次に全体主義勢力と戦う連合国の戦力を支える力として第二次世界大戦に加わり、さらに自由主義対共産主義という対立における自由主義陣営の指導者として冷戦の時代を経験してきた。元来アメリカは、ワシントン大統領が大統領職を去るにあたって「告別の辞」で述べたように、他国と面倒な関わり合いを作るような恒久的同盟関係を結ばないできた国であり、単独に自国の対外態度を定めるという意味において孤立主義的だった。第二次大戦から冷戦期にかけての国際主義ないし干渉主義は、アメリカの対外態度としては伝統を外れたものであったが、共産主義との対決とか自由主義の擁護というような普遍の原則をかかげて国際主義を正当化しようとするのは、まさに孤立主義を裏返しにした態度といえるのではないかと説く評論家もいる。

戦後の国際主義はヴェトナム戦争で破綻をきたし、国際主義を強く支えてきた民主党の中から、孤立主義的政策を唱える政治家が現われるようになった。アメリカの対外態度をアメリカ史の特色の第六番目にあげたいのであるが、ニクソン・ドクトリンは、国際主義からの後退を一方で唱えながら、他方では孤立主義の傾向に抵抗しているために、その性格にはあいまいなところがあって、ニクソン大統領がニクソン・ドクトリンについて説明を加えれば加えるほど、たとえばアメリカの同盟外交は今後どのように変化するのかというような、日本にとって切実な問題はかえって混乱の度を深めるのである。

4. アメリカ的特質

アメリカが今日一種の転換期ないし混乱期にあるということは、ことばを変えれば、アメリカがこれまでの歴史を通じて目指してきたものが見失われたということであるのかもしれない。たとえば、最近数年間にやましく論じられるようになった環境破壊の問題ないし生態学的危機についても、アメリカが築き上げてきたものがまさにそうした危機を生んだということに対する困惑が、

環境保護論の中にかがわれるのである。文学と歴史の研究を見事に総合した著作である『楽園と機械文明』（橋原，明石訳）の著者レオ・マークスは、「アメリカ的ダイナミズムと生態学的理想」と題するエッセイで、アメリカ社会の際立った特色をダイナミズム、すなわちさえぎられたことのない膨脹ということに見出している。マークスによれば、外国人が「アメリカニゼーション」ということを口にする時必ず思い浮かべるのは、「ダイナミックな、膨脹的な、抑制されない行為」ということである。これに対して、今日の生態学的危機から生まれた至上命令は、「これで十分である」という考え方に立って成長崇拜主義をおさえることであるから、アメリカの歴史的体質そのものが今日の要請と衝突することになる。

もっとも、マークスは、アメリカ文学の伝統の中にある「田園的衝動」が、成長を抑制して足ることを知ることに関わり論じているのであって、その限りではアメリカ的特質に絶望しているわけではない。しかし、アメリカ的特質の中の支配的なものに対して、深い反省が求められていることは動かないのである。

けれども、アメリカ的特質という場合に、はじめにはっきりさせておかねばならないことがあるのであって、その点を曖昧な形で残したまま議論を進めると、混乱はますます深くなるように私には思われる。それは、アメリカ的特質という時に、植民地時代をへて1776年に独立し今日に至っている一箇の国および国民の特質だけでなく、科学技術の発展を基礎とした近代文明全体の性格をも指すことがあるということである。一方は、アメリカをアメリカたらしめているものは何かという問題であり、他方は、現代世界にとってのアメリカの関連性はどこに求められるかという問題である。

しばしば引用されるように、19世紀前半にアメリカを訪れて名著『アメリカにおけるデモクラシー』を著わしたフランスのトクヴィルは、自分はアメリカの中にアメリカを越えるものを見たと言った。実際、トクヴィルの関心は平等社会としてのデモクラシーそのものにあっただけであって、たまたま当時においてはデモクラシーはアメリカにのみ存在したから、議論の材料としてアメリカ社会の諸事実を用いたともいえるのである。しかし、今日のアメリカに対する関心は、まずアメリカの中にあるアメリカそのものを見届け、同時にアメリカを越えるものとしての普遍的な現代文明にも目を配り、その上で、アメリカは今どこにあってどこに向かうのであるのかを探るということにならねばならないのであろう。

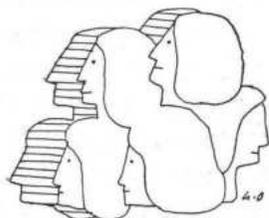
アメリカをアメリカたらしめてきたものについては、

これまでにさまざまな説明が試みられてきた。日本におけるアメリカ史研究の開拓者である高木八尺教授は、ピューリタニズムとフロンティア精神こそがアメリカのデモクラシーを生みかつ発達させてきた原動力であることを、くり返し説いてきているし、アメリカ人の中にも、また外国人の中にも、ピューリタニズムとフロンティア精神の影響を重く見る人びとは多い。たしかに、アメリカ社会の形成期に、これらふたつの要素が果たした役割は非常に大きなものであったに違いない。ただし、やや狭い意味での文化という観点からすると、ピューリタニズムそのものではなくその遺産のようなものは、むしろ創造的文化の発達をはばむ力となったという批判が加えられたこともあったし、フロンティア生活も文化の創造にふさわしい環境ではないということがいわれてきた。最も厳しい批判者たちからは、ピューリタニズムもフロンティア精神も、それぞれに人間性抑圧（魔女狩り、インディアン虐殺）の精神であると非難されている。

ピューリタニズムの源流は植民地時代初期にさかのぼるわけであるし、フロンティアは19世紀末に消滅したとされている。20世紀のアメリカをアメリカたらしめているものとして、やはり移民たちが抱えてきた「アメリカの夢」を挙げなくてはならないであろう。アメリカは民衆が幸福の追求を行なうことができる国であるという意味でのデモクラシーないしリベラリズムが、アメリカの目指してきたものなのであり、建国の理念に基づくアメリカのヒューマニズムの文化を一言で表わすとすれば、リベラル・カルチャーと呼ぶことができると思う。

今日のアメリカの混乱ないし危機は、社会変化の激しさとヴェトナム戦争への介入によって促進されたといえよう。いわゆる黒人革命にしても、平等化の要求が強まってきたということの背景に、1960年代を通じて黒人の地位が向上し、そのためますます平等化を求める声が大きくなったことや、黒人が大量に北部に移動したことによって、黒人問題が南部だけの問題でなく合衆国全体の問題となったという事実があるわけである。また、「ウーマン・リブ」と呼ばれる婦人解放運動にしても、全般的な差別反対運動の一環として出てきている背景には、家事を手伝う女性が急速に減少したため、主婦の家事労働が過重となり、それに加えて子供たちも家庭を尊重する気持が乏しくなって、要するに家庭の中に生きがいを見出すことが難しくなったという事実が存在する。さらに、ヴェトナム戦争が第二次大戦後の国際主義の行きつくところを示したという考えを抱く人びとの中には、

(p. 9へつづく)



平均的アメリカ人

SARUYA KANAME

猿谷 要

神話になった Melting-Pot

きょうは「平均的アメリカ人」というタイトルでお話するわけですが、どうもきょうだんだんお話ししますよになかなかまとまりにくいテーマです。最初から平均的アメリカ人なんてないのだといえればそれきりの話ですれども、私たちのように小さな国の中で、概して単一民族・単一人種、宗教もほとんど同じというような生活をしていると、わりあいアメリカを単一的に考えやすい。そこで何とか平均的な姿を成功しないとしても、手さぐりで少しずつ幅を狭めていくことはできるのではないかと考えたわけです。

これはたとえば去年大統領選挙が実際に行なわれるわずか3、4ヶ月前、7月上旬ごろの日本の新聞を見ると、マイアミでマクガバンが片方の大統領候補に選ばれた前後の状況というのは、ほとんど彼がそのまま当選しかねまじき勢いで書いてあったと思います。ところが実際にはわずか何ヶ月もたたないうちにあれだけ、大きな差が出てくる。そしてそこに私たちの知らない面とか、あるいは平均的アメリカ人というのは、特に私たちの知らない面があるのではないかという気が非常に強くなりました。そこで私は、平均的アメリカ人というものはどういうものか。ほんとうにたった一人を選び出して、これだということはできないかもしれませんが、そうではないものを除去していくことによって考えてみようと思います。

まず、アメリカの melting-pot (人種のるつぼ) というものがいまは神話になったということをはっきり申し上げておきたいと思います。どうしてああいうことばができたかという、たとえばニューヨークのフィフス・アベニューでカメラを据えてしばらく写真を撮っていると実にいろいろな人がカメラの中に登場してきます。人種の点からいってもまるで千差万別なんです。そうすると、よくこれだけのいろいろな種類の人たちが同じ国、同じ町に住んでいるという気がしてそういうこと

が少ないほかの国からみるとやはり melting-pot だという感情が出てきたのだと思います。しかし、melt というのは溶鉱炉みたいに大きなかまの中にいろいろな要素をぶち込んで灼熱させてどろどろにとかして、10種類の要素を入れたけれども、出てくるときにはとけてしまって1種類になっているというのが melt されているということになるわけです。そういういい方からいけばアメリカは決して melt されていない、melt されているとしたらあらゆる人種が混血に混血を重ねて何百年かあとに全く同じ皮膚の色の人間ができて、そしてそれは等しく血液の中に10分の1の黒人の血を持っているというような状態になったときに melt されたということがいえるわけです。ところが実際にはそうではなくて melt されることを拒否する傾向が最近特に強いわけです。たとえば黒人は黒人の文化というものを持って白人化されないことを1つの誇りにする。だからアフロ・アメリカンとかブラック・アメリカンとかニグロ・アメリカンというようないい方をします。だから最近に特にいわれているのは、melting-pot でなくて mosaic である。なるほどそういわれればそうかもしれない。mosaic というのはひとつひとつ違う要素が集まっていて全体として一つの絵を形づくっている。それから salad bowl であるともいわれています。salad の要素を一つ一つみると、タマネギだったり人参だったりトマトだったりする。それはトマトはトマトとしての特色を持ちながら全体の salad という一つの combination の中で溶け合っているわけです。そして一つ一つの特色は最後まで持っている。この意見のほうがはるかにアメリカの現実に近いと思います。だからまず、melting-pot というのは間違いであったというふうを考えてきょうの話をスタートしたいと思います。

一体平均的なイメージというものをどうやってさぐったらいいかということですが、一つおもしろい手があるのです。それはギャラップの世論調査です。これは定期的には毎月、不定期には事件が起こったたびごとに行なわれるもので、ハリスの世論調査と並んで有名な

ものです。このギャラップの世論調査に使われている選択のいろいろな材料ですね、同一の question に対する全米平均のパーセンテージに対していろいろなこまかい分析があるわけですが、この10項目にわたる分析をうまく追求していくと average American というものがつかめるかもしれないというふうに考えたわけです。

ギャラップの世論調査にみるアメリカ人

1. Sex

ギャラップの世論調査によると、1番最初の分析は、同一の質問に対して全米平均、national ではこういうパーセンテージになったというのが出るわけですが、その中の分析が1番最初は sex 別です。sex というのが average American を調べるときの材料になるか、これならないのです。男性と女性しかいないのですから。しかしほんとうに1%でも2%でも多いほうを majority だということだとすれば、現在は女性です。いろいろな調査によると少なくともこういうことがわかっています。選挙権を持っている有資格者を調べると52%が女性である。48対52ぐらいになっている。そうすると男性と女性という sex 別による average はどっちのほうに軍配が上がるかという、majority を調べていくとまず女性ということになる。そういうふうにしていま私が10の分類を考えていて、その10のそれぞれの分類で majority である要素を抽出していくわけです。その10の要素の majority を抽出していき、最後にすべてに majority であったものだけをずっと足してみると、average American が出てくるのではないかとことです。

2. Race

2番目が race (人種) です。これは相当たいへんです。もちろん白人ですけれども、こまかくやるとたいへんなことになるものですからどうやって分けていかかわからないのですが、非常に大ざっぱなアメリカの人種別の統計をみると、non white、要するに白人でない人が14%おります。これはずいぶんはっきりした数字です。残りが white ですから86対14というわけで、これはさっきの48対52とは比較にならないほど圧倒的に白人が majority であるということになるけれども、白人といわれている中でまたしんがあって、そのしん以外のものを除いていったほうがより明確なイメージが出てくる。そういう点で区別すると、1番問題なのは、Anglo-Saxon です。だから Anglo-Saxon でない人たちはどの

くらいいるかという、これはさっきいった白人でない人14%を含めて52%おります。そうすると男女の比率と同じ48対52になります。白人で Anglo-Saxon でないほうが多くなる。それで Anglo-Saxon の中でもさらに native な人たちということになるともっと少なくなる。普通私たちがアメリカの average なり majority なりを調べる場合、パッと目に浮かぶことばは WASP ということばです。この WASP の中で、さらにアメリカで生まれたという人たちは全アメリカ人の3分の1です。そうすると、ほんとうにアメリカの中心になっている人たちというのは、実は全人口の3分の1であって、それがアメリカの権力構造の圧倒的な中心部を握っていたのだということになります。残りの3分の2の人、これもまたピンからキリまであるので、ぼくが最近見た本によると、minority に白人も入れているのです。それで native な WASP を除いた人は全部 minority として分類して、その分類は6種類に分かれております。

まず第1に American Indian、これは1番古いアメリカ人ですね。それから有色のほうだけからいっていきますと、2番目が black American または negro American、その次に一その次にというのは人数の多さによって分けたわけではないのですが、Oriental American、Chinese とか Japanese とか Philippino をいうわけです。その次に Espanic American、スペイン系の人たち、その内訳はスペイン系の Spanish や Mexican や Puerto Rican それぞれが4番目の minority です。5番目、6番目は白人ということに入るのですけれども Jewish American、ユダヤ人ですね。最後がちょっとたいへんで、European American、ヨーロッパ系のアメリカ人、および Near Eastern American、中近東系のアメリカ人、イタリア人、ポーランド人もそれに入る。去年ぼくはコロラド大学へ行って1日おきに学長の部屋へ行ってたんですが、学長の部屋の前に3人 secretary が並んでいる。その secretary の boss がほかに1人いるわけです。その人を通さなければ学長に会えない。学長の secretary には1日おきぐらいに会っていたのですが、並んでいる人の secretary を紹介してくれたことがありました。最初の secretary は3人の中で1番上になっていて、それが純粹のいかにもアメリカ人的なアメリカ人で、名前も Jane Smith という典型的なアメリカ人なんです。2人目の中年の女性が、もうぼくは忘れたぐらいむずかしい名前なんです。L がたくさん入ったり、r がたくさん入ったりする長い spell なんです。ちょっと発音できない。あとから彼女がいなくなったときに、ずいぶんむずかしい発音ですけれども、どこから

来た方ですかと secretary の boss に聞いたら、彼女は Polish だということです。その Polish だといったときのことばのニュアンスが、ぼくみたいな鈍感なものにもわかるほど、そこに1枚のへだたりをおいたいい方なんです。

ボストンにいたときもそうでした。ぼくの apartment の前に、おじいさんにおばあさんが住んでいた。おじいさんの名前がむずかしくて発音がわからない。それでぼくは隣の高校生に、ずいぶんむずかしい名前だけれどももっと簡単にいう方法はないだろうか、どうしてあんなにむずかしいのだろうといったら、いや、あのおじいさんはギリシア系だといういい方をしたときの表現の、いかにも軽べつ的なニュアンスが、何ともいえないものでした。Native な American のほうがはるかにいばっているというのは、アメリカのような家系の浅い、歴史の浅い国では、自分の祖先はジョージ・ワシントンの部下であったとか、独立戦争のときに参加したのだというたいへんなものなのです。

私が4、5年前ニューヨークで apartment をさがしていたときのことで。"Apartment available" と書いてある。だから私は入って行って、部屋があったら借りたいということを doorman に聞くと、廊下の突き当たりが office だというから入って行って部屋があるかどうか交渉しようとする、ぼくの顔を見て、ない、いまきましたという。表に出ているじゃないかという、いや、きましたばかりではずすの忘れたのだということです。最初これを真に受けていました。ところが翌日そこを通るとまた出ているのです。それはニューヨークでも1番 fashionable な場所だったから最初からぼくなんかが行くのはどうかしている場所だったのです。けれども「盲蛇におじず」で、そういうところへ平気で出かけて行って幾日も足を棒に歩いた。最後に偶然ですが、そういう fashionable な場所であるにもかかわらず、35階建ての850世帯入る新しい建物の中の小さな部屋に入ることができたのです。あとで聞いてみたら、入っている人のほとんど全部がユダヤ人で所有者もユダヤ人なのです。ユダヤ人はお金があるけれども他のところでは適当に断われているようです。あなた入っても幸福になれませんよとか何とか妙ないい方をされるらしい。結局ユダヤ人だけが集まるところにぼくも入った。ニューヨークには特にユダヤ人が多いものですから、ニューヨークにいる日系の人たちは、クワイッツァンということをかんにいっていた。9と1を足すと10 (Jew) になる。それで目の前にユダヤ人がいたときに、Jew だという相手の感情にさわるから、あの人にはクワイッツァンだ

というようにいっていたのだそうです。ところが最近はずっとすごくなって、辻さんだといういい方がはやってきているそうです。辻という字は十という字を書いてしんにゅうを書きます。だからクワイッツァンということばがニューヨークであまりにもさかんにいわれるようになってユダヤ人がそういう発音を耳にするようになったのでしょうか、今度は辻さん、これは Jew をさらにあいまいにしたものですけれども、要するにそれほどユダヤ人というのは同じ白人の中に入っていながら区別されている。だからこれはワクの外におかなければならない。

これまで race のことをずっと話をしてきたわけですが、これはかなりつかみやすいのではないのでしょうか。ぼくがこれからお話しするいくつかの条件の中でも一番つかみやすい。アメリカに生まれた人でしかも WASP である、これは全人口の3分の1、これは average American をつかむほかの条件よりも非常にいい条件になり得ると思います。ただし、最近 WASP がいばっていられなくなって、'The Decline of the WASP', WASP の地位が崩壊してくるといふような論文が出てくるようになりましたから、WASP だけでアメリカの average をつかめなくなってきておりますけれども、それにしても崩壊といわれるのは、逆にいえばいままでもそれだけ中心的存在だったということですから、WASP の、生まれつきのアメリカ人というのを重要な要件としてひとつ頭に入れておいて下さい。

3. Region

次は地域という要素で、一体いくつの average がつかめるかという問題、これは一つのおもしろい追求の方法になると思います。というのは、私もそうなんですけれども、日本人がいままでアメリカについてのイメージを抱いていたのは、あるいはアメリカから information が入ってきたのは主として北東部なんです。どうしてか考えてみたら、3つははっきりした条件があるのです。これはいい大学がそこへかたまっているということです。だから日本の学者や学生がアメリカへ勉強に行く場合に留学する大学がどうも北東部に片寄っているということがまず第1に考えられます。

2番目の理由は、日本人がアメリカでビジネスマンとして働いているのは大部分がニューヨーク近辺ですから、ニューヨークは石を投げれば日本人に当たるというくらい日本人が多いところ、だからそういうところからの information がきやすい。

決定的なのは、日本のジャーナリストがニューヨークとワシントンにしかないということです。いまはつき

りわかっているのは、新聞記者やTV関係者約40人がワシントン D.C. にいます。20人がニューヨークにいます。これでほとんど全部です。最近シカゴにどこかが支社をつくっていると聞きましたが、それで大体終わりです。

そうするといまお話しした3つの理由によって、とにかく北東部の information だけが日本に入りやすいのです。

それから、平均的な日本人が2、3週間でアメリカをまわってくる典型的なコースというのは、まずサンフランシスコへ行って、それからシカゴかデトロイトへ行く、それからボストン。みんな飛行機です。それからもちろんニューヨーク、ワシントン、そこまで行ってあと一挙にロサンゼルスに飛んできて、帰りにホノルルに2泊ぐらいして泳いでくるのでしょうか。そうすると、ぼくがいま片寄った、といったところしか見てこないのです。ホノルルはアメリカの平均ではありませんからね。そこでひとつこういう案を出しますけれどもどうでしょうか。この場合デンバーに寄ってみて下さい。デンバーは西部を知るのにはとても都合のいいところだし、1日デンバー見たらついでにロッキー山脈ぐらい、バスで行って少しは見られる。翌日は朝ここからバスに乗ってこの大高原を延々とカンサスへ向かって一日じゅう走る、何にもないところ。これを一日じゅう走ってもカンサスシティまで来ないけれども、途中で飛行場がありますから、そこまで一日じゅう走る。いやになるぐらい走る。何にもないじゃないかというけれども、その何にもないのが、実はアメリカなんで、自分はこれだけ走ったけれども、地図で見たらこれだけにしかあたらない。私はそれはどれだけアメリカを知るいいチャンスになるかわからないと思うのです。

そういう点ではぼくは average のアメリカというのは北東部ではないと考えていいと思うのです。それではどこかということです。ギャラップの世論調査では地域は4つにしか分けていない。East と書いてある。East というのはいま私が話したように、ワシントン、ボストン、ニューヨークといった地域です。South、南部が2つ目の地域、それから Middle West、中西部、あとは西部、こういう4つにしか分けてない。どこが一体平均的アメリカであるかというのはなかなかいいにくいけれども、しかしこういうことはいえます。population の center はどこにあるかということです。これは非常におもしろい統計になると思います。それは10年に1回行なわれる国勢調査でアメリカの人口分布の中心というものを指定します。そういう指定のされ方をみると、国勢

調査が行なわれた第1回目はジョージ・ワシントンが就任した翌年、つまり1790年。そのときの調査では、驚いたことにはボルチモアの東側でした。ここが人口分布のまん中だったので。驚くべきことです。人口分布の東西南化の平均という意味です。それが10年間に1回ずつだんだん西へ、ほとんど真西に動いております。真西に動き続けて、この20~30年間、真西からちょっと西南の方向に下がり始めて、おととしの国勢調査ではセントルイスの東まできております。セントルイスの東が現在の人口分布の中心です。そうすると、イリノイがアメリカの人口分布の中心になっているということです。まだミシシッピー川を越えてはいませんが、その付近ぐらいまできています。これはかつてエイブラハム・リンカーンが住んでいたところの近くです。リンカーンが住んでいたときはフロンティアといってもいいくらいのところだった。それが現在、全米人口分布の中心的なところになっている。最近のこのあたりの人口の急速な増加のためにちょっと南側に寄りかかっておりますが、要するにセントルイスの東側まで人口分布の中心がきている。イリノイ州は4つに分けた分布では Middle West になる。そうすると、人口分布の地域的な点からいうと中西部だという結論になります。

4. Education

さらにほかの要素について考えていくことにしましょう。教育、education という要素がある。education という要素でアメリカ人の平均像はつかめるだろうかと思ってみると、これはつかみにくい。大学まで出ている人の数がだんだん多くなっていきます。だからやがては平均的アメリカ人像というのは大学卒業生となるかもしれませんが、まだそこまでは行ってない。ギャラップの世論調査によると、high school というのがやや多いだろうと思います。やがてバランスがくずれるかもしれないけれども high school または college 出身というのが平均的なアメリカ人という一つのイメージを持っていいだろうと思います。

5. Occupation

それから occupation、職業で average がつかめるか、これはつかみにくい材料です。これは4つにしか分類してないのです。1番目が professional と businessman、2番目が white collar、3番目が farmers、最後が manual、要するにその他全部ひっくるめてというわけですが、そういうふうに分けてみると、professional と businessman が平均的アメリカ人ということはいえ

ないだろうし、white collar のほうがはるかに平均的アメリカ人に近いでしょう。農民の数は意外に少ないのです。大農法が徹底するにつれて、ますます平均的アメリカ人は農民ではなくなりつつあります。これから伸びていくパーセンテージのことを考えていくと、white collar がやや平均的アメリカ人を代表するイメージに近いのではないかと思います。

6. Age

さらにギャラップの世論調査ですつと続けていきますと、age、年齢というものが出てきます。これはいまここでは議論することはできないだろう。なぜかという、平均的アメリカ人を年齢で考えるということはちょっとできない。どの年齢が1番分布が多いかということを考えてもあまり意味がないかもしれない。ですからこれは飛ばすことにしましょう。

7. Religion

たいへんなのは宗教ということです。去年の1月のギャラップの統計によると1955年には定期的に最低1週間に1回教会に行っていたという人が49%です。それから確実に少しずつ、実に正確に下がって行って、1971年は40%になりました。そうすると平均的アメリカ人というのはおもしろい数字が出てくるのではないのでしょうか。40%の人が毎週定期的に教会に行っているということはもはや定期的に教会に行っている人が majority ではなくなくなったということをあらわすわけですから、表面的にみれば教会に定期的に行かない人が平均的アメリカ人になったということがいえるわけです。ところがこれは私たちがほんとうはそう考えてはいけない点もあります。なぜかという、私たちは自分たちのことを考えてみなければいけない。私は高等学校のときにキリスト教の寮にいて、順番が回ってくるとお祈りをしなければなりません。しかし洗礼を受けていないから正式な Christian ではありません。だからぼくはアメリカへ行ってそういうことを聞かれたときは、Buddhist だといいます。

ところが、何年前の話ですが、ある人の家へ1週間ぐらいやっかいになったことがありました。その家族は熱心な Christian でしたから、朝御飯を食べるときにテーブルにつくとみんな一緒になって手を握り合せて主人がお祈りするわけです。いよいよぼくがその家をたつ日「ミスター猿谷、きょうお別れだ。最後の朝だから今朝はあなたがお祈りをしてくれ」というわけです。突然だったのでぼくはびっくりぎょうてんして、「申しわ

けないけれども私は Buddhist なんだ」といったら、相手は「もちろんそうだ、それはわかっている。あなたは Buddhist だから Buddhist 流にお祈りをすればいい」ぼくはもう周章ろうばい。なぜかという、Buddhist、仏教徒であるということは信者なんです。信者であればお祈りもするでしょうし、お寺にもしょっちゅう定期的に行くだろうとアメリカ人は考えるわけです。自分たちの生活から考えると、それでぼくはそのときに恥じをかくというよりも一種の軽べつされるに等しい状態に陥ったわけです。だから「ぼくは宗教はないんだ」と最初からいうべきなんです。しかし、もし日本人が毎週日曜日にお寺に行くことになったらお寺はいまの数では足りないのではないのでしょうか。どのお寺も満員になってしまうでしょう。平均的日本人は年に何回お寺に行くのでしょうか。そう考えてみると、1週間に1回教会へ行く人がいまだに40%いるということは実はぞっとする数字なんです。アメリカ人は少なくとも文明国家と称される中で宗教を信ずる最も熱烈なる国民です。これは4年前のギャラップ・インターナショナルの調査ですが、「天国の存在を信ずるか」という質問に対して、いわゆる文明国家といわれる国の中で最高の数字をあげたのはアメリカでアメリカ85%、1番少ないフランスが39%です。日本人はこういう質問に対してどう返事をするのでしょうか。「死後の生活を信ずるか」という質問に対して信ずるとするのが最高のアメリカの73%、最低、これもフランスで35%です。これをみると日本人のほうが minority なんじゃないかという気がしてくる。あまりにも非宗教的という意味で日本の考え方のほうが世界からいうと平均的でない。世界はもっともっとまだ宗教的であると考えていいのではないかとさえ思えます。

そういうように平均的アメリカ人というのは、毎週1回教会に出る人はたしかに減っているけれども、いままだ40%いるということと、死後の生活、あるいは天国の存在を信じている人が70%、80%いるのだということです。そういうことを考えると平均的アメリカ人は非常に宗教的であるという結論を下していいと思います。特に Catholic のほうがそうです。Catholic はアメリカ全体の26%しかおりません。だから Protestant のほうが平均的なアメリカ人ですけれども、どちらのほうがより一生懸命に教会に出ているかという、Catholic です。全米平均40%を宗派別にすると、Catholic では57%の人が毎週定期的に教会に出ています。Protestant は37%です。だからこういうふうと考えていいのではないのでしょうか。平均的アメリカ人は金曜日の夕方から週末に入る。そして家族連れでキャンピング・カーか何かを連れ

て郊外のセカンド・ハウスや、レクリエーション施設へ行ってキャンプをします。そこに金曜日の晩泊まって、土曜日1日遊んで土曜日の夜おそく帰ってくる。そして日曜の朝はゆっくり起きて教会に行く。教会はみんなが顔を合わせるところなんです。40分か50分教会へ出て、教会の行事が終わると、あと牧師が出てきて、玄関でみんな集まってきた人たちに握手をします。そうすると1週間ぶりに顔を合わせた人たちにとっては教会の前の階段、あるいは前の広場が、そのまま1週間に1回の社交場になるわけです。日曜日の午後はロッキングチェアにでもゆっくりと腰をおろして、そばにウイスキーを置いて、本を読んだりアルコールを飲んだりして夕方を迎える。これが、ぼくの主観的なイメージを少し含めてですけれども平均的なアメリカ人。だから5日制でなければそれはできない。土曜日にも働かされて、土曜日の夕方くたびれて帰ってきたんじゃ、教会に行く人の数はアメリカだって減ると思います。平均的日本人はだんだんアメリカ的になっていますけれども、まだ過半数までいってないと思います。やはり平均的日本人の楽しいのは土曜日の午後ではないでしょうか。

とにかく宗教という点は average としては相当宗教的なんだと、そして Protestant が中心であると考えていただきたいと思います。

6. Politics

politics, 政治では平均的アメリカ人像というものは出るか。これはぼくの独断でいえば出ません。なぜ出ないか。たとえば去年の選挙はアメリカ史上3番目か4番目というニクソンの圧倒的な勝利なんです。数字の上では、61対38という驚くべきものです。しかしそのアメリカでも指折り数える大差というのが61対38という数字なんです。ニクソンが5年前に勝ったときはどうかというと、勝ったほうと負けたほうの差が1%以内です。ハンフリーとニクソンが1%以内ということはほとんど同点ということです。要するに共和党を支持した人と民主党を支持した人が5年前の選挙ではほとんど同数だったわけです。それからいまから10年あまり前のニクソン対ケネディ、これも1%というわずかな差です。いまぼくは何気なく話したけれども、その話からある結果が出てくるんじゃないませんか。ニクソンはいままで大統領選挙を3回やっているわけです。1回は1960年、2回目は1968年、3回目は去年、去年のあの盗聴へさしかかるまでの状態を考えてみると、彼は2回の大統領選挙をやっている。その2回とも差は1%以内であったということです。そのうち1回はケネディに負け、1回はハンフリー

に勝った。このことは彼の骨身にしみたと思うのです。そうすれば彼は再選されるためにはどうしなければならぬかということをお早から、大統領になった直後から考えるのではないのでしょうか。それ以上はぼくはうっかりしたことはいえませんが、とにかく同点ぐらいが多いということです。それから去年の圧倒的に勝ったニクソンといっても、そのときのニクソンの61%というのは投票した人の61%です。あれは大体60%ぐらいしか投票しなかったと思います。有権者全体の中からみれば40%にもならないかもしれない。そうすると、共和党支持であるとか、民主党支持であるとかということによって平均的アメリカ人像はつかめないということになるわけです。ですから politics という点では平均的アメリカ人像はつかめない。

9. Income

income (収入)、これはわりあい手がかりになりやすい。そしてわりあいぼくたちにわかりやすい。まず、上流階級と下層階級を除く。アメリカという国は世界で最も中産階級の多い国だということになっています。中産階級こそまぎれもない average American ということになるのです。そして middle class のさらに中心をみようとするとうどういうことになるかということ、普通は middle class は upper middle class と lower middle class と2つに分ける。けれども3つに分けるならいいけれども2つに分けるのではほんとうはぐあいが悪い。まん中というのはつかみにくい。だから普通は上流階級、それから上流中産階級、下層中産階級、下層階級というような4つの分け方をして、そのまん中の2つを足して大ざっぱに middle class といういい方をしているわけです。ところが去年、旅行しているときに非常にいい数字にぶつかった。ある地方の新聞で、アメリカの全家庭の平均収入が去年初めて1万ドルをこえたということが書いてあった。家族単位です。これはアメリカ史上最初というのです。ずいぶん多いです。しかし、これには注意しなければならない点が2つあるのです。一つは、アメリカの家庭は圧倒的に共かせぎが多いということです。アメリカの女性の43%は働いています。日本ではファミリー単位イコール個人単位というふうにすぐに考えがちですけれども、アメリカはそうではないんだからそこを大きく割り引きしなければいけないわけです。だから個人単位でいうと income はうんと減るわけですよ。

それからもう一つ決定的な注意を要する点は、日本人が想像できないような超大金持がこの統計の中に入って

いるということです。だからこういう統計は average よりは medium をとらなければいけないということが繰り返しいわれております。千ドル単位ぐらいに分けて、何千ドルの収入のものが人数にすると1番多いかというふうな、medium のほうをとると8,000ドルぐらいだろうというのです。これは家族です。だから1人の収入はもっと減ることになります。

income のついでにお話ししますと、average housing condition. これは新聞の広告を眺めていると、どの家が何万ドルなんて書いてあります。それを見ると、大体土地というものは家についているものとアメリカ人は考えております。日本は反対で、土地を買うほうがたいへんだから。まず土地を買ってそれに家を建てる。ところがアメリカは使うお金の大部分は土地ではなくて建物なんです。建物についているいくらかの土地というふうにしかならないから、土地の値段なんて頭にない。そういうふうにして考えると、average のアメリカの家というのは、大体 rest room が2.5ぐらいではないかと思えます。日本でいうと、トイレとお風呂としかもバスタブがついている、そういうセットを1.0と考える。それで2.5というのは、そういうセットが2つあって、そのほかに0.5というのはシャワーがある。普通の income でそれぐらいの家は買えるか、あるいは年賦で比較的楽に住むことができる。だから income のわりあいに住宅状況が決定的に違います。さらに公共料金の違い方、これもずいぶん大きなものですけれども、去年ぼくが行って住んだところで驚いたのは、建物全部の冷暖房費、台所で使っている光熱費、ガスにしろ電気にしる全部含めて1か月平均20ドルぐらいです。ずいぶん安いものです。日本なんか暖房冷房を1部屋やりっぱなしにしたら1部屋でもたいへんな値段になる。ですから、ぼくたちがいっている income の数字の差はわりあい少ないけれども condition は相当違う。平均的アメリカ人を頭に描く場合ですね。

10. Community Size

最後に、住んでいるときにどういう場所に住んでいるかという community size という問題、それが最後の条件として残ってきます。これはいまは大都市及びその周辺に住むのが平均的アメリカ人といっていると思えます。しかし、ギャラップの世論調査によると、city に住みたいという人は10%強です。大都市の生活がアメリカでいかに住みにくくなっているかということがわかる。だからいまアメリカで大部分の人が大きな都市に住んでいるが住みにくい、これから住みいいところへ移れ

るとしたら実はもうちょっと小さな町、もうちょっと郊外へ住みたいというように、たとえば芝生でかこまれた白い清潔な家というようなイメージを平均的アメリカ人が持っているということはいえると思えます。

平均的米語

さて、大急ぎで10の条件をあげましたが、もう一つ、ぼく自身のをつけ加えさせていただきますと、平均的アメリカ人のイメージをさぐる条件の一つとして、これは全くぼくの考えですが、ことばの問題があります。南部で旅行しますと、生粋の南部人のしゃべっていることばというのは実にわかりにくい。ぼくは初めて南部へ行ったときにアトランタに泊った。アトランタというのは南部で1番の大都市で、そこで sightseeing buss に乗った。バスのドライバーが中年の男で、ドライブしながら説明してくれるのですが、southern accent なので全然わからない。ダラダラとゆっくりしゃべって、一つ一つの単語のきれ目がないように聞こえる。逆にケネディがしゃべるような Bostonian のしゃべり方というのは相当早口ですが、単語、単語のきれ目が耳なれてくるとわかるのです。そこでぼくはある時アトランタの町のまん中でわざわざ老人に道を聞いたことがあります。そうしたらこれがやはりわからなかった。大学で若い学生相手にしゃべっているときは南部だってわかるのです。そうすると、ことばで平均的なアメリカ語というのはあるのかということがひとつの考え方になるのではないのでしょうか。

ぼくはかつてコネチカットあたりでブラブラ歩いているときに、ある museum の入口で、たまたまいろいろな州の人がいたものですから、平均的アメリカ語をしゃべる地方はどこかといって10分間ぐらいしゃべり合ったことがあります。10分間では結論は出なかったけれども、それでも、まあここが一番間違いないだろうといって出た結論が、州でいうと、オハイオ、インディアナ、イリノイでした。要するに中西部といわれるところです。これは学問的な討論ではありません。私がそういう問題を出し、アメリカ人同士が討論して私はそばで聞いていただけのことです。そういう結論がそのとき出たわけです。

それからもう一つ条件を考えますと、これは偶然かもしれませんが、過去数回の大統領選挙を通じておもしろい結果が1つ出ているのです。この州で勝つと必ず大統領選挙全体で勝つという州があるのです。ほかの州ではそういうことがない。必ず勝つという州はイリノイなんです。

す。そうすると、さっきから私がいっている中に人口の中心がだんだん西へ向かって移動して、現在イリノイにあるということがありました。そうすると、平均的アメリカ人という、少しおぼろげながら出てきたのではないのでしょうか。要するにさっきから話している平均的アメリカ人というのは実にやっかいな問題であって、こういうものですよとって結論がほんとうはビジャと出ないのです。

アメリカの多様性

ぼくはかつてあるところで、アメリカという国はどういう国であるかということについてしゃべったことがあります。そのとき条件を6つあげたのです。その6つというのは実に矛盾している。ぼくがあげた順序によると、1番目にアメリカは democracy の国であるといつて、democracy の説明をした。2番目に pragmatism の国である。3番目に anticommunism 反共の国である。この点はニクソン大統領がモスクワへ行き、北京へ行っても本質はそれほど変わっていないと思います。かつては共産主義を不倶戴天の敵と考えていた。しかし communism による国があって、その世界が別にある。それはそれなりにやっているということ認めざるを得なくなったのが現在の段階であります。だから反共の国であるという点では変わらない。4番目、神を信ずる国、これはさっき話したとおり、ぼくたちからみると想像できないほどアメリカというのは神を信ずる国である。5番目、帝国主義の国。この帝国主義がいかに資本主義と結びついて軍産複合体制をつくり上げているかということは改めていうまでもないと思います。最後の要素として racism の国、わかりやすくいえば人種差別主義の国、白人優越の国といつてもいいかもしれない。

以上の6つの条件をあげた。ところがそれぞれぼくは説明したからいいけれども、説明しないで条件を6つあげたのでは皆さんは当惑なさるかもしれない。なぜかという、ずいぶん矛盾していますから、矛盾している要素をみんなそれぞれ持っているのです。国として持っているならば個人として持っているのもやむを得ない。これを個人として考えてみるとあることがいえるかもしれない。平均的アメリカ人というのはどこかの点でぼくたちが持っているよりは民主主義的な要素があると思います。たとえばアメリカ人のものの発想法は下から上へです。上から下へではないのですから。ぼくたちはどうも、まず政府があって、政府が上から命令するような形にならされている。アメリカ人はそうではなくて、自分

の生活にちょっとやりにくいということがあると、そのやりにくいことを変えるためには、ここを変えましょうとって自分の住んでいる地域で署名を集める。署名がその町の有権者の5%以上になればその町の市議会に議案として提示できる。それで2年に1回の選挙、つまり、市長選挙、下院議員の選挙、そういうときに合わせてそういうこまごましたことを一緒に投票するのです。だから下から上へというものがまだ生きている。だから、平均的なアメリカ人にはものの考えに下から上への考えがある。それを上から下への日本人がみていると、何となく democratic にみえます。

しかし2番目の pragmatic であるということは、悪いほうに行き詰めた形が現在の盗聴事件のような、勝てばいいんだというようなことになるかもしれない。たとえば原爆の写真を何年前にあるアメリカ人が日本に売り込みにきた事件がありました。そして日本が非常におこったことがありましたが、これも pragmatic なアメリカの考え方によればあたりまえのことであつて、特別のアメリカ人ではない。平均的なアメリカ人の考え方です。だからとにかく pragmatic なのがアメリカ人なのです。

3番目は共産党ぎらい。これもまず平均的アメリカ人の中に入れていいと思います。

4番目には神を信じている。

5番目には帝国主義である。資本主義である。要するにベトナムについてのものの考え方も、最近は相当変わってきたけれども、やはりアメリカが1番強い国でないと困るという、アメリカ第一主義の考え方。あたりまえです。どの国だって自分の国が1番いいに違いない。そのエゴが強くあらわれる。

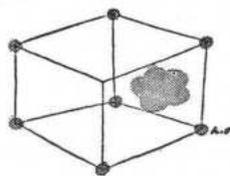
それから人種差別という概念からなかなか脱却できないアメリカ人。

そういうふうを考えますと、さっきから話していることとおぼろげながら平均的アメリカ人に近いイメージというものは出てきたかもしれないですね。そういうものをふるいにかけていって残ったものだけを積み重ねていくと平均的なものが出るということになるわけです。

* * * *

最後にまとめますと、男性、女性というのでは大したことが出てこなかった。教育というのでは high school または college 卒業である。やがて大学卒業というレベルが average として出てくるかもしれない。職業ではまず white collar といつてもいいのではないかと思ひま (p. 58 へつづく)

ウォーターゲートをめぐって



KUNIHIRO MASAO

國弘正雄

このところ私は、来日中のアメリカ若年地方議員十数名、日米学生会議に出席の大学（院）生数名ならびに何人かの小壮ビジネスマンに対し日本の社会政治経済情勢について、オリエンテーションを行なうことを依頼され、小浪充東外大助教授（経済学）、浅野輔国際商大教授（政治学）らの同僚とともに、前後数回にわたりのべ十数時間を費やした。ことは日本に関連したが、彼らの理解を助けるため、アメリカとの比較や対照がたえず意識的にこころみられた。

会合は別々にもたれた。しかしいずれの場合も、アメリカ側からウォーターゲートに関する日本側の反応が求められた。帰国したら必ず聞かれるに決まっているから、というのがその前置きであった。例のアーヴィン公聴会ほぼその前半の証言をおえ、事件は一応山を越したかにみえていたが、少なくとも物を思うアメリカ人の側におけるこの事件の衝撃の大きさと、海外の反響への関心の高さが垣間みられた。彼らの思いつめたような、おずおずとした問いかけは、ある種のこわいもの見たさの趣きをすら呈しており、彼らがどれほどこの事件で傷つき、その自信にひび割れを生じているかを物語っていた。市井のアメリカ人ですら、好んで American way of life ということばを用い、American dream を得々として語っていた10年前には、想像できなかつたほどの弱々しさであった。ただ、いったん話が始めると、せきを切ったようにさまざまな意見が吐かれ、談論は風発した。そしてその多く、とくに若いもののそれはシニカルであり、悲観的であった。

以下、彼らとのやりとりの主な部分を紙上構成してみることにする。むろん別途にもたれた会合であったし、詳しい記録をとったわけでもないの、verbatim な報告ではない。が、この事件をめぐるアメリカの40代、30代、20代の大学（卒業）生レベルの反応の一部をお伝えできれば、幸いである。

私 さいしょにこちらから訊ねたい。単刀直入にいうが、なぜあなた方はニクソンのような札つきの男を大統領

領に選んでしまったのか。それも2回にわたって。私個人としては、故ケネディの反ニクソンのスローガンではないが、「あの男から中古車を買う気には」どうしてもならないのだが。

学生A ぼくはニクソンなどに入れはしなかった。だがあんなものに。（同様の発言多し）

学生B 私の州——（注 マサチューセッツ州）は、ちゃんとマクガヴァンに行ったわ。

政治家A 私は共和党員だが、72年の選択は全く不幸なことだった。マクガヴァンはあまりにも民主党の中心勢力から離れていた。したがって、民主党支持者といえども彼に投票するにはためらいを感じた筈だ。

私 では68年はどうだったのか。たしかにシカゴの民主党大会の惨状はあった。民主党はベトナムを背負っていた。神様でも民主党から出馬したら勝てっこないともいわれていた。死児の齢を数えるようなものだが、なぜハンフリーを勝たしてやらなかったんだ。彼ならもう少しマシな……

学生C（私をさえぎって）たしかに彼なら、より小さな悪だったと思うし、その意味で後悔しているが、でもぼくはそのときには投票権はなかったんだ。

学生D なあに、どっちもどっちさ。ぼくらはどうせ政治なんぞに期待をかけちゃいないさ。ほら、よくいうだろう、政治なんてもっとも汚ないビジネスだとさ。

私 それは判る。君たちの政治、とくに国レベルでの政治に対する無力感やシニシズムはね。しかし伝統的なアングロサクソンの political culture は、より小さな悪 (lesser evil) を選ぶという点に特長があったように思うのだが。絶対善とかユートピアなどありはしない、という大人の前提の上に立って、与えられた選択の中で、より大きな善というよりは、より小さな悪、つまりは相対的な善をとることによって漸進的な進歩を目指すという思想だ。その点、日本とはちがっていたんじゃないかな。われわれはとかく政治に聖職を求めようとし、現状がそれと隔たるところがあまりに大きいことに絶望し、いわば自らの幻想に敗れて、政治に無関心もしくは

シニカルになりがちなんだ。いや、シニカルというより無感動というべきかも知れないが。

政治家B 一般市民の政治への参画観は、アメリカでも国レベルに関してはもはやない。あまりにも巨大にすぎ、市民として何をどうやったらよいのか途方に暮れ無力感にさいなまれているのが実情だ。ただ身近な地方政治への関心はむしろ増大している。去年の選挙のときだって、ワンサイドゲームが予想されていたからでもあるが、大統領選はそっちのけで、関心はもっぱら州単位の住民投票の結果いかに集まっていた。ボルノをどうするかとか、ね。

学生C 64年のジョンソンとゴールドウォーターのときも同じだった。なにしろ不毛の選択だったんで。

私 ところで、感想を一つと一点訊ねたいんだが、一つは、ウォーターゲート事件は、すでに昨年の大統領選の前に一部ではあるけど報道されていた。それもタイムやニューズウィークのような一般誌においてだったから、かなり知る人ぞ知るだったのではないか。にもかかわらず、そのことがアメリカ人の投票行動に寸毫も影響せず、あんな地すべりの大勝を許してしまったことについてだ。なにかアメリカ人の moral fiber に大きなひびが入っているのではないか、という点だ。

他方、質問だが、64年にしても去年にしても、ブローガーの *The Party is Over* ではないが、アメリカにおいてすら政党は終えんし、その機能はなえしほみ、かくして文字どおり政党政治という宴げはおわってしまったのではないか、という気がしてならないんだ。ゴールドウォーターにしても、マクガヴァンにしても、それぞれ共和党民主党の既存のわくの外から出てきている。その点をどう評価したらいいんだらうか。

学生A あなたの感想についてだが、たしかにぼくらはすでにあの事件のほぼ全貌は、去年の9月ごろには全部知っていた。アングラ新聞や学生仲間の口コミで伝わっていたからだ。だから、一般の紙誌が報道しはじめたときも、ちっとも驚かなかった。

学生E ぼくもそうだった。ただ、moral fiber なんということばは、一部の道学者流を除いて全く死語になっちゃってるね。古い、古い。そんなことを口にしたら、軽蔑されるか、動機を疑われるかのどっちかだから、われわれに対するときはよした方がいいよ。とくに政治についてはね。政治なんてしょせんは悪漢の巣さ。

ビジネスマンA 二大政党のどちらかに所属し、政治活動をやることは、アメリカでは有意義なことであると伝統的にはみなされてきた。ところがさいきんでは、既存の政党に肩入れをすることは、あまりカッコのよいこ

とではなくなりつつある。なにかよからぬ動機や目標があるのではないかと、白い目でみられるのがオチだからだ。知識人や専門職の多くはノンポリ化している。さらばとって、二大政党以外の政治活動に入りこむことは、危険視されたり、破壊的な活動に加担しているとみなされたりする怖れがある。それにウォーターゲートにしてからが、みんなの世界でもやっていることで、ニクソンが悪いのは、バレたことだ、という意見もかなり強くある。

私 おやおや。つかまったから悪いってわけだな。もっとうまくやればよかったのに、ということだな。『菊と刀』のルース・ベネディクトじゃないが、欧米を *guilt culture*、日本を *shame culture* と二分するテーゼは破産したってわけだ。

政治家D いまのビジネスマンの見解にぼくは組さないな。一つには、日本と比べた際には、どうやらまだわれわれの方がノンポリ化の度合いは低いように思う。全国レベルであれ地方レベルであれ、政治以外の人士が、政治や行政にさまざまな形で参画している例は決して多くはない。現にわれわれのグループの中にも、専門の分野で博士号などとり、教職その他にあったものが、一転して政治の世界に入ってきたものが何人かいる。職業の移動性 (mobility) はアメリカの方が大きいとよくいわれるが、その中には政治への、もしくは政治からの移動性も含まれている。

私 ハーヴァードの助教授から、フォードの社長になり、ケネディの求めに応じて国防長官に就任、いまは世界銀行の総裁になったマクナマラのことは、日本でもかなり知られている。

学生C ぼくの大学 (スタンフォード) の経営大学院の Dean も、フォード社の元社長だよ。

政治家D それから政治は元来きたないもので、ニクソンの罪はあばかれた点にあるというシニカルなみかたについてだが、たしかに政治に裏取り引きや詭弁や策を弄する点はある。ほかの世界でも同じだといえばそれまでで、その点ではぼくもあなたの moral fiber 論に賛成なのだが、ただ今回のウォーターゲート事件は、さしもの政治の常識をすら遙かに超えた弄劣かつ阿漕なものだったことは事実だ。しかもハンフリー氏がワシントン・ポスト紙への寄稿文の中で憤っていたように、それらの卑劣な手段が、政治や政治家を日ごろから下等なものと見くだし、自らを一段高いところにおいてきた法律家や広告代理業者やPR屋の手によって、先例のないほどの熾烈さで行なわれた、という点を見逃してはならない。もし政治家が手がけていたとしたら、あそこまでゲ

ームのルールをふみにじりは絶対にしなかったと、あえて断言する。ニクソン再選委員会というのは、共和党とは別個の、一種の独立した私的機関で、そこで勢威を振っていたのは政治にはズブの素人ばかりだった。

私 私的な機関がもっとも公的であるべき分野であれだけ力をもった点や、ルールなしのゲームがとにもかくにも強行された点こそ、政党機能の衰弱化現象がみられるのではないかとさっきの話に後もどりするようだが。

ところで私はウォーターゲートにかつての冷い戦争の後遺症をみるものだ。例の cold-war mentality というのがまだ残っているというか、敵か味方かという二分法のもつおぞましきは、明らかにダレス外交の親米か反米か、客共か反共かという冷戦構造と関連があるように思われる。敵を打ち負かすためにはどんな手段も是認されるというね。冷戦外交の荷い手であった CIA や FBI が、ウォーターゲートで使われた、というのも象徴的な気がする。何か意見やアプローチのちがいを、敵か味方かという単純な物差しに還元するというか、そしてひとたび敵と決まったらさいご、仮しゃくなくどんな手段を使ってやっつけても構わない、というね。

例の政敵 (political enemy) のリストはその象徴的な表現ではないだろうか。実はこのことはある週刊誌のコラムに英文の実例をあげて書いたばかりだが (注: ST 紙の Kunihiko's Americana 139), 政敵ということば自体、第三者が記述的に使うことはあっても、当事者が相手方をこう名ざして呼ぶことは少ないのではないか。

政治家 D そのとおりだ。あれはほくにもショックだった。ただ、あんまりお粗末すぎて、いまではあのリストにのっていることは一つの地位の象徴 (status symbol) になっているがね。のらなかった有名人がショックを受ける番だよ。(笑)

私 自分の愚かさを笑いとばすというのが、英米流のヒューマナーの感覚だからね、その点はまだまだ健全なんだろう。(笑) ただ冷戦構造についていえば、ニクソンはいわばその落し子だという点がある。反共の闘士としてヒス事件で売り出したことが、彼の今日をあらしめたわけだし。ただこれもさっきのコラムで引用したんだが、例のヒッケル元内務長官ね。ニクソンの古い盟友で、さいごには彼に解職された男だが、そのときのシーンを描いた個所に、「なぜニクソンが私のことを enemy とみなすのかついに判らずじまいだった」という下りがある。政敵リストは、ヒッケル解任のときにすでに胚胎してたので、ニクソンの個性ということもあるのではないかと。冷戦の後遺症に加えてだが。

政治家 D そう思う。あなたはマサチューセッツ工科

大学のマズリッシュの本を知ってるか。

私 ああ、『ニクソンの精神分析』も銘うってさっそく翻訳が出た。あれは労作だと思うな、Nixonology のね。

政治家 D あそこまで深層心理にわたって見とおされちゃ、公職にあるのもまた難いかな、と同情すら覚えるのだが(笑)、どうもニクソンの政治スタイルには、彼の情緒的不安定の投影があるようだ。不幸なことだが。

私 しかし、あなた方にはまだだれを選ぶかについて発言権がある。われわれにはないんだ。しかもアメリカ大統領の一挙手一投足は、われわれにも深刻な影響を与える。「代表権なき破壊」(annihilation without representation) はやり切れないからな。「代表権なき納税義務」(taxation without representation) に反抗してアメリカを建国したあなた方には、よく判ってもらえると思うが。

学生 C われわれに発言権があるって! そりゃ、一票はあるさ。でも八千万分の一だけ。それに選挙なんて、直接選挙とは名ばかりで、みんな決められた (fixed-up) お祭りさ。民意の反映なんてもんじゃないんだ。

学生 B それに、最終段階にいたる以前の例の予備選挙 (primary) にはわれわれはほとんど無関係だわ。みんな古狸のプロ (old Pro) がしくんじゃうんですもの。

私 予備選挙っていうのはほくらにもよく判らないんだが、たとえばマクガヴァンが民主党大会で指名された背景には、若者や婦人や黒人などの代議員が数多く選ばれた、という事情があったのでは……

学生 B でも、マクガヴァンを指名するようにしむけたのは、ニクソン一派でしょ。ウォーターゲートでそれがはっきりしたじゃない。マスキーやケネディが出たら勝てないかも知れない、っていうんで。

学生 F それに、マクガヴァンだって、信用できないんだ。くるくる猫の目みたいに立場を変えてさ。ほくもさいしょは随分とやったけど、あとではすっかり幻滅しちゃったね。ほら、ハルドマンの下にいたストローンとかがいてたろ。政治なんぞからは遠ざかれ、というのが最大の若者への助言だってさ。もう、ウンザリしたよ。

学生 A ただ、ニクソンやとり巻きの資質の低さ、つまりニクソンの体質自体を無視できないとほくは思うな。それを過大評価するのはまちがいだけど、ほくはもう少しアメリカの政治制度には期待している。より小さな悪を、論だ。

私 その点は賛成だ。私も5月と6月にアメリカに行って、ニクソン要路の何人かと会ったが、彼の任命した

政治職の高官の程度の悪さや倣岸さには一驚した。テキサスの石油成金のおっさんが、国防次官だったりしてね、何も知らないのに日本の軍備強化について妙なことをしゃべったりしてね。どうせ山ほど政治献金してポストについたんだろうが。

ところであなたの方の話を聞いていて、いくつかの感想をもった。政治への絶望がとくに若い諸君にかくも根深いのにはまず一驚した。大きな、しかも変化のスピードが早く、価値観の多様な国をつかさどっていくことのむずかしさに、いまさらのように打たれた、ともいえる。日米に限らずだ。でもなにかこの不幸な事件から、新しいものは出てこないだろうか。たとえば、アメリカの建国の理念である三権分立 (separation of powers) や抑制と均衡 (checks and balances) の回復、あるいは拮抗力 (countervailing force) の復活は望みえないのだろうか。

もちろん、私にもたとえば三権分立という考え方が、ニュートンの古い宇宙観や世界観にもとづくものであり、いわば量子力学的な今日の現状にはそぐわなくなっているのかも知れない、という危惧はある。また、三権の中で行政の力が肥大化するの、今日のような複雑かつ流動的な時代には世界的に不可避なことであり、行政自体が高度に専門化していることもこれにからみあってくるだろう。それにアメリカ国内の一元化が進み、国際的にもアメリカの比重が増すともなっていて、中央政府の行政の長としての大統領(職)の大きさも増大しよう。加えて、他の二府に比べて大統領職が秀れてパーソナルなものであることを思うと、大統領の権能の巨大化は無制限のかも知れない。いまの合衆国大統領の権能ときたら、シーザーとジンギスカンとナポレオンを合わせた以上だものね。その肥大化を抑制するものは、究極的には彼個人の自制しかないのではないかとすらいえるほどで、だからこそよけいにそのポストに人を得なければとんでもないことになると思うのだ。でも今回の事件を通じて、ふたたびモンテスキューや建国の祖たちの理想がよみがえってはこないだろうか。

学生D それは甘いと思うな。なるほど、立法府の行政府ないしは大統領(職)へのチェック機能も多少は増すだろう。またニクソンですら少しは大人しくしてるかも知れない。でも、あの tricky Dicky (注: ニクソンの仇名。ツル賢しいディック) のことだもの、いつまでも猫かぶっちゃいなさ。なあと、もうちゃんと次の手は考えてるさ。

私 たとえば

学生D 国外で点数をかせいで国民の目をそらそうと

ELEC BULLETIN

したり、それにひっかけてアメリカ人の盲目的な愛国心とやらに訴えたりさ。たとえば、ブレジネフの訪米もそうだし、周恩来の訪米いや国連訪問というべきかな。ちょうどかつてのカストロのようにもありうるだろうし、近く予定されている田中訪米だってその一部だと思ふよ。とくに日本にはきびしいんじゃないかな。日本経済のアメリカにおける過度な存在 (overpresence) にいらしているグループもあることだし、その連中にあめをしゃぶらせて、味方につけるとかね。内政上の困難を外交でごまかすという例の手だけど、まさに皮肉な意味で内政外交の一体化だよ。(笑)

それにね、議会の連中だってどうせいかかわしいことをして来てるんだし、目くそ鼻くそを笑うってことじゃないの。テレビのライトをあびて、これで再選は保障されたっていう連中もいるだろうし。

政治家B 議会の抑制の機能はたしかに増すと思う。現に、カンボジア爆撃に対して待ったをかけたし、いま上下両院で審議中の戦時大権法案 (War Powers Bill) だって、その一貫だ。まだ上院案と下院案との間にかんりの開きがあるが、これが調整されて法律化されれば、こと海外での戦闘行動、つまり宣戦布告なき戦争に対する大きな歯止めにはなると思う。それに、条約の批准についての上院の専権を無視して、歴代の大統領が乱発してきた行政協定へのチェックを、上院が鋭意考えていることも事実だ。われわれは希望を捨ててはいない。また三権のいちじるしいアンバランス (imbalance) を何とか平衡化させねばならないと信じている。

私 ところで、いま一つの抑制機能としてのマスコミはどうだろう。実は、日本ではこの点、つまりアメリカの一部ではあろうがマスコミが、果敢にウォーターゲートを衝き、ペンタゴン秘密文書を白日のもとにさらしたことに快哉を叫ぶ向きが多く、アメリカ民主主義はまだ健全だ、という声もあるのだが。

この点、やや脱線するが私個人としては、日本にはこの種の徹底的な investigative reporting はないように思えるのだ。たとえば、去年の自民党の総裁選だが、単に一党の総裁を決めるだけでなく、奇妙なことにいまの日本の現実では、政府の首班を決めるすぐれて公的な選挙であるにもかかわらず、わずか五百人内外の人間だけでとり行なわれるすこぶる閉鎖的な選挙なのだ。その点、私たちとしては、欠陥はあるにもせよ、アメリカの大統領選挙ははるかに直接的であり、うらやましいと思う。しかも絶対多数といったって、自民党の得票率は5割を切っているんだからね。

ところが、この総裁選はタイムのニール記者の評語を

借りれば、完全に auction (セリ) だった。いや、彼が選挙の数日前に私にこういうことばを用いてまちがいないか、というからOKのサインを出しておいたんだ。要するに、もっとも高値で bid (入札) した男が総裁に選ばれ、総理大臣にのし上がったという筋書き。むろん私的な機関の中のこととて、完全に合法さ。でもその男が公器中の公器である総理になるのだからね、これはやり切れない。

ところが日本のマスコミは、金をかけるなとか、政治不信の源を断てとか論説ではいうんだけど、何れも抽象論でそれっきりさ。個人のレベルで掘り下げて、白日のもとにさらすということとはご法度なんだ。なあなあというのか、狎れあっているというのか、ワシントン・ポストやニューヨーク・タイムズがみせた秋霜烈日さはない。日本的土壌というのかなあ。現にある大新聞の政治部長が、へそから下のことと(笑)、金のことを個人の次元で書くのは禁物だし、大新聞のなすべきことではないと、私に真顔で語っていた位なんだ。

政治家D そのあたりはたしかにちがうようだ。アメリカの選挙も金がかかるが、テレビの時間帯を買うとか、チャーター機を借りるとかに使われるんで票を買うという blatant (むきつけ) な形での買収は、南部の一部とか、都市のマシーン(注; 選挙母体、かつてのニューヨークのタマニー・ホールは一部その機能を果たしていたとして有名)を除いては、少なくとも全国的な公職(national office)ではないと思う。やりたくても数が多すぎて、とてもとて。 (笑)

学生D マスコミというけど、アングラ新聞を除いては、やはり資本家や大企業に従属しているんじゃないかな。広告収入への依存度も8割弱と高いしね。事実、敢然と闘ったっていうけど、せいぜいポストとタイムズの2紙、タイムとニューズウィークの2誌、それにテレビは三大ネットワークが、しかもかなり遅れて騒いだという程度じゃないの、アメリカのマスコミの大部分を占めるローカル紙やローカル局は、スポンサーの意向をおそれて黙ってだし、そう褒められるほどのことはないよ。スポンサーの大所は大体が現状維持派だし、共和党びいきなんだから。

それにへそから下というけど、いまのアメリカはいわゆる permissive society (物わかりのよい社会) でね、男女関係なんか昔ほどうるさくないんだ。現にロックフェラーの離婚や、エドワード・ケネディのスキャンダルも大して政治的にはひびいていやしない。

政治家B でも、もし細君以外に自分の子どもを産ませた女性が何人かおり、その婦人や庶子に、国有地を払

い下げたりしたことが公けにされたら、まず政治的には致命傷といえると思う。(苦笑)

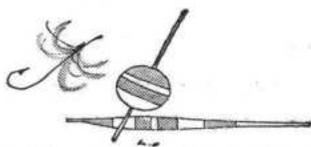
学生E ぼくは話が前に戻るけど二つのことをいいたいな。一つは、いわゆる二党政治のことだ。たしかに日本はこの何年か自民党が万年与党で、あなたをはじめ日本の知識人がいらだっているのはよく判る。一体、政権交替の可能性のない政党政治とか議会制民主主義があるんだらうか、という疑問はまっとうなものだらう。ただアメリカの二党政治も形骸化しているという点は強調しておきたい。第一、民主共和両党ともどこがどのようにちがうのか、さっぱりはっきりしないじゃないか。とくに、国際問題においては超党派(bi-partisanship)の美名のもとに、両者の差異は完全にぼやけてしまっている。現にあるベトナム戦争という醜悪な戦争を、少なくとも当初は両党とも支持していたのだからね。その点、日本のあなたの方がまだ幸せかも知れない。自民党の右派から共産党に至るまで選択の幅は広いし、少くとも自分にもっとも近い個人なり党に投票できる。とくに複数区が多く、同じ自民党でもタカとハトがそれぞれ立候補しているという場合が少なくないというじゃない。ところがわれわれの国では、極端に言えば投票するか棄権するかを選択しかないといってもいいんだ。

第二に、拮抗力とか少数意見(dissent)の伝統とかいわれるけど、それも名目だけだとぼくには思える。ベトナム戦のさなかにぼくらの年長の仲間がどれほどの苦難を強いられたかが、それを如実に示している。とくにアメリカのような人種の民族的に多様な複合社会では、conformity(同調)への圧力も強いんでね。その頂点に位するのが大統領ともいえる。

私 因数分解をおこさないための人為的な統合のシンボルとしての大統領、だからこそ神聖にして侵すべからざる存在だっていうわけだね。

それはとにかく、日本の政治についての君の見解には教えられるところもあるけど、ぼくらはそう楽天的でありえない。野党が分断され、effective oppositionがないことは何といっても異常だし、自民党の優位が政官財の戦後20数年にもものぼる構造的な癒着の上に立ち、日本人の事大主義的な、長いものには巻かれる式の大勢順応志向によって強化され、しかも現実には現実であるが故によりことであるという日本人一流の現実主義、それへの妥当性や倫理性の付与を思うと、君の解釈に百パーセント同調するわけには行かない。

ただ結論としていえることは、むしろあなたの方がアメリカの将来に総じて悲観的なのに反し、われわれがむしろ
(p. 44 へつづく)



日英両国語基礎語彙の比較*

HATTORI SHIRÔ

服部 四郎

日英両国語の語彙の比較についてお話ししよとのことですが、両国語の語彙全体の比較となると大変なことで、とうてい30分ではお話しできませんし、個々の単語の比較ですと、単語の意味の比較のようなことになってしまいます。そこで、基礎語彙の問題を中心に、二、三気づいたこととお話しすることにいたします。

一般に外国語の学習や教育で基礎語彙が文法と並んで大切であることは、申すまでもありません。むずかしい単語を沢山知っていても、基礎語彙がうる覚えですと、しゃべることはもちろんできませんし、読んだり書いたりすることも困難です。

基礎語彙とは、その国語の語彙、すなわち単語の総体のうちの、もっとも根幹的な部分でありまして、もっとも頻繁に使われる単語から成っています。その国語を母国語として話す人々は誰でも一人残らず幼い時代にそれを習得してしまいます。文語的な単語ですとその方面の教養のある人ほど沢山知っていたり、ある職業の特殊語ですと、その職業に属する人々だけが知っているというようなことがあります。基礎語彙はその言語集団のすべての人が習熟しています。尤も基礎語彙というものを科学的にはっきり定義することは今のところ困難です。基礎語彙とそうでない語彙の部分とが、明瞭な一本の線で分かれているわけではありません。それにも拘らず、基礎語彙というようなものがあって、それが言語の習得に重要な役割を演じていることは疑ないと思われま

そこで、多くの国語について、基礎語彙を明らかにするのが一つの目的で、統計的研究が行なわれています。

英語については、Thorndike と Lorge の研究¹⁾が有名です。いろいろな読物に現われる、延べ使用語数約1,800万語について統計したものです。その結果、各単

語の使用頻度が明らかになりました。そのほかにも多少研究がありますが、それらをもとにして、いわゆる「総合的方法」によって、いろいろの英語基礎語彙表が作られました。わが国でも、戦後、文部省が『指導要領』によって、中学生は卒業するまでに約1,300語を、高校生は約3,600語を修得しなければならないとしています。中学校用の基本語彙集は昭和38年に全英連が具体的な表²⁾として示しましたし、高校用のものは、昭和36年に東京都教育委員会が、39年に全英連³⁾が、それぞれ似たものを発表しています。それらについても、多少私の考えをお話ししたいと思います。この3種の基礎語彙表は、『現代英語教育講座、第5巻』の荒木一雄さんの論文⁴⁾に収められているものを用いることにします。

日本語については、国立国語研究所の報告21号『現代雑誌九十種の用語用字』の第一分冊「総記および語彙表」(1962)によってお話しいたします。

さて、Thorndike らの研究およびその一部分である Lorge の雑誌用語などの統計によりますと、数百の単語が特に大きい頻度数を示しているのが目につきます。

まず、そのうち最も頻度数の大きい the とか、頻度数5番目⁵⁾の a~an のような冠詞が、日本語にはない単語である点が興味があります。

また、英語では人称代名詞の頻度が高く、いろんな格変化形など、たとえば I について言えば、I (I'd, I'll, I'm), my, me, myself, mine をまとめて1語として計算しますと、1, 2, 3人称; 単数、複数など、すべての人称代名詞が、初めから20番目までにはいってしまいます。これに対して、日本語の代名詞は頻度が低く、英語の1人称単数代名詞(上述の I など)が第3位であるのに対し、日本語ではワタクシ、ワタシ、ボクなどを併せて第15位ぐらいにしかならず、しかもタチ、ラな

* 昭和44年8月から9月にかけて、「日英語の比較」と題して行なわれた諸家の連続ラジオ放送(30分ずつ)の第4番目に、「語彙」と題して割当てられて行なった放送の草稿。

1) Edward L. Thorndike and Irving Lorge: *The Teacher's Word Book of 30,000 Words*, Bureau of Publications, Teachers College, Columbia University, New York, 1944.

2) 『全英連中学英単語活用集』, 南雲堂, 1963, 1969²⁾.

3) 『全英連高校基本英単語活用集』, 研究社, 昭和42年.

4) 『基本語』pp. 1-83, 研究社, 昭和41年, 42年³⁾.

5) この書は単語を頻度数順に並べていないので、その Part IV の Lorge の統計の頻度数によって筆者の算出した順位。以下すべて同様。

どの接尾辞は別に計算されていますから、この15位という数字は単数形・複数形を併せた頻度に近く、Iなどとweなど(第20位)を併せたものに大体当たります。尤もワレワレは単独で299位にあります。英語の2人称代名詞youなどの頻度は14位ですが、日本語のはアナタ、オマエ、キミを併せても72位になります。従って、英語国民が日本語を習うときには、人称代名詞の省き方を体得しなければならぬことが、この統計結果の比較によっても、明らかになったと言えます。

英語では動詞beのいろいろな活用形、am, are, is; was, were等々を併せたものが第2位に位しますが、日本語では、助動詞ダの8位、アルの18位、デスの17位、動詞アルの31位などを併せたものがこれに呼応するのでしょうか。これらすべての頻度数を合計しますと5位になります。尤も、英語には、そのほかに第10位のhaveがあり、その一部に日本語のモツとアルが呼応します。英語では形容詞が述語になるときはbeがいますが、日本語の形容詞はそれに当たるものがいらぬので、その点が多少この順位の違いに反映しているのかも知れません。

さて、どの言語でも、附属語やそれに傾いた文法的な単語が頻度が高い点は共通です。英語では(括弧の中の数字は頻度数が第何位かを示す)、

and (4), to (6), of (7), in (9), no [notなどと併せて] (15), for (17), with (18), as (19), on (21), at (23), will (24), but (25), can (28), from (34), or (36), if (38), up (44), by (46)

などの頻度が高く、46位までにはありますが、日本語でも、助詞や助動詞の

ノ、ニ、ハ、テ、ヲ、タ、ガ、ト、モ、デ、ナ、マス、ナイ、カ、カラ、ウ〜ヨウ、バ、ヘ、マデ

が47位までにはあります。従って、これらの単語に習熟しないと、これらの国語を正しく書いたり話したりすることはできないわけですが、興味あることには、pidgin Englishなどのように、ぎりぎりの所まで切りつめた即物的な大まかな伝達のための手段としては、これらの単語はなしでも済ませます。現場では、「コレ ヲタシ アナタ アゲル」で結構わかるという事実は注意すべきことです。逆に言うと、現場にないことに関する言語伝達では、これらの付属語が重要な役割を演ずるものと考えられます。

動詞のうち、頻度が高く100位までにはいるものを挙げますと、英語では、

do [助動詞を含む] (20), go (26), ask (30), say (33), come (40), make (41), know (43), get

(49), see (53), take (55), like [前置詞を含む] (56), think (57), look (60), want (62), tell (63), give (79)

などですが、日本語では

スル、イル(居)、イウ、ナル(成)、アル、クル(来)、ミル、オモウ、イク、デキル、ヤル

などで、かなりの一致が見られます。これらは本当に基礎的な動詞と言えましょう。

数詞は、英語でも日本語でもoneとイチが頻度が高く、それぞれ32位と24位で、twoとニはぐっと下って76位と30位、threeとサン以下ますます下って行って、tenとジュウが多少高い点まで一致しています。日本語のヒトツ、フタツ、ミツなどは頻度がずっと低いのですが、相対的な関係は似ています。

疑問詞も頻度が比較的高く、英語では

when (37), what (42), which (48), who (51), how (87), where (94), why (118)

の順序で出てきます。ところが、日本語の疑問詞は一、二のものを除いて頻度が非常に低いのです。助詞・助動詞を除いた表によって順位を示しますと、

ナニ (32), ドウ (70), イツ (130), ダレ (179), ただしドナタを併せると162), ドコ (194), ナゼ (560), ドレ (1248.5)

です。これは、われわれの直観に反するように思います。尤も、英語の場合は、関係代名詞も含まれているので、それにしても、日本語でも、少なくとも日常の会話語では、疑問詞の頻度がこんなに低いとは思えません。これは、日本語の統計資料の方がいっそう文字言語的なためではないでしょうか。こういうような方法では、日常の会話語における単語の使用頻度数を明らかにし得ない面があり、基礎語彙の研究には役立たない面があることを物語るのではないのでしょうか。

この点ではThorndikeらの統計結果にも同じ傾向のはっきり現われている面があります。たとえば、日常生活で頻繁に使われるHelloとかHeyというような間投詞について見ますと、helloは一般頻度指数が20で、従って第3,001位から第4,000位までの間に位し、heyは11で、第5,001位から第6,000位までの間に位します。幸いhelloはわが国の中学基本語で2年生の所にあり、都教育委員会の高校基本語にもはいつていますが、heyはどこにも見えません。

また、How do you do?《はじめまして》とかYou are welcome《どういたしまして》とかいうような句を個々の単語に分けて統計したのでは意味がありません。英語にはput on《着る》、take off《出発する》のよう

なイディオムが沢山ありますが、これらも単語に分けて統計したのでは不適當です。ただし、Michael West⁶⁾の統計では、それらの点がよく考慮されています。

さて、これらすべての統計的研究に共通の特徴は、個々の単語その他の形式の頻度数が計算されて、その結果がアルファベット順あるいは五十音順、または頻度数順に配列してあるだけで、それらの形式間の意味上の関係が考慮されていないことです。これでは、語彙を、体系としてではなく、単語の単なる集合として取り扱うことに等しくなります。

そこで、語彙のいろいろの部分が、意味の上で、完全な、あるいは不完全な体系をなすという見方と、この種の統計的研究との間に、相関関係があるかどうか、多少の考察を試みてみましょう。

他のすべての言語と同様、英語の形容詞にも幾対かの反義語 (antonym) があります。Thorndike らの書物によって、それらの頻度数を調べますと、次のようです⁷⁾。

big	AA (1773)	little	AA (8657)
large	AA (1697)	small	AA (1818)
thick	A (—)	thin	AA (—)
wide	AA (—)	narrow	AA (—)
long	AA (5362)	short	AA (887)
high	AA (1674)	low	AA (1224)
tall	AA (—)	short	AA (887)
deep	AA (—)	shallow	27
far	AA (1835)	near	AA (1338)
fast	AA (—)	slow	A (—)
strong	AA (770)	weak	A (—)

これらの反義語は同時に教える方が効果的だと思いますが、前述のわが国の「中学基本語」や「高校基本語」でどうなっているかを見ましょう。

big	little	} 中 1
long	short	
tall	short	
high	low	} 中 2
far	near	
thick	thin	中 3

などは、それぞれの反義語が同学年で教えることになっているので適當と言えましょう。ところが、

wide	中 1	narrow	中 3
fast	中 1	slow	中 3
large	中 2	small	中 1
strong	中 2	weak	中 3
deep	中 3	shallow	高

となっているのはどうでしょうか。語彙の体系という事が考慮されずに選定されている様に思われます。そのうちでも fast: slow; strong: weak; deep: shallow の選定には Thorndike の影響が見えるように思います。

また、uncle が中学 2 年生、aunt が 3 年生となっているのも、Thorndike で

uncle	AA (730)	aunt	A (—)
-------	----------	------	-------

となっているのの影響でしょうか。

一体ひとつの言語の語彙は、それに属する単語が何の体系もなくバラバラに記憶されているのではなく、同一の意味分野に属する一群の単語が、日常生活で互に関連のあるものとして記憶されているものが少なくありません。たとえば、イヌ と言えば ネコ、ウマ と言えば ウシ です。また、ネコ と言えば ネズミ、イヌ と言えば サル でもあります。ヒ と言えば ミズ、ウミ と言えば ヤマ、クサ と言えば キ、キン と言えば ギン です。メ、ハナ、クチ、ミミ などまとめて覚えているのではないのでしょうか。

私どもは、昭和30年から32年にかけて、文部省科学研究費によって、沢山の基礎語彙資料を参考にしながら、『基礎語彙調査表』を第1次から第3次まで3種類作りましたが、そのうちの第3次調査表の「人体」の部分に出てくるものと Thorndike の統計結果と、それから、わが国の中学基本語、高校基本語を比較して見ましょう⁸⁾。

1. あたま	head	AA(5047)	63%	中 1
2. ひたい	forehead	41		ナシ 高
3. め	eye	AA(5786)	61%	中 1
4. まゆげ	eyebrow	12		— 高
5. なみだ	tear(s)	AA(—)	57%	中 3
6. めくら	blind	A	42%	中 3, 高
7. はな	nose	AA(—)		— 中 2
8. みみ	ear	AA(—)	70%	中 1

8) Lorge Magazine Count の数字の次のパーセンテージは、General Service List (上記注 6) が使用意味による頻度数のパーセントを示しているのにより、そのうちの、その単語が、比喩的意味その他で使われるのではなく、身体の部分の名称として使われたパーセントを示す。—はそのパーセントが示されていないことを示す。一般に、基礎語彙は、比喩的意味に使われたり、イディオムの中に使われたりすることが多いので、そういう頻度数まで示す上記の List は勝れたものと言わなければならない。

6) A General Service List of English Words, London—New York—Toronto, 1936, 1953.

7) AA=100万語の中に100回以上出る。A=同じく50回ないし99回出る。以下、49, 48, 47, 46, …の数字は、それぞれ現われる回数を示す。たとえば、shallow の27は、「100万語の中に27回出る」ことを示す。

() 中の数字は Lorge Magazine Count における頻度数。—はそれが999回以下であることを示す。

9.	つんぼ	deaf	19	74%	高
10.	くち	mouth	AA(—)	62%	中 2
11.	くちびる	lips	AA(—)	74%	中 3
12.	した	tongue	A	67%	中 3
13.	おし	{dumb mute	34 11	ナシ ナシ	高 高
14.	は	{tooth teeth	47 A	84%	中 2
15.	つばき	{saliva spit	3 13	ナシ —	ナシ 高
16.	いきをする	breathe	A	51%	高
17.	こえ	voice	AA(1998)	89%	中 3
18.	せき	cough	18	—	高
19.	くしゃみ	sneeze	6	ナシ	ナシ
20.	あくび	yawn	15	ナシ	高
21.	あご	{chin jaw	27 11	ナシ 84%	高 高
22.	かお	face	AA(3902)	37%	中 1
23.	ほお	cheek	A	ナシ	高
24.	ひげ	{beard mustache whiskers	32 7 6	— ナシ ナシ	高 ナシ ナシ
25.	くび	neck	AA(—)	87%	中 3
26.	のど	throat	A	57%	高
27.	かた	shoulder	AA(1135)	85%	中 3
28.	うで	arm	AA(2338)	38%	中 2
29.	ひじ	elbow	26	ナシ	高
30.	て	hand	AA(3334)	47%	中 1
31.	ゆび	{finger toe	AA(—) 35	78% —	中 2 ナシ
32.	つめ	nail	A	30%	高
33.	むね	{breast chest	A 41	ナシ 69%	高 高
34.	ちぶさ	breasts	A	ナシ	
35.	しんぞう	heart	AA(2067)	10%	中 2
36.	はら	{belly stomach	10 30	ナシ 17%	ナシ 高
37.	はらわた	{guts intestine	2 4	ナシ ナシ	ナシ ナシ
38.	かんぞう	liver	10	ナシ	高
39.	へそ	navel	ナシ	ナシ	ナシ
40.	せなか	back	AA(6587)	14%	中 2
41.	こし	waist	33	<68%	高
42.	しり	buttocks	1	ナシ	ナシ
43.	ひざ	knee	AA(—)	71%	高
44.	あし	leg	AA(—)	88%	中 2
45.	あし	{foot feet	AA(—) AA(1540)}	35%	中 1
46.	びっこをひく	{limp lame cripple	15 29 19	ナシ ナシ ナシ	高 高 ナシ
47.	からだ	body	AA(999)	40%	中 3
48.	け	hair	AA(1183)	86%	中 2

49.	ひふ	skin	AA(—)	83%	中 3
50.	うみ	{pus matter	ナシ AA(1703)	ナシ <18%	ナシ
51.	あせ	sweat	19	—	高
52.	あか	dirt	21	53%	高
53.	ち	blood	AA(—)	47%	高
54.	ほね	bone	A	—	高
55.	にく	flesh	A	68%	高
56.	ちから	strength	AA(—)	30%	高

上の表を見ますと、中学校でも高等学校でも教えられない単語は次のようです。

15. saliva; 19. sneeze; 24. mustache, whiskers;
31. toe; 36. belly; 37. guts, intestine; 39. navel;
42. buttocks; 46. cripple; 50. pus.

さて、これらの身体の部分の名称は、比喩的な意味やイディオムなどにもよく用いられますので、それらを教える前に身体の部分の名称としての意味を教える必要がありますが、中学校、高等学校の基本語では当然そのことが考慮されているのでしょう⁹⁾。

語彙体系の観点から、上の学年別の割り当て方を見てみましょう。

1. head; 22. face; 3. eye; 8. ear は中1となつていますが、7. nose; 10. mouth は中2です。これは中1で教えてしまいたいように思います。

30. hand; 45. foot~feet を中1で教え、28. arm; 44. leg を中2で出すのは一つの方針とも言えます。しかし、31. finger が中2で、32. nail が高校となっているのは如何でしょう。(Thorndike では finger は AA, nail は A となっています。) 14. tooth~teeth が中2でありながら、11. lip; 12. tongue が中3となっているのも、また、40. back が中2、27. shoulder が中3 33. breast, chest が高校というのも、首をかしげられます。25. neck が中3で、26. throat は高校です。18. cough と 20. yawn は高校で教えますが、19. sneeze はどこでも教えません。

このような段階の決定は、Thorndike らの統計資料の影響を受けたと解釈し得る面が少なくありません。

ところが、この資料に現われた頻度数が語彙の体系と相関関係を持っているかどうか疑わしい場合があります。たとえば、3. eye は 5786 という高い頻度ですが、7. nose, 8. ear, 10. mouth は 999 以下です。また 1. head (AA) や 22. face (AA) は非常に高いのに、2.

9) 上掲(注2, 3)の書物や、『全英連基本英単語活用集』(南雲堂, 1961, 1967²⁾)には、比喩的意味などの例も示してある。

forehead (41), 21. chin (27) は高くありません。18. cough (18), 19. sneeze (6), 20. yawn (15) などは日常生活では大切な単語ですけれども、頻度数は非常に低く出ています。

こういう傾向は国立国語研究所の統計資料にはいっそう著しく出ているように思います。たとえば、助詞・助動詞を除いた頻度順位を示す番号で言いますと、

3. め	34位	eye	AA(5786)
7. はな	約1400位	nose	AA(—)
8. みみ	772.5位	ear	AA(—)
10. ぐち	309.5位	mouth	AA(—)
1. あたま	269位	head	AA(5047)
22. かお	109位	face	AA(3902)
2. ひたい	約3200位	forehead	41
23. ほお	約1560位	cheek	A
21. あご	約2900位	chin	27
24. ひげ	約2550位	beard	32
4. まゆげ	6000数百位	eyebrow	12
10. ぐち	309.5位	mouth	AA(—)
11. ぐちびる	約1670位	lips	AA(—)
14. は	約3500位	teeth	A
12. した	約4500位	tongue	A
18. せき	5000数百位	cough	18
19. くしゃみ	ナシ	sneeze	6
20. あくび	ナシ	yawn	15
30. て	104位	hand	AA(3334)
28. うで	847位	arm	AA(2338)
44. あし	371.5位	{leg	AA(—)
45. }		{feet	AA(1540)
43. ひざ	約2100位	knee	AA(—)
29. ひじ	ナシ	elbow	26
53. ち	約1050位	blood	AA(—)
54. ほね	約2400位	bone	A
55. にく	約2050位	flesh	A
51. あせ	1900数十位	sweat	19
52. あか	ナシ	dirt	21
50. うみ	ナシ	pus	ナシ
15. つばき	ナシ	spit	13

そのほか、チブサ、ハラワタ、ヘソ が無く、メクラ、ツンボ、オシ、ピッコ などが無く、カタワ という単語も出ておりません。

もっとよく研究しなければなりません。このような様子を見ますと、基礎語彙の研究にこの種の統計資料がどの程度役に立つか、疑問とせざるを得ません。

さて、語彙の研究で非常に大切なポイントのひとつとして文体的レベルの問題があります。そのことに少し触

れてこのお話を終わらしましょう。

イーデス・ハンソンさんは、最近お出しになった本¹⁰⁾の中で、次のようなことを書いておられます。

いまの日本の若い人だったら、わりと気楽なことばを知っているけれども、ちょっと年上の方は、ふつうの会話には使われないような、なにかびっくりするような、むずかしい単語をいっぱい知っている。むしろ知りすぎています。たとえば一つの例でいうと、difficult というコトバを使わなくとも、hard で十分にあうのです。

This is a hard book. (この本はむずかしい)

This is a hard work. (この仕事はやっかいだ)

でいいのです。ところが、ふつうの日本人は、「この本はむずかしい」を英語にきなさいというとき、This is a difficult book としてしまう。これだと、感じとしては、「この本は難解である」というような感じで、すごくカタ苦しくなってしまう。

ところが、私たちは中学以来、difficult はムズカシイ、ムズカシイは difficult と習ってきたものですから、この両者は私たちの頭の中で密接に連合して、一方を思い出すと他方が反射的に出てきます。そればかりでなく、だいいち difficult がむずかしい固苦しい単語だということを知らないのです。ハンソンさんの説明で、アメリカ英語では、difficult は bookish な literary な文体的レベルに属する単語で、それに対する colloquial な文体的レベルの基礎的単語は hard だということがわかります。こういうことは学校では習いませんでした。

ところが、そういう文体的レベルに関する記述は、どの辞典でも不完全で、これから研究しなければならない面が非常に多いのです。

たとえば、アメリカ英語には、big, little は colloquial で emotional であるのに対し、large, small が less colloquial で descriptive だとか、幼い子供は big, little ばかり使うが少し大きくなると large, small を使うようになるとか、large, small には多少 dignified という感じがあり、intellectual に見せようとするときにこれを使う、というような違いがあるようですが¹¹⁾、こういうことは学校では教わりませんでした。

このようなことは、辞書類にはあまり書いてないのでこれから大いに研究しなければならないのであります。

(東京大学名誉教授)

10) 『カタコト英語で十分です』、実業之日本社、昭和44年。
11) 拙著『英語基礎語彙の研究』、三省堂、昭和43年、参照。

Modality, Subject, Negation など

NAKAJIMA FUMIO
中島文雄

法助動詞 *may, can, will, shall* の過去形 *might, could, would, should* は、時制の一致という規則により、従文のなかでは過去を表わす語として用いられるが、その他の用法では過去時制ではなく、現在形と同列にならんで mood の諸相を表わすのが普通である。現在形と過去形の用法の差は、一般的に言えば、前者の方が客観的、後者の方が主観的な表現として対比することができよう。現在形を indicative の用法とすれば、過去形は subjunctive の用法とよぶことができる。

例外的に *would* や *could* が subjunctive でなく、indicative の過去時制を意味することがある。

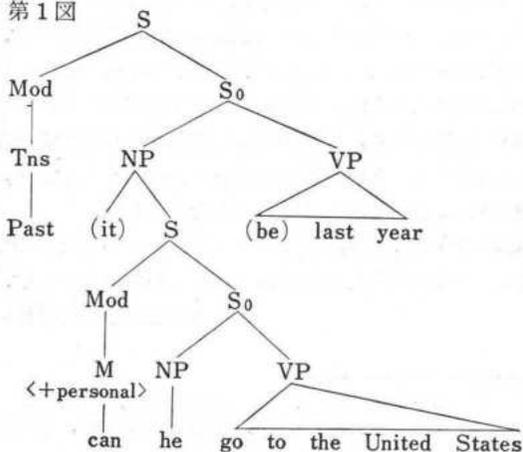
(1) Every morning he *would* go for a long walk.

(2) He *could* go to the United States last year.

(1)の*would* は習慣を表わす *will* の過去形であり、(2)の*could* は ability を表わす *can* の過去形と解される。ただし(2)の文は、実は意味があいまいであって、この *could* は possibility を意味する subjunctive の過去形であるとも取れるし、むしろこの「行けたのだが」という意味に取られるのが普通である。(2)の両意味を文脈ではっきりさせれば次のように書き分けられる。

(3) He *could* go to the United States last year,

第1図

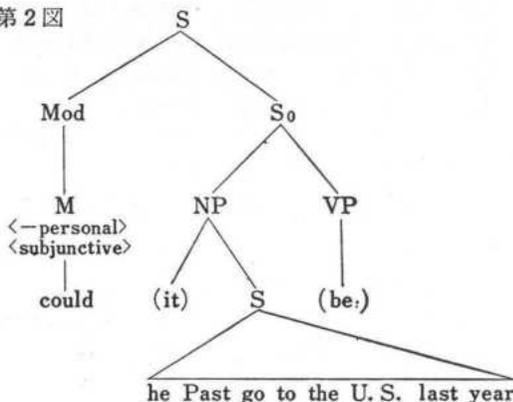


but he can't this year.

(4) He *could* go to the United States last year.
but he didn't.

(2)は(4)のような場合に用いられることが多いから、普通(2)を発すれば Why didn't he? と聞きかえされるであろう。しかし(3)の意味にもなりうるので、ふたつの深層構造を認めなければならない。前回の拙稿で述べたところにより、(3)の意味の(2)の深層構造は第1図のようになる。ここに Past+can→could という変形が(2)ができた」と説明される。(4)の意味の場合は、

第2図



ここでは前回に述べた規則によれば could+Past→could have-en になるはずで、そうならば(2)は、

(5) He *could* have gone to the United States last year. となり、意味は明瞭になる。ところが *could* が(3)の場合と同様に、過去時制にも用いられるとすれば *have-en* はなしですむ。それで(2)ができ、その意味が(3)か(4)かあいまいになったのである。

Subordinate Clause

第1図に見られるように(第2図においては省略した書き方をしたが) *last year* は VP を構成している。そ

れは NP をなす文によって意味される事からの時間規定をしているからである。時間規定が *when*-clause という従文で表わされる場合も、深層構造における位置は同じことである。時間規定や場所規定ばかりでなく、理由を表わす *because*-clause, 条件を表わす *if*-clause, 譲歩を表わす *though*-clause, 目的を表わす *in order that*-clause も、同じように解される。これらの従文は主文を NP とすれば、その VP に当るもので、その VP の構造は次のようなものである。

- (6) VP → be PrepP
- PrepP → Prep NP
- NP → (Det) N S

具体的にはこの PrepP は、

- (7) at [in/on] the place S → *where* S
- (8) at the time S → *when* S
- (9) for the reason S → *because* S
- (10) on condition S → *if* S
- (11) in spite of the fact S → *though* S
- (12) in order S → *in order that* S

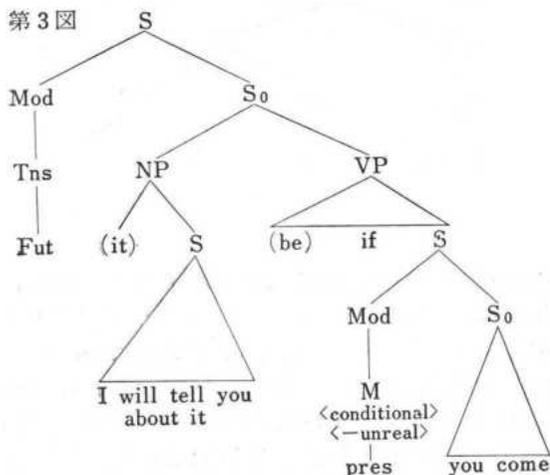
N の補文である S が Complementizer → *that* をとることは最後の(12)に見られる通りであるが、(7)から(11)までは、いずれも前置詞句が従位接続詞に置換され、そこで従位節ができたと説明される。

実例について検討してみると、

- (13) If you come, I will tell you about it.
- (14) If he knew the fact he would tell it to you.
- (15) If he had known the fact, he would have told it to you.

If-clause のなかの動詞の Modality を <conditional>

第3図



とよぶことにすると、上の3文の(13) *come*, (14) *knew*, (15) *had known* はいずれも <conditional> であるが、(14)は現在時で考えられた <unreal> な条件、(15)は過去時で考えられた <unreal> な条件を意味している。(13)の *come* は <unreal> ではないが、純粋に <conditional> と考えれば $M \rightarrow \phi$ で、この *come* は subjunctive の語形ということになる。もし <conditional> ではあるが、<-unreal> と考えれば *come* は indicative の語形、すなわち現在形ということになる。図示すると、第3図のようになる。

これで *if*-clause を前置 (preposing) すると(13)になる。第3図は

$M \langle \text{conditional} \rangle \langle \text{-unreal} \rangle \rightarrow \text{Pres}$

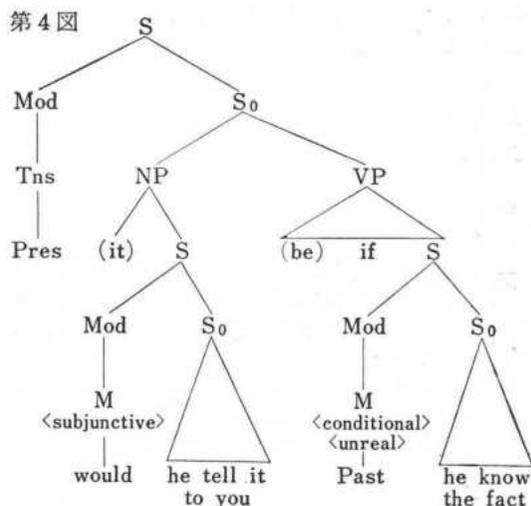
という規則に従い、*come* を indicative の現在形としているが、もし subjunctive の *come* なら

$M \langle \text{conditional} \rangle \rightarrow \phi$

という規則を認めればよい。

次に(14)の深層構造は、

第4図



この条件文のなかの Modality は、

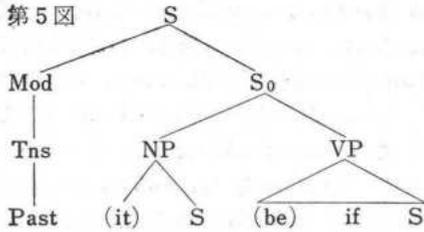
$M \langle \text{conditional} \rangle \langle \text{-unreal} \rangle \rightarrow \text{Past}$

という規則で説明できる。これによって *if he knew the fact* となる。(15)は主文の Tns が Past になるだけで、あとの部分は第4図と同じである。(第5図)

ただし主文の Tns が Past であるから(13) Fut, (14)の Pres の場合とちがって S₀ の内部の *would* は *would have-en* に、Past *know* は *had known* に変形される。その規則は、

$\text{Past} + M \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} M \text{ have-en} \\ \text{Past have-en} : \text{if } M \rightarrow \text{Past} \end{array} \right\}$

第5図



とすることができる。

次に *because*-clause をもつ否定文を考えてみる。

(16) I didn't call because I wanted to avoid her.

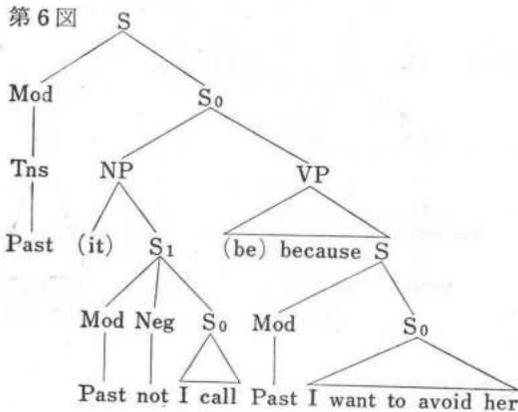
(17) I didn't call because I wanted to see her.

(16) は「彼女を避けたかったので」「訪ねなかった」の意味であるから主文の *I didn't call* のあとに切れ目がある。これに対し(17)は「彼女に会いたいから訪ねた」「のではなかった」という意味であるから、従文をも含めた文全体が否定されている。従って深層構造を異にするが、どちらの場合も否定文の構成素である否定詞 (Negative) *not* の位置は

$S \rightarrow \text{Mod Neg } S_0$

である(後述)。(16)と(17)では否定される *S* がちがうのである。(16)の深層構造は次のようになる。

第6図



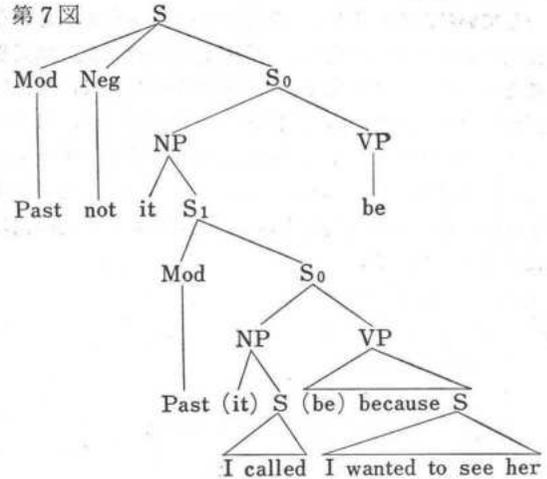
これでわかるように(16)の *Neg* は S_1 の構成素であって全文の *S* に直接支配される構成素ではない。これに対して(17)の *Neg* は全文を否定している。

第7図の表わすところは、

[it] [**called because I wanted to see her*] Past not be

であるが、これに *it be deletion* が行なわれ、*I* を全文の主語にすれば(17)となる。

第7図



Subject Transformation

われわれの規則では

$S \rightarrow \text{Mod } S_0$

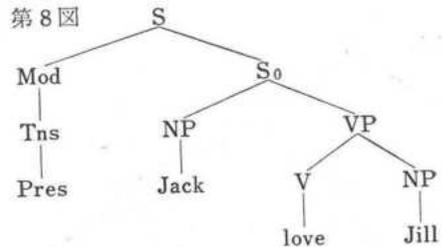
$S_0 \rightarrow \text{NP VP}$

という展開をするから、主語 (Subject) は変形によって出てくることになる。 S_0 の構成素である NP はまだ主語ではない。たとえば

(18) Jack loves Jill.

の深層構造

第8図

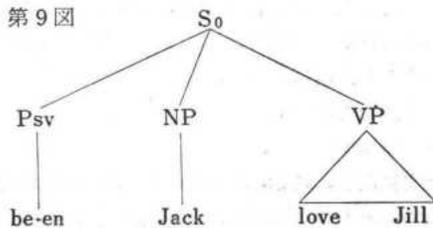


において S_0 の構成素たる Jack はまだ主語ではない。主語とか述語とかいうのは判断作用が加わったときであって、 S_0 の段階ではまだ判断は下されていない。 S_0 は判断の基底をなす表象を表わしているにすぎない。この S_0 においては、*love* という他動詞の意味から投射される「愛するもの」と「愛されるもの」との相関関係の2項のうち、*Jack* (愛するもの) が直格 (nominative case) で表象され、*Jill* (愛されるもの) が斜格 (oblique case)

で表象されている。直格の *Jack* を主語にすることができるが、そのためには、これを Mod の前に出さなければならぬ。これを主語変形 (Subject transformation) とよんでおく。この変形によって *Jack* は事実性 (factuality) を与えられ、Pres は 3 人称単数という限定をうけることになる。この事実性の意識が判断作用である。

主語変形につづいて *love Jill* も Mod のあとに移され、主語 *Jack* についての賓述となる。これを述語変形 (Predicate transformation) とよんでおく。これも判断作用である。従って(8)の文は、主辞判断と賓辞判断とからなる二重判断の表現ということになる。

NP V NP とならんだ場合、動詞の前の NP が直格で、あとの NP が斜格で表象されることは英語の約束であるが、主語になるのは直格の NP でなければならない。相関関係の 2 項は、どちらかが直格で他が斜格で表象されるのであるから、上の *Jill* (愛されるもの) を直格で表象し、それを主語にすることも可能である。文法的には、ここに受身変形が行なわれる。それは S_0 内部のことであって、Passivizer→be-en なる構成素が加わって、



→*Jill be loved by Jack*

となり。これに主語変形、述語変形が適用されると、

(9) *Jill is loved by Jack.*

ができ、今度は *Jill* が Mod に制限を加えることになる。

Jack や *Jill* のように、はじめから definite なものは、主語変形をうけても、事実性が付与されるだけであるが、これが数量詞 (Quantifier) を含む NP の場合には、それが主語になると、事実性のため definite なものを意味するようになる。たとえば、

(20) *Many Americans like few Japanese foods.*

(21) *Few Japanese foods are liked by many Americans.*

とを比較してみると、(20)は (日本のたべものをあまり好まない) アメリカ人が多い、(21)は (多くのアメリカ人に好まれる) 日本のたべものは少ない、というような意味の

ちがいが感じられる。英語の主語は、日本語の主語とちがいが、主辞判断の表現だからである。能動文と受動文とでは、意味のずれがおこる可能性があるのである。

(22) *Everyone in the room knows two languages.*

(23) *Two languages are known by everyone in the room.*

Chomsky (*Syntactic Structures*, p. 101) によると、(22)の *two languages* は同一の言語でも異なる 2 言語でもよいが、(23)のそれはすべての人にとって同一の 2 言語であるという。これに対して、この場合も、どんな 2 言語でもよいという人もある。私は native speaker ではないから、どちらとも言えないが、(23)の *two languages* は主語であるから、意味が definite になるであろうことは理解できる。変形は意味を変えないのが原則であるが、主語変形によって多少のちがいが出てくることは認められる。

主語変形をうけると意味がちがいうるということは思考動詞の目的をなす *that*-clause が、主語にならないことの説明になる。たとえば

(24) *They think that he is intelligent.*

の *that*-clause は思考内容を意味している。これを受動文にする場合、

(25) ? *That he is intelligent is thought (by them).*

とはまず言わないであろう。それはこの *that*-clause が主語変形をうけると事実性が付与されるので、思考内容を意味しなくなるからであろう。動詞が *think* でなく *know* ならば、*that*-clause に事実性があるから、これを受動文の主語にできると思う。(24)の受身文は

(26) *It is thought that he is intelligent.*

(27) *He is thought to be intelligent.*

となるのが普通であろう。(27)は(26)からの変形で、(26)が本来の受動文である。この *it* は preparatory *it* というより、*it seems that...* の *it* と同性質のものと解される。

Negation

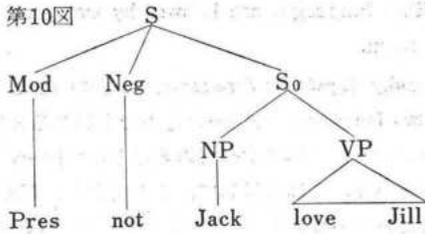
否定文の解釈も主語変形、述語変形と密接に関係する。否定文というのはたつきは判断作用の性質であるから、否定文の構造は、Mod のあとに否定詞をおき、

(28) $S \rightarrow \text{Mod Neg } S_0$

とすることができる。否学文には文否定 (S negation) と動詞句否定 (VP negation) とあるとされるが、どちらも上の規則から導き出すことができる。簡単な例からはじめる。

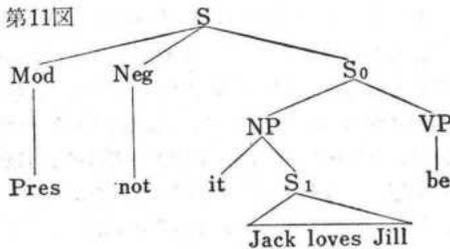
(29) *Jack doesn't love Jill.*

これは VP negation と解釈されるのが普通であるが文否定という解釈も可能である。前者は、第8図に Neg の加わった深層構造から派生した場合である。すなわち



という深層構造から、Jack の主語変形、love Jill の述語変形をへて出来たものである。この場合 Jack は主辞判断の対象として定立されるが、love Jill という VP の事実性は否定の賓辞判断により、主辞の Jack から拒斥される。いわゆる VP negation は、否定の賓辞判断が意味されている場合である。

一方において同じ④が S negation であるという解釈も成り立つ。そのときの深層構造は、



これは [it] [Jack loves Jill] Pres not be という構造で、「Jack が Jill を愛していること」という文表象を否定しているのである。上の VP 否定が「Jack は」「Jill を愛してない」という二重判断の表現であったのに対し、文否定は文表象を否定する単純判断である。このように両者の意味はちがうのであるが、文否定の場合にも it be deletion が行なわれ、表面構造は VP 否定の場合と同じ④になってしまう。実際問題としては④の文は、VP 否定の表現と解されるのが普通であろうが、理論的には文否定でもありうるので、④の文はあいまいであるということになる。

次に数量詞を含む NP を主語とする否定文の意味を考えてみよう。よく問題にされる次の2文を比較すると、

⑧ Many of the arrows didn't hit the target.

⑨ Not many of the arrows hit the target.

前者は④と同じように、理論的にはあいまいであるが、実際問題としては VP 否定ととるのが普通である。すなわち「たくさん矢は」「的に当らなかった」という二重判断の表現と解される。これに対して⑨は文否定と解される。すなわち「たくさん矢の的に当たったこと」を否定する単純判断の表現である。⑧の深層構造は第10図と同型のものであり、⑨の深層構造は第11図と同型のものである。前者の主語は直接の主語変形から来たものであるから、many of the arrows は definite な多数の矢を意味する。これに対し⑨は、[it] [many of the arrows hit the target] Past not be という構造であるから、many of the arrows は indefinite の多数である。これが二次的な主語変形によって主語になると、Neg の not は indefinite な数量詞の前に移されるという変形規則によって⑨の文ができたと言明される。

数量詞をもつ否定文の意味解釈は複雑で、今深く立入る用意がない。ここで述べたことは否定というのは肯定とともに、判断作用の性質であるということである。従って主辞判断に否定ということはない。主辞対象が否定されてしまえば、賓辞判断の結びつきようがないからである。主辞判断は常に肯定する。Not many arrows が主辞であることはできない。⑨の文が否定の単純判断の表現であるとした所以である。英語の表面構造は二重判断の表現形式をとるのが普通であるから

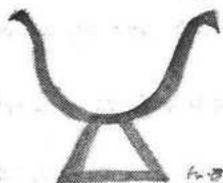
⑩ No one was there.

のような文になる。これは indefinite な someone について [someone was there] なる判断内容を考え、これを否定することによって否定文の some が any に変えられ、[anyone was not there] となり、not が any の前に移され、not any→no の変形をうけて⑩ができたと言明される。No one のような否定の表象は直接与えられるものではなく（われわれは否定の表象を思い浮かべることにはできない）、常に否定の判断が基底にあるのである。（津田塾大学教授）

☆ ☆ ☆ ☆

日・英慣用表現の比較(6)

—色を含む慣用句—



HASEGAWA Kiyoshi

長谷川 潔

アメリカ人のあいだで広く読まれているアン・ランダースの「人生相談」のコラムに、髪の色と目の色が違うために実子を養子と間違えられた親の驚きと嘆きを取りあげられていた。髪の色も、肌の色も、さまざまな人間の構成する社会に住む人が、色に対してもつ発想として考える価値がある。髪も目も黒い単一民族で構成されている日本人には出てきそうもない問題であろう。

それぞれの人に好みのある色があるように、色に対するイメージは、各国々の気候風土、歴史的な背景といったものに深くかかわりあっている場合が多い。そこで、色に関する日・英語の慣用句を、次のように分類して、日本人がある色に対してもつ連想と、英米人のもつイメージと比較、対照してみることにする。

- A—青(緑を含む); B—赤(紅・朱などを含む);
C—白, 黒, 黄; D—「色」という字を含む慣用句

II—A 青(緑を含む)

日本人が青と緑を混同して使うことは、川端康成の名作『千羽鶴』の一節、「もみじは青かった」(The maples were green) からも推察できる。英米人の green に対するイメージは, immature, not ripe, lacking experience(未経験)といったもので、これは日本語の青二才、青田刈などの青のイメージに一致する。

[例] The five officers on the Tokyo National Tax Bureau who were arrested in connection with the Nippon Express Co. case are not **striplings** on kids.

(日通事件が波及して逮捕された東京国税局係官は青二才やチンピラではない。)

青二才を **stripling**, チンピラと kids (子供達) と訳している。英語には「青二才」にあたることばとして, greenhorn (初心者, 世間知らず) というのがある。“Shut up. You greenhorn” (だまれ, 青二才) のようにも使えるが、『天声人語』では上例の **stripling** という単語をよく使っている。

[例] Some people had probably thought of him as a **mere stripling**, but Bobby has left a clean and

pleasant impression behind him.

(なんの青二才かと思う人もあろうが、ボビーの後味はサラッとしてわるくない。Ibid.)

ここでいう「ボビー」とは故ロバート・ケネディ米司法長官のことであるが、「なんの青二才」というのを **mere stripling** と訳している。英語では「まだ青二才だ」というのを He is still **green** のようにもいう。

「緑」にはまた「ねたみ」(jealousy, envy) のイメージが強く、She is green with envy (ねたみで顔が青ざめている) のように用いるが、これは日本人にない発想であろう。

緑は最近、脱公害、人間回復、自然へ帰れのシンボルカラーとして用いられている。これは日本だけでなく全く世界的な現象でもある。ちなみにアメリカで *Green of America*, 『緑色革命』という本がベストセラーになったことは、記憶に新しい。緑と自然に関連して、草木や青いものを作るのが上手な人のことを “He has a green thumb” のようにいう。

毎年5、6月頃になると日本人の話題になるのが、「人間青田買い」である。

[例] There are already extremely brisk **purchase of unripened fruit** in the shape of university students who will be graduating in spring next year. (来春、大学を卒業する学生の“人間青田買い”がすでに活潑に始まっているようだ。『天声人語』)

青田買いは水田のイメージからきたものであるが、purchase of unripened fruit (まだ熟していない果実の買い) と訳したのはうまいと思う。日本の青田を知らない英米人にもよく理解されるだろう。しかし、稲の青青とした水田という6月頃の日本独特の風物からうけるイメージは消えうせてしまう。

英語の blue には blue film, blue stories のようにわいせつな (obscene) イメージがある一方、反対に道徳的に堅苦しく高貴なといった含意もある。貴族のことを blue blood (=an aristocrat) と言うし、一等賞にも blue ribbon が与えられる。

東京映画記者会が選ぶ、その年度の映画最高賞をブルーリボン賞というのは、日本人の伝統的な発想というよりはむしろ、西欧的な教育に影響された英語的発想である。

「青」がもつ英米人のもっとも一般的なイメージは憂うつ (depressing) で悲観的 (sad) なイメージであろう。音楽のブルース (blues) などこの発想からきているし、土・日の休日のあとにくる月曜日のことを Blue Monday というのもこれに由来する。さらに、feel blue (憂うつである) という慣用句もよく知られている。

英語とは多少ニュアンスが異なるが「青」は日本語でも「病弱」または「元気のなさ」「恐怖」を表わす。

[例] **A man of pale face** is generally thin and lank, but he was exceptionally **pale** and stout.

(たいがい顔の青い人はやせてるもんだがこの男は青くふくれている。夏目漱石『坊っちゃん』)

[例] But even now, city children are usually **pale** and delicate.

(現在でも市中に住む子供たちは一般に体格が繊弱で顔の色なども青白い。『天声人語』)

英語では顔色が青ざめることを pale といい、「その知らせを聞いて青くなった」なども “He turned pale at the news” のようにいう。しかし、この pale は青というよりはむしろ血の気の失せた白さを意味しているらしい。なぜなら英米人は turn pale を turn white, または go white というが turn blue とはいわないからだ。

[例] When he was arrested, he **turned white** and trembling.

(逮捕されるときはまっさおになって震えていたそうだ。『天声人語』)

いかりの感情を表わすのに「青筋をたてておこった」という。英語には **He turned purple with rage** と「紫」を使った表現があるが、日本語の「青筋」ほど一般的ではないらしい。

日本語の「青写真」はおそらく英語の blueprint を訳したものであろう。次の例では比喩的に「計画」という意味に用いられている。

[例] We would not like to have use such threatening words as “blueprint for a coup d'état” in reference to it. (“クーデターの青写真”というような不吉なことばは使いたくない。Ibid.)

突然に起る変動、または急激に生じた打撃のことを「青天の霹靂」というが、これは「青空に突然おこるかみなり」のことで中国からきた表現だ。ところが英語にも同一の発想から来ているまったく同じ表現 **a bolt**

from the blue があって、よく知られている。このような表現から自然現象に対する人間の感じ方が洋の東西を問わないことがわかっておもしろい。

[例] Like its start the end of the war was **a bolt from out of the blue**.

(戦争が始ったのも青天のへきれきだったが終る時もへきれきだつた。Ibid.)

この用例では from のあとに out of がつけ加えられているが、これはなくてもかまわない。英語では blue に定冠詞の the がつく、「青空」または「青海」の意味で、詩などに用いられている。日本語では「青天のへきれき」がくり返されているが、忠実に訳すとくどくなるので英語では省略されてしまっている。

II-B 赤 (紅, ピンク, パラ色などを含む)

赤に対するイメージは血 (blood) であるとか思想の赤いとか、日本語と英語が重なることが多い。ところがピンク (pink) に対する連想では、日本語と英語の間に大きな違いがめだつ。日本ではピンク映画という連想から卑猥なイメージがつきまとうが、英語ではそういうセックスへの連想とは逆に、健康な赤ちゃんの皮膚の色、若さ、活力、純心や新鮮さを連想させ、in the pink of health (健康そのもの), in the pink of condition (調子が上々) といった表現もある。

ピンクにはまた、red purge (赤狩り) に代表されるユニョニョのイメージから派生して、pinky というのが、赤になりきらぬピンク、つまり左がかったという意味にも用いられている。したがって、日本のように歌手がみずから Pinky と名乗るようなことは、まずないだろう。有名な New Deal を施行して、アメリカ全体がある意味で社会主義的な体制に接近した当時の大統領フランクリン・ルーズベルト (Franklin Roosevelt) は、右翼から pinko と渾名されていた。

赤い顔 (a red face) が「怒り」や「恥しさ」の感情を示したり、「酔」を表わすのは、日本語も英語も同じである。

[例] He was **red-hot** with rage.

(怒りで顔がほてり赤くなる。『読売新聞』)

[例] Furukawa **in great rage** came roaring into the house.

(まっかになってどなりこんできた。夏目漱石『坊っちゃん』)

赤を使った怒りを表わす表現では、闘牛が赤い布をみて興奮するところから由来するといわれ、see red (激怒する) という熟語がある。I saw red and didn't know

what I was doing. (ぼくはかっとなって何をしているのかわからなかった。)

[例] His face was flushed and crimson like that of a baboon.

(赤シャツの顔を見ると金時のようだ。野だ公と一杯飲んだとみえる。Ibid.)

「金時のような赤い顔」が、佐々木梅治氏によって「ヒヒ(baboon)のように赤い顔」と英訳されているのがおもしろい。「ヒヒおやじ」からの連想であろう。英語の比喩表現には(as) red as a rose [a cherry, blood, fire, a peony, a turkey cock] (ばら, さくらんぼ, 血, 火, ぼたんの花, 雄の七面鳥のように赤い) などがあるが、「赤シャツ」という人物を描写するには、ヒヒ(baboon)が適切だ。

「赤字」になる(go into the red, go into red ink)はおそらく英語から訳されて、日本語として一般化したものであろう。ただし、日本語に「赤字」が出てきても、英語に訳すとき red ink にこだわる必要はない。

[例] In extreme cases, an insane asylum takes loss of ¥40 a day.

(極端な場合は1日に40円も赤字を出す。『天声人語』) 精神病患者の対策をのべた文であることが英文から理解できる。

赤はまた、交通信号の赤から「危険を示す兆候」としても用いられている。

[例] The deteriorating foreign trade balance had provided a danger signal back in May.

(国際収支の赤信号は5月頃から出ていた。Ibid.)

「赤(紅)」を使った日本語の慣用語では「赤の他人」とか「紅一点」などがよく知られている。いずれの場合も英語の red を用いて訳すことは無理のようだ。意味をくんで「あの男はあかの他人だ」(That man is a total stranger.) 「紅一点だ」(She is the only girl in the group (among the boys).) のようにいえばよい。

バラ色が輝やかしい未来を象徴するという発想は西洋のものであろうが、現在は日本語でも同じように使われている。

[例] A perfect society in the future may seem a rose-tinted idea, but people must put up a battle for such a society while not losing sight of their humanity.

(おそろしく便利、精妙になる未来社会はバラ色でもあるが、一面人間性を失うまいとする苛烈な戦場にちがいない。Ibid.)

II-C 白・黒・黄

英米人が white と black から直ちに連想するのは「白人」と「黒人」であろう。英米人は人種による肌の色の違いに敏感で、白人(caucasian), 黒人(negro)のほかにも、アジア人は yellow であり、アメリカ・インディアンは red ということになっている。

「白」と「黒」に対する日本語のイメージに英語が重なるのは、白が精神や身体の「潔白さ」(innocence), 「けがれのなさ」(purity) を表わし、黒が「暗さ」(darkness) や罪悪(guilt, evil) を表わす時であろう。

[例] Leaving aside the guilt or innocence in the case, the fact that the incident occurred is a big shock to consumer movements and resident movements. On the other hand, those who are being subjected to attacks by consumers and residents are probably happy.

(事件の黒白は別として、事件が起ったこと自体、消費者連動や住民運動にとって衝撃的であり、一方消費者や住民の攻撃にさらされている側は喜んでいることだろう。『天声人語』)

[例] We still can't make it out if it's a cube or a square.

(いまだに黒白がつかない。Ibid.)

あとの例では「立方体なのか正方形なのかわからない」といういい方で、「黒白がつかない」を表現している。

[例] The general elections are for the purpose of eliminating the "black mist".

(黒い霧を一掃するための総選挙。Ibid.)

「黒い霧」をそのまま "black mist" と訳しているが、引用符でかこんで日本語からの直訳であることを示している。「悪人」や「もて余しものを」 a black sheep, 「腹黒い人」のことを a black-hearted person というように、black に対するイメージから英米人にもよく理解されるだろう。『天声人語』には、金の延棒に関する大手運送会社々長の不正事件を扱った記事には「黒い霧」と関連づけで「黄色い霧」という表現を使っていた。これはむしろ gold mist と訳すほうが英語的ではなからうか。

[例] There are yellow mists and black mists.

(黄色い霧や黒い霧だ。Ibid.)

日本語では「白」はかならずしもよいイメージだけを連想させるとは限らない。「白い眼で見る」とか「白ける」、「しらを切る」などの表現は、「白」がもつ冷たさを示している。

【例】 They are in favor of protection of nature, but they are against the livelihood of the village being sacrificed. Mr. Hirano, who lived in the same village, began to be looked at with jaundiced eyes by the other villagers. Some said spitefully behind his back that customers would pass by the Chozo Lodge without stopping if the highway were constructed.

(自然保護はいいが、村の生活が犠牲になるのはごめんだ。同じ村民の平野さんは、白い眼で見られるようになった。自動車道路が通じると長蔵小屋は客が素通りするから、などと陰口もでた。Ibid.)

「白い眼で見られる」を be looked at with jaundiced eyes (黄疸にかかっている目つきで見られる) と訳している。この jaundiced は jaundice (黄疸) の形容詞であるが、「ひがんだ」とか「しっとに燃えた」の意味があり「偏見」、「ひが目」のことを a jaundiced view ともいう。ちなみに黄色 (yellow) は臆病な (timid) 卑怯な (coward) という連想が強く、松本智雄氏が Student times 紙上に、次のように述べている。

「黄はヨーロッパキリスト教社会では、ユダの着衣であり、もっともいやしむべき色とされて来た。このことから He is yellow. さらに yellow dog, yellow dog contract (労働組合に加入しないことを条件とする雇う契約) となったのである。…」

yellow にはさらに扇情的な記事などの報道をさす yellow journalism という表現もある。「黄色」に対する英米人のイメージは好ましいものではない。日本人の黄色に対する連想は英米人のものほど悪いものではないと思う。黄色に関する慣用句ですぐ頭に浮ぶのは、「黄色い声」であろう。この表現がどこからきたものかさだかではないが、英語に訳すと a shrill voice (金切り声) となる。

話がそれてしまったが、ふたたび「白」に関する成句をみてみよう。

【例】 so the atmosphere which had begun to flag become gay all at once and all of them cheered up.

(それでしりげかけた座が一時に又活潑になり皆元気になった。武者小路実篤『愛と死』)

ここで使われている flag は動詞で、船の帆がだらりとたれるように話などが「だれる」、興味などが「減退する」の意味である。

【例】 Relations between the two countries have become chilled.

(双方とも白けきってしまった。『天声人語』)
日本と中国の関係を論じているこの文では「白」とい

う色を have become chilled (冷たくなる) ととらえてうまく記している。白は「冷たさ」と反対に高い熱を表わすこともある。

【例】 The moon race between the U. S. and the USSR is becoming hot and close near the goal line.

(米ソの月レースはゴール寸前で白熱化する。Ibid.)
和英辞書では「白熱化」を reach the climax と記しているが、「熱している状態」を is becoming hot としたこの訳もなかなかよいと思う。

【例】 Be there no evidence against you, you think yourself quite safe, boldly putting on an innocent face.

(証拠さえあがらなければ、しらをきるつもりでずぶとく構えていやがる。夏目漱石『坊ちゃん』)

この「しらをきる」も次の「白ぼくれる」も「白」が「潔白」であるという発想から生まれた表現であろう。

【例】 I was much startled, but pretending not to be aware of it, I said...

(自分は「はっ」としたが、わざと白ぼくれて言った。武者小路実篤『愛と死』)

ここでは「気がつかないふりをして」と現されているが、日本語の「白ぼくれる」に該当する英語に white-wash をあげることが出来る。もともとは、生石灰の溶液で、壁、天井などの上塗りに使う白色塗料なのだが、転じて不名誉なことを「おおいかくす」、「ごまかす」の意味で動詞としても用いられている。

「白ぼくれる」とはニューアンスが異なるが、善意から出た「罪のないうそ」のことを英語では white lie という。「白ぼくれる」の反対が、「白状」であるが、この「白」は色よりもむしろ、「自分の犯した罪を白したてること」(『広辞苑』)に由来する。したがって、「白状」は罪人の申し出を書きしるした口書のことであるが、現在では自分のしたことをみとめるといった軽い意味でも使われている。

【例】 He frankly admits this.

(それを平気で白状している。Ibid.)
政府が毎年定期的に発表する公式の調査報告書のことを「～白書」という。この白書は英語の white paper の訳語で、イギリス政府が、外交報告書の表紙に白紙を用いたことから white paper と言われるようになった。日本で用いられるようになったのは戦後のことで、昭和22年7月片山内閣が『経済白書』を発表して以来といわれている。(『広辞苑』参照)

【例】 The nurses of the hospital attached to the Medical Department of the Kyoto University recently

issued a white paper on their livelihood.

(京大医学部付属病院の看護婦さんが、このほど自分たちの生活白書を出した。Ibid.)

日本語のホワイト・カラーは、英語の white-collar がらきた外来語である。精神労働または頭脳労働にたずさわる月給とりが、白のワイシャツを着ていることから、労働者階級のブルーカラー (blue-collar) と対比して用いられているが、昨今のようにカラーシャツが流行してくるとかつては新鮮であったこの表現も時代おくれの感じがする。

自動車の「白ナンバー」は日本独特の表現で white number を直訳しても英語では通用しない。

[例] According to the driver of the bus, the passenger car suddenly came around a curve ahead.

(バスの運転手のはなしでは、カーブの向う側から乗用車が急に出て来たという。荒っぽい白ナンバーにはそういう例はよくある。『天声人語』)

「白ナンバー」(the passenger car) を英訳すると説明的で長くなってしまふためか、英文では「荒っぽい…」以下が省略されてしまっている。

紙面などの何もかいていない白い所を「空白」というか、これは転じて「何もおこなわれないこと」の意味にも用いられる。

[例] If the primary, junior and senior high schools all changed over together, there would be a break.

(高校からいっせいに足並をそろえるとなると空白が出来る。Ibid.)

「空白」は「余白」を意味するときには blank が用いられるが、ここでは中断状態になることを示しているので名詞の break (断絶) で英訳されている。

黒に関する慣用句は英語の方が日本語よりも多いようだ。険悪な顔つきのことを a black look といい、“He gave me a black look” (むっとした顔で私をみた) のように使う。険悪な事態に直面した時には、“Things look black” のようにも言う。

「赤字」と同様「黒字」になる (be in the black) も英語に由来する日本語であるが、これも英語に訳すときには、必ずしも black が使えるとは限らない。

[例] With advanced science and technology backing it up, West Germany has strong competitive power in exports, and its trade is showing a big profit. Since it earns so much foreign exchange, West Germany is sending its capital to other countries in an effort to reduce the profit in its international accounts.

(西独は進んだ科学技術をバックにして輸出の競争力が強く、貿易は大きな黒字をあげている。外貨を盛んにかせぐので、西独は資本を外国に出し、国際収支の黒字を減らそうとしているほどだ。Ibid.)

「黒山の人」の黒は、日本人の髪の色をさしているのではなからうか。髪、肌、目の色が異なる人々によって構成されている英米人には発想できない表現であろう。英語に訳すときには、a large crowd of people というようになる。

II-D 「色」という字を含む慣用句

色と color とを比較してみると、日本語の色のもつ含意のほうが、英語の color よりもはるかに広い。日本語の「色」が、ただ単に肌の色 (complexion) を表わすばかりでなく、表情 (expression) を示すことについてはすでに「顔」(『英語展望』No. 38) の項で述べたとおりだが、ここにもうひとつ夏目漱石の『道草』にあった文例をあげてみよう。

[例] Deeply hurt, she looked at him rebelliously.

(傷つけられた細君の顔には、不満の色がありありとみえた)

日本語を直訳すれば、dissatisfied または discontented となるのだが、前後の文脈から、rebelliously (反抗的に) と訳している。

日本語の「色」が種類を表わしていることは「十人十色」という表現からもうかがい知ることが出来る。

英語の諺 “Every man is his humors” または、“So many men, so many minds” が日本語の「十人十色」に相当するのだが、これを Everyman thinks and acts differently と訳せば意味が明確になる。とにかく「人さまさま」という考え方は、日本にも英米にもあることがよくわかる。

「色」が人間の考え方や、思想の傾向を表わすことは、「政治色」、「官僚色」といった表現にも示されている。

[例] In Japanese political circles there are many former bureaucrats who retain strong bureaucratic coloring.

(日本の政界には官僚出身者が多く、ぬきがたい官僚色をもっている。Ibid.)

[例] The head of the movement should be someone with no political coloring.

(代表者は政治的に無色の人がい。Ibid.)

この例から考えると「政治色」の強い人は a man with a strong political coloring ということになる。これらの表現からもわかるように、英語の color にも個

人の個性とか土地の特色を表わす意味がある。現在では日本語になっている ローカル・カラーも英語の a local color (地方色) がその語源である。

【例】 Mrs. Renzo Sawada of the Elizabeth Sander's Home has been selected for the Asahi Social Service Award. Mrs. Sawada is an **unusual** postwar social worker who tackled the new problem of mixed-blood children.

(朝日報仕賞には、エリザベス・サンダース・ホームの沢田美喜さんが選ばれた。沢田さんは敗戦の落し子、混血児という新しい課題に取り組んだ戦後派の異色ある社会事業家だ。Ibid.)

「異色」はふつう unique と訳されることが多いが、ここでは unusual の訳でもよいと思う。

【例】 It is reported that **anti-American feeling** is growing stronger in Saigon.

(サイゴンでは反米色が高まっているという。Ibid.)

この color は人間の感情を示している。このほか、日本語の色には「かざり」とか「装飾」の意味あいもある。

【例】 Your action has made us happy as setting a **new tone** in government.

(こんどのご配慮は“政治のいろどり”として、よい感じを与えてくれました。Ibid.)

ここで使われている tone は「風潮」とか「ふんい気」の意味で、set a new tone という「新風をふきこんだ」ということになり、原文にみられる淡白な調子の「色どり」とはニューアンスがちがってしまうように思える。

【例】 It also intends to bolt its aid to Spain and Morocco if they do not give **satisfactory replies** to U. S. inquiries about trade with Cuba.

(スペインとモロッコに対しても、色よい返事をしなければ、これから援助はせぬとのこと。Ibid.)

この英文から、原文のような日本語は絶体に出てこないであろう。「色よい返事」という味のある表現が、わかり易い英文に訳されてしまっている。

「色を付ける」は『広辞苑』によれば、「物事の扱いに情を加えたり」、「売値を安くしたり」する意味に用いられるそうだが、反対に売値に「多少の心づけをつける」の意味で用いられることが多くなっている。

【例】 The farmers have begun to **demand more money** as land prices have soared.

(農家も地価が暴騰するにつれて、イロをつけるとい出した。Ibid.)

英語でははずばりと「もっと金を出せ」の意味に訳されている。

『般若心経』によれば、「色」とは有形の万物をさし、これらの万物はすべて因縁の所生で、その本性は実有のものでないから空であるという考え方が「色即是空、空即是色」である。慣用句としては「無」の状態なることをさしてよく使われている。

【例】 If nuclear war breaks out, it will certainly mean the end of everything.

(核戦争になれば、一切色即是空になることはまちがいない。)

以上色に関する慣用句をまとめてあつかってみたが、身体に関する表現と同様、日本語と英語のイメージは、全く重なる場合と、重ならない場合が考えられる。結局重要なことは、日本語の色に関する表現を英訳する時、その色が日本語と異なるイメージをもつ場合、そのまま逐語的に訳して、誤解のもとにならぬようよく注意することであろう。(お茶の水女子大学助教授)

(p. 28 よりつづき)

る日本について悲観的だという点だ。これは、他人の花は赤くみえるということ以外にも、自分の国のことはやはり気がかりになるという人情の自然だと思う。自分の国を愛することは、決してアメリカ至上主義や日本至上主義の旗を振ることではない。啓発された愛情をお互いにもちつづけていきたい。そしていい古されたことだが、自由への最大の保障は不断の監視であるということばを、いま一度お互いに確認しあいたいものだ。大きな政治危機のさなかにある日米両国にとって、このことの重要性が痛いほど感じられる今日このごろだからだ。

(国際商科大学教授)

(Continued from p. 49)

wise putting someone out for you, some apology is always polite:

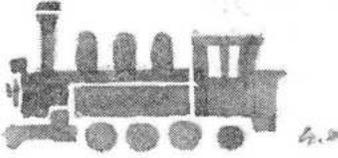
"I'm so sorry to have kept you waiting."

"So sorry I'm late, I hope you haven't been waiting long."

"I hope I didn't inconvenience you the other day."

"It was very kind of you to take so much trouble for me." (To be continued)

SILENCE IS NOT ALWAYS GOLDEN (4)



David Hale

Lecturer

Harrow College of Technology and Art

3. Practical Points

a) Question-and-answer

It seems to me true that most students waste a lot of time trying to work out a far too magnificent answer to the question they have just been asked. Here I want to suggest that economy, of time, words and effort, is necessary. If you listen to the question as a whole you will pick out the key-words easily. Since a reply should come quickly upon the question any silence is stretching the thin thread of conversational flow and the thread can easily break. Conversational English is actually almost always simple so it might be a very useful clue to listen to the *form of the verb* in the question and use as much of it as you need to in as succinct an answer as possible. This economises on time and effort, and the words are largely provided for you. Let me give a few examples, with negative alternatives:

- i. Q. "Where *have* you *been*?"
A. "I've *been* in bed."
or "I *haven't been* anywhere."
- ii. Q. "Would you *have liked to be alive* in the Edo period?"
A. "Yes, I *would have (liked to be alive then)*."
or "No, I *wouldn't have liked* it much, I imagine."
- iii. Q. "What *is* (What's) *he doing*?"
A. "He *is* (He's) *doing* nothing, as usual."
or "He *isn't doing* anything."
or "He *is* (He's) *climbing* on the ceiling, I understand."

(The form {I *am* — *ing*} is very
{he *is* — *ing*} valuable!)

Of course two or three things have to be remembered here: 1) That the person and the verb-form might have to change: 'You' to 'I', for example, and therefore simple alterations like 'Are you going?' into 'Yes, I *am*.' can easily be made. 2) Next, notice the contractions in the answers: 'I've', 'I *wouldn't*', 'He *isn't*'. Almost always the shortened form is used in conversational English, in the reply at any rate. Even sometimes in the question itself, instead of "Where have you been?" you are likely to hear "Where've you been?" or, especially in informal talk, instead of "Would you have liked to have been Prime Minister?" you may hear what sounds like "Would you've liked to've been Prime Minister?"

One of the things which establishes what I might call *conversational confidence*—the native-speaker's feeling that he is getting somewhere and managing to understand and be understood—is this use of the contracted forms. It feels comfortable, whereas the longer, very formal form can feel stiff. 3) Another point to watch is that it is obviously not always necessary to give back in reply the full form of the verb found in the question. In example ii. above, notice that in the first alternative only the first part is necessary: "Yes, I would have," and the part in brackets can be safely omitted. To give a further example:

Q. "Is *she* holding the baby?"

A. "Yes, actually *she is*."

or "No, apparently *she isn't*."

b) Length

In conversational speech there might be a general principle that what you say should neither be too long nor too short.

If what you say is too long, then it begins to sound more like a monologue than a conversation, if it's too short it can be abrupt or blunt and therefore rude. Questions should be short enough to be clear, not so short as to seem interrogatory, and not so long as to allow the listener to forget what the first part was all about.

Likewise answers. To make a short answer is often the easiest way out, but it should not be so short as to seem impolite. A long and tenuous answer is just as impolite and you may find on looking up at the end of it that your listener has either fallen asleep or disappeared altogether!

For this reason it is, especially in the opening stages of a conversation of a more formal kind, not sufficient to use only "Yes!" or "No!" Notice in the example last given that the reply is made less abrupt than the mere affirmative or negative, by adding some polite adverb, or in some way tricking out the length of the answer.

Words can easily be found to add to the single word that really contains the kernel of the reply. More or less any polite word will do! Or another possibility is to make one word feel much longer by stress and intonation. "Yes" can be made into an almost polysyllabic word by such means: "Ye-e-e-s", and when it has length it begins to have respectability. A variety of meanings can be made from the way in which "No" is said. Short and sharp on a single pitch it can feel very abrupt. Given a rising intonation, and a questioning inflexion, "No-o?" it can become the expression of astonishment, and as such is very common and polite. Given a long falling intonation it can make a very strong objection to the idea just expressed, but it still remains polite.

Let me give some very common replies in which some word or phrase is used to tease out the rejoinder to polite lengths:

- i. Q. "Do you like green-tea at breakfast?"

- A. "Yes, *indeed!*"
or "Yes, *really!*"
or "Yes, *I do.*"
or "No, *actually I don't.*"
or "No, *not very much actually.*"

- ii. Statement: "My toothache is very bad this morning." (A statement which clearly requires some comment from the listener)

Comment: "I'm sure it is!" (to be said with conviction and sympathy as "I'm sure" can seem ironic under some circumstances,

e.g. Rich man: "I can hardly afford to keep my third Rolls Royce running."

Bicycling sensei: "I'm sure!")

- iii. Statement: "All elephants should wear registration-plates".

Comment: "Yes, *I agree.*"

or "Yes, *I think so too.*"

or "*What a good idea!*"

There is an almost endless supply of such words: 'apparently, really, usually, sometimes, never...' and with a short verbal statement they can turn the simple blunt affirmative or negative into very polite agreement or disagreement.

- Q. "Did he dive from the top of the Kasumigaseki Building into a bucket of water?"

A. "Yes, *he did, really.*"

or "No, *actually it was a barrel!*"

c) Question recognition

In this context let me say something about recognising questions when they are asked, or recognising when you might be expected to make some kind of reply, or comment, even though no actual question has been put to you.

Obvious forms of questions are clearly recognisable; either the very clear verb form is used, "Isn't it?" or it is used together with signal-words like "What's the time?" "When will you be back, do you think?" "How long will you be gone?", "Which way will you take?"

"Why aren't you taking your umbrella?" and so on.

Also sentences which may not have the clear verb form, or signal-word but which rely on the *rising inflexion* at the end to show that something is being asked are questions; "Your tennis-elbow is hurting you again?" or "You'll be coming in the summer, you said?" These last are often missed in Japan, I find, though students are well-drilled at school on the subject. One reason why they sometimes *feel* missed, where the speaker or questioner is concerned, is because of the formidable silence which ensues—due frequently as I've mentioned to the intense thought-process in the mind of the would-be answerer.

In the next category come all kinds of *remarks or statements* which, while not being questions, *do* require some form of response from the listener. These are difficult for non-native-speakers, but one indication is the 'pregnant pause' which accompanies the statement. Obviously, if you are feeling the rhythm and mood of the conversation you at this point clearly notice that *something is required*. What is required is some kind of rejoinder. Let me give a few examples:

i. Statement: "I've been working all day and haven't had a coffee yet." (This needs some form of sympathetic agreement or some practical suggestion.)

Rejoinder: "Goodness, and it's seven already, shall we go and have one?"

ii. Statement: "Children are a perishing nuisance, but I wouldn't be without my fourteen little darlings."

Rejoinder: "Well, I don't know how you manage, really I don't. But I'm quite happy with my eight."

Often statements, or what seem like statements, are actually questions:

Statement: "You bought this in Mitsu-koshi?"

Rejoinder: "No, actually I made it myself."

In these cases intonation may not necessarily

help you. Question inflexions are often not used, so you must feel that little expectant silence to show that something is needed in the way of comment or rejoinder. Surprisingly, one question asked produced no response on an occasion when I was entertaining some students at home: "You'll have some beer?" I inquired, without the question inflexion, because everyone usually expects students to drink beer, especially free! It was more of a confirmation than a question, but the absence of inflexion-rise made it difficult for the student concerned to recognise that something was required of him. He said nothing, even after a repetition! Luckily I didn't believe his silence and 'watered' him accordingly!

These little pregnant pauses, then, are also a part of conversation, and must be felt and identified, and responded to quickly. Otherwise again the famous flow of conversation is broken. Stumbling from one spurt of exchanges to another, with awkward pauses and blank looks in between, is not my idea of conversation, and unfortunately is rather common at present in Japan in English. Participation in all respects is much nicer, and here I want to say something of 'noises',

d) Noises

When any foreigner comes to Japan, one of the mysteries is trying to make himself understood, even simply, on the telephone. Sometimes when he is struggling hard to make head-or-tail of the thing just said and has been silent for many seconds, he is even further perplexed to hear the other person break off and say 'Moshi-moshi'—in the middle of his concentration! He has learnt that this phrase is roughly the equivalent of 'Hello!' in the west; why should it find its way into the middle of an exchange?

The point is one which is central to communication, whether on the telephone or not, I think. 'Moshi-moshi' also means "Are you still there?", "Are you taking it in?" or "Have we lost contact?" The listener must

show he is still awake and taking things in by making little encouraging noises from time to time.

In normal conversation in English a number of sounds or mumbled phrases have the same duty, and it might be as well to get into the habit of using some of the more common and functional of them.

One situation in which noises often play an important part is when you need time to think about an answer. Silence for meditation is appropriate if you are alone, but if someone has asked you something and waiting for your reply, you should send him some signal to the effect that a) you have heard his question, b) you have understood it, and c) you are now in the process of thinking about the answer and will offer it as soon as possible.

For example:

- Q. "Do all Japanese people sleep with their heads in the middle of the room, and their feet sticking out like spokes to a wheel? Or what is the general custom?"
- A. Stage a) "Ah! Yes..." (I've heard you)
- b) "Let me think a minute..." (and understood you)
- c) "Mmm... well..." (and I'm thinking of the reply)
- d) (if you know) "Actually they all sleep bodies parallel but prefer their feet to be against the wall and like to lie in any direction other than head north which is how dead men are laid out!"

As I mention elsewhere, if you haven't understood the question you can always very simply ask for it to be repeated. If it was spoken too fast, then simply ask the other person to speak a little more slowly. Do not suffer either being in darkness or swamped by speed. If you don't say anything to the contrary the native-speaker will automatically believe that you heard and could understand. There is sometimes no virtue in martyrdom!

Some favourite noises or phrases for the

moments referred to just now are the following:

"Ah!" (meaning: "That's a difficult one.")

"Mmm..." (meaning: "I'm chewing it over.")

"Oh!..." (meaning: "Let me calculate...")

"That's difficult/hard/a real teaser."

and so on; and "Well..." may be one of the most hard-worked of them all.

About the only noise common in Japan which is actually often impolite in English, is "Eh?" This sounds rather rude, and should be substituted by: "*I beg your pardon?*" "*What did you say?*" or "*Sorry, I didn't catch that.*" "*Could you repeat that, please?*" or "*Would you mind repeating that, please?*"

As in Japan, or I suppose everywhere for that matter, in Britain, people make noises of astonishment, surprise, sympathy or agreement during a talk. These are used sparingly between formal speakers, but among acquaintances and friends are more common. There is little need to sweat to learn them, other things being equal, but they help to give that 'aura' of convincing sound that makes a language feel right.

You might hear, for astonishment, "Mmm?" with a rising inflexion, though of course people use different noises according to habit and so forth. For sympathy, "Well...really, how terrible," more murmured than articulated. Agreement might be "Mmm" spoken emphatically with a nod of the head for good measure.

Japanese is a language rich in emphatic conversational noises, so perhaps I need say no more on this subject, except that maybe the most common sound or 'noise' of all in British conversation might be the all-embracing "Ummm", which, if seems to me, depending on intonation can be made to mean anything you like at all!

4. Some Polite Phrases: A few suggestions for various occasions

a) Agreement

You can agree easily, with a nod of the head,

or any simple phrase:

"Yes, I agree." "Yes, I think so, too."

"I've found the same thing myself."

"Well, yes. That's just what I think."

"Couldn't have put it better myself"

b) Disagreement (Contradiction-Objection)

It can seem rude if you violently contradict some one during a conversation; some delicacy is required to disagree with or contradict what has just been said. Tone is important, of course, and things said rather softly and gently can be got away with when if they were said bluntly, they might offend. Some useful ways of disagreeing are:

"Well, I wouldn't quite say that..."

"Do you really think so?, because I would say..."

"I'm sorry I can't quite go along with that."

"Well, that's very interesting, but..."

"But, wouldn't you also say..."

"That's astonishing, but on the other hand..."

and so on.

Most of these would also serve to make some *objection* to what has just been said, too. Some equally useful ones might be:

"Oh, I don't think I could accept that..."

"I'm sorry, but I really can't agree with that."

"I would put it very differently, I'm afraid."

"I think many people would agree with you, but as far as I'm concerned..."

To put it simply, *tact* is necessary.

c) Sympathy (For relatively unimportant things-catching colds, having teeth out, etc.)

"I'm very sorry to hear that."

"Well, that *is* bad luck, isn't it?"

"Well, I hope it will be better soon."

"It's just like it to happen now."

Generally speaking the stronger the incident the stronger the language, but intonation can increase effects very well. If some one has lost a distant relative, you might use the first or perhaps even the second of the above, if said with conviction. But if someone has lost a very close friend or member of their family, generally

there isn't much one can say that is very comforting. So the sympathy of the voice coupled with a fairly strong term of compassion, is the best anyone can do. Even then "I'm really very sorry to hear that." would be apposite.

I am not trying to choose these rather personal things for you; everyone has his own way of expressing his personality in words. The sincerity of feeling comes through surprisingly in such situations, despite mistakes or even sometimes inappropriate phrases.

d) Apologies

It is a useful thing to be able to make some apology to the lady whom you have just knocked down while riding your bicycle backwards, or whom you have just mistaken for an old friend in an enthusiastic greeting. Again the tone and sincerity of your apology will speak for themselves, but rather use one of the common expressions than say nothing at all for lack of the knowledge. Intensity of expression goes with degree of apology, but sometimes a slight apology is worse than the affront it was meant to atone for!

In the first incident you might use: "I'm very sorry indeed." or "Oh! I *am* sorry. I do beg your pardon." and in the second: "I'm dreadfully sorry, I've made a mistake." or "Oh! Please forgive me, I seem to have made a silly mistake." and so on. Other useful phrases might be:

"I'm sorry I really didn't mean to (pour cyanide on your roses)."

"Oh, it's my fault entirely, (I shouldn't have been balancing your piece of priceless pottery on my nose)."

"Please forgive me (I have just driven my car through your closed front door)."

In reply you may hear: "Oh, that's all right, please don't mention it." or "Never mind, I can always (grow some more)." or "Think no more of it." or "Please don't let that worry you." and so on.

In being late for an appointment, or other-

(Continued to p. 44)

Verbal Patterns 試案

—変形生成文法の立場から—

OUCHI YOSHINORI
大内 義徳

小論は変形文法¹⁾の立場から A. S. Hornby の文型を検討し、新たに文型試案を提出しようとするものである。

1. Hornby の特徴

- (1) I expected that a specialist would examine John.
 - (2) I expected a specialist to examine John.
 - (3) I expected John to be examined by a specialist.
 - (4) I persuaded a specialist to examine John.
 - (5) I persuaded John to be examined by a specialist.
- (1)(2)(3)は表層構造は異なるが、共通の意味が感じられる。(4)(5)はそれぞれ(2)(3)と同じ構造である。しかし(2)と(3)では truth value が等価であるのに(4)と(5)では異なる。Chomsky²⁾によれば、(2)(3)の深層構造は NP—V—S(I—expected—a specialist will examine John)であるが(4)は NP—V—N—PS (I—persuaded—a specialist—a specialist will examine John)(5)は NP—V—NP—S (I—expected—John—a specialist will examine John)であるという。

Hornby では意味情報が同じであるのに(1)は **VP 11**、(2)は **VP 3** とされる。一方(2)と(4)とでは異なる構造的意味をもつのにともに **VP 3** として扱われている。こうい

ったことから、Hornby の文型は表層構造による文の分類であると屢非難される³⁾。しかし実は彼の分類基準は一定でなく、次の4つは異なる文型とされる。

- | | |
|-------------------------------------|-------------|
| (6) I prefer to stay indoors. | VP 2 |
| (7) I prefer staying indoors. | VP17 |
| (8) I prefer Tom to stay indoors. | VP 3 |
| (9) I prefer that Tom stay indoors. | VP11 |

ところが次の4つはすべて **VP22** とされる。

- (10) This is a book.
- (11) It's no use crying over spilt milk.
- (12) It seemed useless to go.
- (13) He went mad.

さらに微妙な意味の差を重視し、周知のように次の2つは別個の文型に属ずとしている。

- (14) We found the cage empty.
- (15) We found John a hard worker.

これら二様の分類態度はまったく相反するもので、一つは表層から、他方は深層からである。Hornby の文型はよく言われるような外形偏重では決してなく、さればとて意味偏重でもない。それは分類基準が一定せず、時と場合に応じて揺れ動く所にその特徴を求めることができる。

2. 文型概念とその表示

文型とは文を深層構造に還元し、機能に関する情報を基に、文の構成要素を同定し、その配列の違いにより pedagogy の立場から類別収斂したものである。配列を決定するのは多くは動詞であるから Hornby のように Verb Patterns と呼んでも同じことである。ところでいかなる構成要素を認めるかも一つの問題であるが小論では動詞を軸に Subject, Object, Predicate, Complement を認めることにする。ところで構成要素の配列の違いをもって文型となすというのは必要にして充分ではない。He looks backward. における意味の違い、そしてとりもなおさず文型の違いは、backward が形容詞であるか副詞であるかという文法範疇の違いによるものである。このことから文型を支えるものは機能と範疇であるといえよう。そして文型の表示はこの2つの情報を同時に示し得るものでなければならない。Chomsky は2つの情報を Phrase Structure Rules として公式化し、そのベクトル的表示に成功した⁴⁾。Chomsky の規則は文型とは異なる概念であるがそれは文型を記述し得る。He became

1) Chomsky, Noam, *Aspects of the Theory of the Syntax* (1965) のモデルにもとづく。

2) *Aspects*, p. 23.

3) 例えば *ELEC Bulletin* No. 23, p. 38 太田朗。なお小論は同氏の発言に刺激され、まとめた。

4) *Aspects*, pp. 63—74.

rich. John went mad. をともに文型 P に属するとしよう。この2文は Chomsky の書き換え規則の終端記号列 NP+V+Adj にそれぞれ語彙項目を挿入したものである。

ここで文型 P は NP+V+Adj の構造式をもった文の集合に与えられた名称に外ならないから NP+V+Adj をもって文型 P を代表させることが許されよう。

3. Chomsky の規則が生成するすべての文法的文の構造に、我々の意図する文型の構造が包摂され得るという前提に立ち、Chomsky (1965) の書き換え規則に若干の修正を加えこれを展開させることにより文型を設定してゆく。Chomsky の規則は次のようである。

- (i) S → NP ~ Predicate-Phrase
- (ii) Predicate-Phrase → Aux ~ VP (Place) (Time)
- (iii) VP → $\left\{ \begin{array}{l} \text{Copula} \sim \text{Predicate} \\ \text{V} \left\{ \begin{array}{l} (\text{NP}) (\text{Prep-Phrase}) (\text{Prep-}) \\ (\text{S' Phrase}) (\text{Manner}) \\ \text{Predicate} \end{array} \right\} \end{array} \right\}$ (以下略)

これを次のように修正展開させてゆく。

1. S → NP Aux VP
2. VP → MV (Place) (Time)
3. MV → $\left\{ \begin{array}{l} \text{Be} \left\{ \begin{array}{l} \text{Pred} \\ \text{Prep Ph} \end{array} \right\} \\ \text{V} \left\{ \begin{array}{l} \text{Pred} \\ (\text{NP}) (\text{Cmp}) (\text{Manner}) \end{array} \right\} \end{array} \right\}$
4. Pred → $\left\{ \begin{array}{l} \text{AP} \\ (\text{like}) \text{NP} \end{array} \right\}$
5. NP → (Det) N (S)
6. AP → A (Cmp)
7. Cmp $\left\{ \begin{array}{l} \text{S} \\ \text{Prep Ph} (\text{Prep Ph}) \end{array} \right\}$
8. Prep Ph → Prep NP
9. Aux → Tns (M) (have-en) (be-ing)
10. Tns → $\left\{ \begin{array}{l} \text{Pres} \\ \text{Past} \end{array} \right\}$

S = Sentence, NP = Noun Phrase, Aux = Auxiliary, VP = Verb Phrase, MV = Main Verb Phrase, Place, Time = Place, Time Adverbial, Manner = Manner Adverbial, Pred = Predicate, Det = Determiner, A = Adjective, Cmp = Complement, Prep Ph = Prepositional Phrase, Tns = Tense, Pres = Present, M = Modal, (have-en) (be-ing) 完了形, 進行形形成素。

4. 単文型

上の規則を動詞について展開させ深層で S 一つからなるものを Simplex Sentence Pattern とする⁵⁾。

⁵⁾ 以下 S と略す。なお Aux については文型を直接左右しないので、必要な時以外は考察外に置く。

- S1 NP+Be+Pred
- S2 NP+Be+Prep Ph
- S3 NP+Vc+Pred
- S4 NP+V
- S5 NP+V+Prep Ph
- S6 NP+V+NP
- S7 NP+V+NP+NP
- S8 NP+V+NP+Prep Ph¹
- S9 NP+V+NP+Prep Ph²
- S10 There+Be+NP+Prep Ph

(文例)

- S1 a John is very tall.
- b I am fond of snakes.
- c Tom is a good student.
- S2 a He is in the yard.
- b Tom is over there.
- S3 a Poor John went mad.
- b He became a doctor.
- S4 a The moon rose.
- b They gave in.
- S5 a He dashed into the room.
- b Tom ran out into the yard.
- S6 a I know your name.
- b He put away his books.
- c We looked at the bird.
- d He resembles his father.
- S7 a Show me your hand.
- b He read the letter to me.
- c She has made coffee for us.
- S8 She reminds me of her mother.
- S9 I put the book on the desk.
- S10 There is a pen on the desk.

S1~5 の下位区分は品詞により、S6 以降は Prep Ph の特性などによった。

S1 N. R. Cattell (1966) や P. Roberts (1962) では S1 a, c に独立の地位を与え2つの文型としている。しかし Predicate Noun, Adjective は機能や意味の上で異なる文型となすほど差はない。また glad, afraid 等は補文を要求するので tall, young 等とは区別して扱う。

S2 The food is for dogs. The man is from Chicago 等を S2 とする人もいるが小論では S1 とする。

(1) The food is for dogs. ⇔ The food is the one for dogs. (S1)

(2) The man is in the yard. ⇔ *The man is the one in the yard. (S2)

(1)の Prep Ph を機能的には Predicate Adjective と考える。(2)の Be は(1)とは異なり存在を意味し、Prep Ph はその場所を規定する。

S3 Vc=[+V,+copula]⁶⁾

S4b NP+V+Prt において自動詞の場合 Cmp との区別は外心構造をもつものを Prt (=Particle) とする。

He dashed in. He went out. (Cmp)

He gave in. The light went out. (Prt)

V+Prt は意味・分布の点からも一つの語彙項目として扱うが、表面上類似の形式をもつものが他に二、三ある。ここで次の4つの観点からこれらの feature analysis を試みる⁷⁾。

- (1) Pseudopassivization transformation
- (2) Action nominalization transformation
- (3) Particle movement transformation
- (4) Prep-relative transformation

	語彙項目	(1)	(2)	(3)	(4)
A	1 remain/in	-	-	-	+
	2 look/over	-	-	-	+
	3 go/up	-	-	-	+
B	4 look/at	+	-	-	+
	5 look/into/	+	-	-	+
	6 run/after/	+	-	-	+
C	7 give up/	+	-	+	-
	8 look up/	+	±	+	-
	9 turn on/	+	±	+	-

- 1 He remains in England.
- 2 He looked over the wall.
- 3 Tom went up the hill. (以下略)

Criterion (1)(2)が+なら動詞+前置詞(副詞)の結合度が高く、融合してあたかも一個の他動詞と化したとみる。(3)は V+Prtであるか否かを決定する基準。(4)が+ならその構造が (V+Prep)+NP というより V+(Prep+NP)である。語彙欄の斜線は、文を読み直観的に結合

6) smell, feel, taste などは主語に [+animate] の名詞をとるので、The rose smells sweet.を Rosenbaum, P.S. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions* (1967) p. 98 では次の深層構造をもつとしている。someone smells [the rose] NP [the rose] NP [be sweet] vp]s それ故不適当ではあるがあえてこれらも S3 としておく。

7) 表中+は passable, -は non-passableであることを示す。インフォーマントは大学卒米婦人。この4つの criterion は微妙で+か-か決めかねるものもありインフォーマントにより若干異なる。例えば look at の passivization をすんなり認めない人もいる。Gleason, Jr., *Linguistics and English Grammar*, p. 309.

の切れ目を示してもらった。2, 5 は examine の意では look over/, look into/であり6も比喩的に「尻を追いまわす」の時は run after/であるという。

B 類は副詞(句)を介在しうが C 類は不可である。...will no doubt depend at least in part on what grammatical training they have received⁸⁾。

* He gave finally up the attempt. A 類も比喩的に使われると B 類へ機能推移をおこす。

* The station was arrived at by us. ...the author explains assumption underlying grammatical structure, describes how rules are arrived at...⁹⁾。

C 類と B 類の区別に動名詞変形で of をとるか否かを基準とする人もいるが¹⁰⁾分析表から明らかなように決め手にはならない。また上の分析から3つの異なる構造を認め次のように記述する。

- A V+Prep Ph
- B V+Prep+NP
- C V+Prt+NP

小論ではC類を単一語彙項目として、B類は受身変形が可能であるからC類に準じた扱いをする。V+Advl+Prep (put up with, make up for), V+NP+Prep (take part in, take care of) 等はB類に含める。後者では phrasal verb の一要素たる NP が本来の性質を顕在化する場合もある。take good care of, ...the question of what uses we can make of linguistics and psychology in teaching English.¹¹⁾

S6d Vm=Middle verb. Manner Advl をとらないから受身変形も適用されない¹²⁾。

S7a は次の形で変形されたとし基本型に扱わない人が多い。X+VP+NP₁+to/for+NP₂+Y⇒X+VP+NP₂+NP₁+Y。理論的にはそれでよいが、小論では pedagogy の立場から S7 の下位区分として扱う。

S8 外見上 S7 と似ているが上の変形は適用されない。

S9 Put the book (near, by, under) the table. のいづれも可。目的語の NP に後置修飾句が付加された場合 Prep Ph と要素配列の転換が可能である。また NP と Prep Ph の間には Nexus が認められ、C7 (後出) に入れてもよい。

S10 これは S2 と同じ深層構造をもつようで S2 の下位区分としてもよい。しかし深層主語と考えられる名詞

- 8) Langendoen, D. T., *The Study of syntax*, p. 10.
- 9) Roberts, P., *Understanding Grammar*, ブックカバー。
- 10) 中島文雄, *ELEC Bulletin*, No. 22, p. 22.
- 11) Brosnahan, L., *ELEC Bulletin*, No. 29, p. 24.
- 12) Chomsky が Vm としている cost, weigh は The car weighed two tons. の two tons が目的語の NP というよりは weigh を規定する Complement と考える。

は[-definite]の特性をもつであろうこと, there が表層主語の機能を果たすことなどから独立した扱いをする¹³⁾.

5 複文型

深層で S が他の S を含むものを Complex Sentence Pattern とする¹⁴⁾.

- C1 [NP+[Be+[NS]_{NP}]VP]S
- C2 [NP+[Be+[A+[Prep+[NS]_{NP}]AP]VP]S
- C3 [NP+[V+S]VP]S
- C4 [NP+[V+[Prep+[NS]_{NP}]PP]VP]S
- C5 [NP+[V+S+(Prep Ph)]VP]S
- C6 [NP+[V+[NS]_{NP}]VP]S
- C7 [NP+[V+NP+S]VP]S
- C8 [NP+[V+NP+[Prep+[NS]_{NP}]PP]VP]S
- C9 [NP+[V+[NP+S]_{NP}]VP]S
- C10 [NP+[V+[NS]_{NP}+Prep Ph]VP]S
- C12 [(NS)_{NP}+Be+Pred]S
- C13 [(NS)_{NP}+Be+A+Prep Ph
- C14 [(NS)_{NP}+V]S
- C15 [(N+[(NS)_{NP}+Be+Pred]S)_{NP}+V]S
- C16 [(NS)_{NP}+V+NP

(文例)

- C1a My hobby is to collect coins.
- b My hobby is collecting stamps.
- c The fact is that I am tired of life.
- C2a John is eager to please.
- b They were impatient for the bus to start.
- c He is sure of passing the exam.
- d He is sure that he will pass the exam.
- C3a John refused to go.
- b We enjoyed listening to music.
- C4 He went swimming in the river.
- C5a She sat waiting on the bench.
- b He died a begger.
- c He acted as interpreter.
- C6a I like to eat in bed.
- b I don't want anyone to know.
- c I like having meals in bed.
- d Do you mind my staying out late?
- e They desire him killed.
- f They proved him (to be) wrong.
- g We saw that the plan would fail.
- h I know what to do.
- i Nobody knows whose it is.
- j My shoes want mending.
- C7a The sun keeps us warm.
- b What made you think so?
- c I persuaded him to examine John.
- d I can't have you doing that.
- e I got my watch mended by him.
- f People crowned Richard king.
- g I regard John as pompous.
- h He forced me into accepting it.
- i I warned him that he should give up.
- C8a We accused her of being a liar.
- b Show him how to do it.
- c Please tell me where you live.
- d They told me that I was too early.
- C9a I saw him go out.
- b We heard him giving orders.
- c I heard my name called.
- d We found the cage empty.
- C10a I shall leave it to specialists to discuss the matter.
- b I owe it to you that I am still alive.
- c He confessed to her that he had spent all his money.
- d I promised John to bring money.
- C11a I count it an honor to serve you.
- b They considered it a great compliment for the President to visit them.
- c We think it most dangerous your climbing the mountain alone.
- d Do you think odd that I live by myself?
- e I believe that it is foolish behaving like that.
- C12a To obey the laws is everyone's duty.
- b It is a pity to waste it.
- c It is easy for us to please John.
- d John is easy to please.
- e Shooting birds is forbidden.
- f It is foolish behaving like that.
- g He is certain to come.
- h It is sure that he will come early.
- C13a It's kind of you to say so.

13) Complex Sentence と考えてよい。「There is 構文の分析」中島文雄, *ELEC Bulletin*, No. 28.

14) 以下 C と略す。S は無限に展開されるから理論的には複文型の数は決められない。ここでは原則として主体文に S が一つ埋め込まれたものを複文型とした。なお文の埋め込み操作については Rosenbaum, Peter S., *The Grammar of English Predicate Complement Construction* (1967) に依った。

b You are kind to say so.

C14a John seems (to be) honest.

b It seems that John is honest.

C15a It seems (to be) impossible to do so.

b It doesn't seem much good going on.

c It appears unlikely that we shall arrive in time.

C16a It gratified him to hear of her success.

b It didn't help him any fishing that far out.

c It surprised me that John came early.

d John strikes me as pompous.

C1a については外形は同じだが深層構造の異なる文がある。

(1) Our plan is to meet each other every Friday.

(2) We are to meet each other every Friday.

(1)は C1a であり to meet 以下は our plan の内容を敷衍している。主語となる名詞は [-animate] の特性をもつ。(2)の to be は have to, be going to などと同様擬似助動詞¹⁵⁾と考える。また come to, learn to も [+stative] の動詞を伴う時同様に考えることにする。

C2 この文型は従来の Verb Pattern の枠組では扱われない。Hornby では Adjective Pattern としているが小論では別扱いをせずまとめて verbal Pattern¹⁶⁾と呼ぶことにする。

ところで例の John is eager to please. と John is easy to please. に代表される2つの文型は結局 eager と easy の統語素性の違いによると思われる。前者は主語に [+animate] の名詞を後者は [-animate] の名詞をとる。ここで形容詞の統語上の諸特性について feature analysis を試みる。

Criterion 1 選択素性, 主語に [+animate] [-animate] のいずれをとるか。

2 補文標識の選択

- a. for~to
- b. Poss~ing
- c. that

3 外置変形の適用

- a. It~for~to
- b. It~of~to

15) Joos, Martin, *The English Verb*, p. 20 以下 be able to は副詞によって修飾されたり接頭語をとったりするので be + 形容詞 + 不定詞とみなす, be less able to, be unable to the fact that we are able, in this way, to account for...

16) 従来の形容詞を [+Verbal, -Verb] の素性をもつ動詞とする考え方もある。Jacobs & Rosenbaum (1968) など。

c. It~that

		1	2			3		
語彙項目			a	b	c	a	b	c
1	glad	+	○	◎	◎	×	×	×
2	sorry	+	○	◎	◎	×	×	×
3	afraid	+	○	◎	◎	×	×	×
4	anxious	+	○	○	○	×	×	×
5	careful	+	○	○	○	×	×	×
6	desirous	+	○	○	○	×	×	×
7	ignorant	+	×	×	○	×	×	×
8	confident	+	×	×	○	×	×	×
9	aware	+	×	×	○	×	×	×
10	content	+	○	×	×	×	×	×
11	impatient	+	○	×	×	×	×	×
12	eager	+	○	○	×	×	×	×
13	certain	±	○	◎	◎	×	×	○
14	sure	±	○	◎	◎	×	×	○
15	fortunate	±	○	○	×	×	×	○
16	curious	±	○	×	×	×	×	○
17	lucky	±	○	×	×	×	×	○
18	easy	±	○	×	×	○	×	○
19	difficult	±	○	×	×	○	×	○
20	pleasant	±	○	×	×	○	×	○
21	kind	±	○	×	×	×	○	×
22	stupid	±	○	×	×	×	○	×
23	wise	±	○	○	×	×	○	×
24	ready	±	○	×	×	×	×	×
25	fit	±	○	×	×	×	×	×

※表中◎印どうしは意味が同じであることを示す。

1から12は C2 の文型をなす。これらの形容詞は対象や目的を補文としてとる。13から23までは [+animate] の名詞が表層主語となるがこれは代名詞置換変形が適用されたもので C2 とは区別されなければならない。

同じ形容詞でも2つの文型にまたがる場合も少なくない。

(3) He is curious to know it. C2

(4) It is curious that he should have asked you that question. C12

また4, 5, 6のようにどの補文標識を選んでも意味は同じだが1, 2, 3, 13, 14のように異なるものもある。

(5) She was afraid to wake her husband up.

(6) She was afraid of waking her husband up¹⁷⁾.

C3 これは Rosenbaum のいわゆる動詞句補文構造で、次の3点で C6 とは異なる。

1. 擬似分裂文変形が negative である。

*What John began was to walk.

2. 補文を What で尋ね答えを引き出せない。

*What did John refused?

しかし What did John refused to?

He refused to go.

3. 主文のそれと異なる主語を補文の主語にできない。

*John stopped Mary singing.

C3a 類は他に continue, fail, manage 等

C3b 類は finish, cease, continue, leave off 等

C4 この文型を次の C5 と同じに扱う人もいるが C5 と異なり補文は主体文と必ずしも同時生起をなさず、叙述的というより主体文の動詞の目的を示すようである。だから He went fishing in the river. の深層構造は概略次のように考えられる。

[[He]_N[Past]_{TNS}[[go]_V[[for]_P[[it]_N[He swim in the river]_S]_{NP}]_{PP}]_{VP} このことは次の例からも承認されよう。

- (1) What did she go downtown for?

She went shopping there.

- (2) How did she go there?

She went there dancing.

C5 a は埋め込み文が Aux の Tns と formative 'be +ing' を選んだもの。C as 以下は Prep Ph で様態の副詞とも考えられないこともないが小論では as を補文標識とみなし動詞句補文と考える。次の3つは外形は同じだが深層は異なる。

- (1) He acted as interpreter.

- (2) He acted like an interpreter.

- (3) He looked like an interpreter.

(1)' [[He]_{NP}[[acted]_V[He was interpreter]_S]_{VP}]_S

(2)' [[He]_{NP}[[acted]_V[like an interpreter]_M]_{VP}

(3)' [[He]_{NP}[[looked]_V like[an interpreter]_{NP}

(2)の like an interpreter は He acted bravely. における bravely の如く様態の副詞である。(3)は単文型 S3 に属する。

C6 所謂思考・情意動詞が作る文型である。'for~to' 標識を選ぶ動詞は自ら何々するという積極的な意志、決心を意味するものが多く時の観点からみると未来へ志向し、補文の行為は個別的、未完結であることが多い、一方 'Poss~ing' を選ぶ動詞は許可、禁止、想起、伝達を

- 17) もっとも(6)は(5)と同じ意味もある。

意味するものが多く、時の観点からは過去へ向かい一般のまたは完結を意味する場合が多い。remember, forget などはこれらの傾向が強く、違った文型とせねばならない。like などでは往々にして 'for~to' を選んでも一般的習慣的行為を表わし得る¹⁸⁾から 'Poss~ing' と区別するには及ばないが次の例では一刀両断にはいかない。

- (1) They reported the enemy to have suffered a decisive defeat.

- (2) They reported the enemy's having suffered a decisive defeat.

(1)(2)とも「敵の敗北は決定的だ」と報告したの意だが、(1)は「敗北は決定的だ」と報告したけれども実際は敗北したかどうかわからない。(2)は敗北が事実であり、その事実を報告したのである¹⁹⁾。

C7 をなす動詞は使役・作為動詞の類で目的語に [+animate] の名詞をとる。

- a. 作為動詞の類、埋め込み文に S1a をとる²⁰⁾。

- b. to の削除は義務的、他に let, bid など。

- c. lead, cause, compel, など。helpは随意的に to が削除される。他に advise, warn, remind 等がある。これらは 'for~to' 'thar' 'Poss~ing' を選ぶ。

- (1) They persuaded him to go.

- (2) They persuaded him that he should go.

- (3) They persuaded him that they gave it up.

- (4) I advise him to start at once.

- (5) I advise that he go at once.

- (6) I advise him I am going.

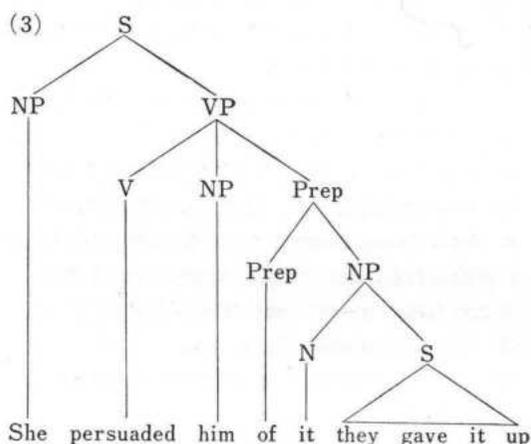
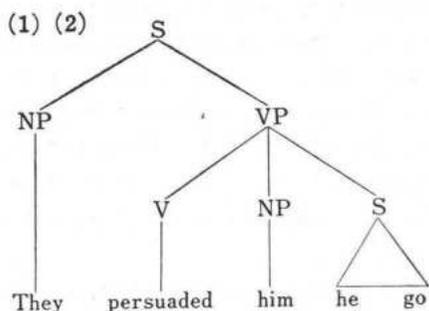
(1)(2)(4)(5)は使役の意味をもち 'that' を選ぶ時は should や仮定法現在が用いられる。ところが(3)(6)では表層構造は同じだが、同じ内容を不定詞を使って表現できない、Modal又は仮定法が使われない、ある行為をさせるといふより「誰々にあること」を伝達告知するという意味が共通に認められることなどから(3)(6)は他の文型とする。

(1)(2)および(3)の深層構造を概略次頁の図のように考える。

18) 'I like to do it.' mean, 'I like to do it habitually.' Sargeant, J. A., *Brush up your English* (北星堂) p. 15.

19) 井上和子氏からの私信による。二、三の native speaker に尋ねたがやはり意味の差は認められるという。それは不定詞と動名詞の違いによるばかりでなく主語の they もかんでいるのではないだろうか。(1)の they は people in general であり People say, It is said ~などと言えり。(2)は people in general ではあるまい。

20) They chose him to be king. は to be を任意削除できる。しかし to be の有無により意味の違いが認められる。Nida, E. A., *A Synopsis of English Syntax* (大修館) p. 25及び訳者註 p. 164.



(7) I want this box opened.

(8) I had this box opened.

(7)(8)は表層は同じだがそれぞれ C6 b, C7 b に受身変形を適用したものである。

g Hornby では VP10 で as NP を副詞としているが小論では埋め込み文と考え as を補文標識と認める²¹⁾。変形操作を示すと、

I regard John[(John)_{NP}(be pompous)_{vs}]s

1. I regard John as[(John)_{NP}(to be pompous)_{vp}]s

2. I regard John as[(to be pompous)_{vp}]s

3. I regard John as pompous.

1. 補文標識配置変形 2. 同一要素削除変形 3. to be 削除変形

h Prevent NP from, force NP into, fool NP into 等で Prep には from (out of) か into のいずれかをとる。

C8 この文型は若干問題がある。つまり C7 と category

ry の配列が同じである。

(1) We forced him into speaking.

(2) We accused her of being a liar.

(1)は C7 で上述のように特定の Prep をとり使役の意味をもち主体文の動詞の示す行為は埋め込み文のそれよりも時間的に前である。

(2)は C8 で 'for~to' を選ばないし、使役の意味はなく単なる情報の付加を意味する。以上の点から互いに異なる文型とした。

C9²²⁾ b は深層で Aux 'be~ing' を選んだもの。これは ambiguous である。Mary saw the man walking toward the station. は(1) The man walking toward the station was seen by Mary. (2) The man was seen walking toward the station by Mary.²³⁾ である。(1)の意味では関係詞節から作られた文である。

C は a の埋め込み文に受身変形を適用した形である。

C10 d は Hornby が外形扁重であるとの例証によく槍玉にあげられる。次は表層が同じだが深層構造は異なる。

(1) I want John to bring money.

(2) I asked John to bring money.

(3) I promised John to bring money.

(1)' [I]_{NP}[[want]_v[[it]_N[John bring money]_s]_{NP}]_{VP}

(2)' [I]_{NP}[[asked]_v[John]_{NP}[John bring money]_s]_{VP}

(3)' [I]_{NP}[[promised]_v[[it]_N[I bring money]_s]_{NP}

[to John]_{PP}]_{VP}

C11 これは埋め込み文にさらにもう一つの文が埋め込まれたもので I count it an honor to serve you. の深層構造は次頁の図のようであろう。

C6 をなす動詞のうち think, believe, know, see など思考を意味する類はこの文型をとる。

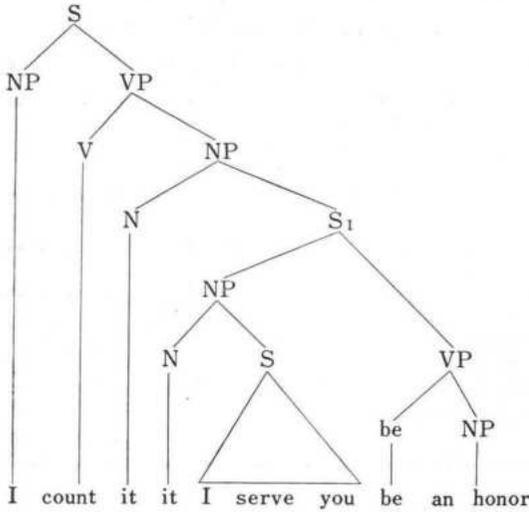
C12 形容詞と動詞は多くの点で共通点を持つことが明らかにされている。文型参与もそのひとつであろう。C12 をなすものは C2 で行なった分析表13~20までである。

次の文で for が補文標識か、前置詞かあいまいであ

22) C9 の分析は中島文雄、「Objective Complement の種類(2)」ELEC Bulletin, No. 30 に従う。Hornby の We found John a hard worker. は We found John to be a hard worker. の to be を削除したものであり、具体的な事物の感覚的把握でなくひとつの表象であってみれば Hornby のいうように区別すべきであろう。小論では上の文は C6 f に属する。

23) Chomsky, *Language and Mind*, p. 43 あるいは Chomsky (1957) p. 82. 教室では必ず問題になるが殆んどこの文法書は一行もふれておらず明快に説明したのは Chomsky (1957)が始めてであろう。ただし山崎貞『新自修英辞典』p. 482, 空西哲郎, 「教室英文法シリーズ」6, 文/上, pp. 113~117.

21) choose, elect は for~to, as~to のいずれの補文標識も選べる。



る²⁴⁾.

(1) It is bad for him/to smoke.

(2) It is wicked/for him to smoke.

(1)(2)は斜線のように若干のポーズがおかれる。このことから(1)は前置詞(2)は補文標識と考える。

(1)' [[it]N]NP is bad for him [(for[he]NP) to [smoke]VP]s

(2)' [[it]N]NP is wicked (for him) [for[he]NP to [smoke]VP]s

(1)は埋め込み文の he と標識が, (2)は主体文の prep と him が同一要素削除変形で削除されたと考える。

C13 正直のところこの文型の扱いはわからない²⁵⁾.

'of' を所謂主格属格とみ, 不定詞句の意味上の主語と考えられなくもないが, 小論ではこれを Prep Ph と考える。of NP を埋め込み文の主語としない訳は, 類似の **C12** と比較した場合, 次の点で大いに異なるからである。第一 for の前には休止が置かれるが of の前には置かれない。第二に次のような構造では for NP は明らかに主語だが of NP は主語と認められない。

(3) For you to do that is impossible.

(4) *Of you to say so is kind.

(5) It is kind of you to say so.

(6) You are kind to say so.

(5)(6)の派生過程を示すことにする。

24) Zandvoort, R. W., *A Handbook of English Grammar*, p. 20.

25) Rosenbaum, *The Grammar of English Predicate Complement Constructions* (1967) でもこの扱いは未解決で John was wise to leave early. — John was wise[^]S. S = John leave early と考えられるという。

[[it]N[[you]NP[say so]VP]S]NP be kind of you

1) [[it]N[for[you]NP[to say so]VP]S]NP be kind of you

2) [[it]N[[to say so]VP]S]NP be kind of you

3) [[it]N]NP be kind of you [[to say so]VP]S

1) 補文標識配置 2) 同一要素削除変形で埋め込み文の you を削除, さらに補文標識削除 3) 外置変形

2') [[it]N [for[you]NP[to say so]VP]S]NP be kind

3') [[it]N]NP be kind[for[you]NP[to say so]VP]S

4') [you]NP be kind[[to say so]VP]S

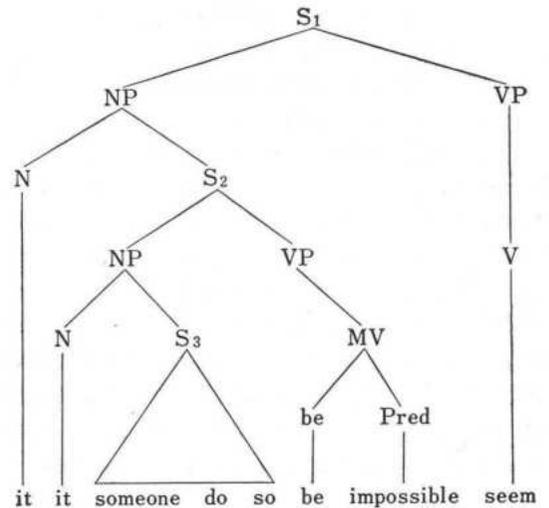
2') 同一要素削除変形で主体文の you, そして of を削除, 3') 外置変形 4') 代名詞置換変形で it に you を代入, for を削除, 同一の形容詞でも **C12** と **C13** をなす場合もある。

(7) It is not good for you to live alone.

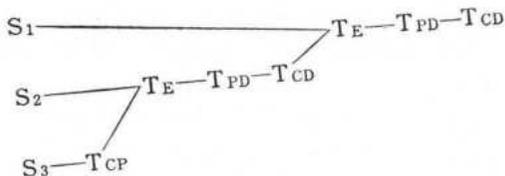
(8) It is good of you to help him.

C14 Hornby では a は **VP 25**, b は **VP 21** とされている。これらは同じ深層構造をもち, 変形の過程が違うだけであるから, 小論では同一文型内の下位区分として扱う。turn out, appear, chance 等がこの文型を作る。prove は a; matter, occur は b をなす。

C15 Hornby の **VP 22c** にあたる文型である。It seems (to be) impossible to do so. の深層構造は図のようであろう。



そして次の一連の変形操作が加えられ, 上の文が生成されたと考えられる。



C16 John strikes me as pompous. についてはよくわからないので、小論では tentative な解釈しかできない。Chomsky²⁶⁾ はこれについて 2つの異なった解釈を試みている。ひとつは深層構造において、strikeの主語は John であるかも知れない。他は John is pompous. を埋め込み文とする次のような構造である。it^s—strikes me. 小論では後者の立場を採り as を補文標識とみなすことにより、John strikes as pompous. を実現させた。

[[it]_N[[John]_{NP}[be pompous]_{VP}]_S]_{NP} strikes me

- 1) [[it]_N as [[John]_{NP}[to be pompous]_{VP}]_S]_{NP} strikes me
- 2) [[it]_N]_{NP} strikes me as[[John]_{NP}[to be pompous]_{VP}]_{VP}
- 3) [John]_{NP} strikes me as[[to be pompous]_{VP}]_S
- 4) [John]_{NP} strikes me as[[pompous]_{VP}]_S

1) TCP で 'as to' を配置, 2) TE で埋め込み文の S を主体文の外へ出す。3) TPR で it を John で置換, 4) TTBDD で 'to be' を削除。

- (1) John regards me as pompous.
- (2) John strikes me as pompous.
- (3) John impresses me as pompous.

上の3つは表層構造は同じであるが(1)では me と pompous との間に nexus が認められ、先きにみたように C7 である。(2)(3)は John と pompous が nexus をなしている。ところで、(2)(3)の as pompous を様態の副詞とみられないこともない。(*He regard me favorably. しかし He impressed me favorably.) 確かに impress は Manner をとるが John impresses me as pompous. における as pompous はいかに impress したのかをいっているのではなくいかなることが impress したかを表わしている。c.f. He impressed me strongly as pompous. (1)は受身変形が可能だが(2)(3)は不可能である。

6. 以上きわめて概略的に Hornby の文型を眺め、問題の所在を求め、再編成を試みた。一体文型設定は学問的に厳密であればある程血の通わぬものとなり易い。それは常に実用との妥協が迫られる。小論では理論と実際の

調和を心がけたつもりだが成功は心もとない。

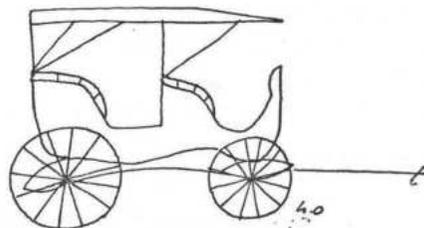
まったくの門外漢ゆえ盲蛇に怖じず牽強附会はもとより珍説、奇解釈が多々あるものと信ずる。ここに大方の叱責を仰ぎたい。(横浜市立共進中学校教諭)

主な参考文献

Chomsky, N., *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, 1965.
 Hornby, A. S., *A Guide to Patterns and Usage in English*, 研究社, 1964.
 Rosenbaum, P. S., *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, MIT Press, 1967.
 Nakajima, F., 「基本文型について」, *ELEC Bulletin*, Nos. 22, 23, ELEC, 1967—1968.
 Nakajima, F., 「新英文法講座」, *ELEC Bulletin*, Nos. 29—32, ELEC, 1970—1971.

(p. 23 よりつづき)

す。宗教では Protestant, しかしいずれにしても非常に宗教的である。そして支持する政党では区別することはできないけれども地域的にいうと、やや中西部が代表的なアメリカ人に近い。収入でいうと、家族単位でいって年取 8,000 ドル前後。それから大都市及びその周辺に住んでいる。将来はもうちょっと郊外の小さい住宅に住みたいと念願している。そしてことばなどでいっても地域的にいうと中西部が中心になっていて、心理的に考えると、その心の中では democracy の面も持っている反面、非常に pragmatism な考えをする。共産党には概して反対であり神を強く信じている。帝国主義的であり、そして軍需産業と何らかの関係を直接間接に持っている。人種差別はなかなか払拭できない。そういうイメージをずっと足して平均的にすると、ここに平均的なアメリカ人というイメージがやや出てくる。ほんとうはさらにそれを圧縮してしまえばいいのかもしれませんが、へたな圧縮のしかたをするとかえって誤解が起こるかもしれない。だからかなり広い幅で私はきょうの結論にしたわけです。(1973年5月26日 ELEC 月例研究会における講演の速記) (東京女子大学教授)



26) *Aspects*; p. 229.

『変容する英語』

ブライアン・フォスター著、吉田弘重訳
研究社刊, 312pp., 1973, ¥ 1,700

TAKEDA KATSUHIKO
武田 勝彦

言語は元来土着性が濃く、可変部分と不変部分を比較すると、遙かに後者の方が大きい。それだけに可変部分の微細な変化が目につき易い。近年、科学技術が発達し、マスコミの機能が世界全般に行きわたるようになったために、可変部分の変容度は量的にも質的にも高まって来た。特に英語圏は全世界の大陸に及んでいるために、水平的に作用する力は大きい。フォスター氏はフランス語文化圏で研究を積んだ人だけに英語の微細な変化の翳りにも極めて敏感である。氏は具体例を中心として臨床的に英語の変質状況を記述しているために、読者は多面的に複雑な言語の変化にごく自然なアプローチをすることができる。それだけに論理的裏付けに欠ける点もある。しかし、言語を現在あるがままの姿で捕えようとすると、必然的にかかる方式を取らざるを得なくなる。

原著は *The Changing English Language* と題して1968年に Macmillan から刊行された。その後、1970年に Pelican Books の一巻に収められたために、かなり広く読まれるようになった。本書の構成は、「序論」「アメリカの影響」「外国の影響」「新しい社会」「語構造」「文構造」「発音」となっている。これらのすべての章に共通な特色は著者が「あくまですぐ前の世代が用いた言語」に大きな関心を払い、現代に密着した資料を豊富に揃えていることである。これは本書の最も大きな強みといえよう。水平化して来た言語の変化に対応すべく、あらゆる現象をひとしなみに追求した結果、説明がやや不足している場合もあるが、フォスター氏ほど広く変容の領域を探求しつくし、現代英語の実態を示した人は少ないからである。素人が読んで理解し得る程度にまで内容をくだけ、しかも質を落さない叙述の手法も高く評価されよう。

「アメリカの影響」を取り上げた章では、語彙問題を越えて文章論に及んだ考察に注目すべきものが多い。一例として、否定の形で用いられた *begin to* の用法に興味深い記述がある。一般にはアメリカニズムといわれるこの表現を意外な人が、意外な場所で用いているからで

ある。イギリスの貴族、Sir Walter Raleigh が1915年3月30日にアメリカに滞在中、次のような文章を書簡文の中にしたためたという記録が報告されている。

I can't begin to tell about America. (私はアメリカについてはまったく語れそうもない。)

かかる用例がどのような形でイギリス人によって書かれたかをフォスター氏はさらに追求し、否定をともなう *begin to* がイギリスで定着するまでにはかなり長い年月を要したことを明らかにしている。このほか、*way over* (はるか遠く)、*way down* (はるか下って)、*way back* (はるかさかのぼって) などの *way* をともなう表現がどのようにして生成し、多用されるようになったかに関しても具体的に納得のいく解説を施している。

「外国の影響」としてまとめられた第二章は国際的な見地から英語を見る場合、最も興味深い研究報告ではないかと思う。英語自身がいかなる外国語をどのような理由で採用したかの内的要求が説かれているからである。また、これを逆に読み取ると、外国語への拒絶反応も暗示されている。特に、文章論に及ぶ微妙な影響を捕えた点は精読に値しよう。例えば、'but' の特異な用法が徐々に広まっているが、この現象がフランス語の構文の影響によるものとして説明されている。例えば、'Mais naturellement!' から 'But of course!' (もちろんですとも) が生じたと述べられている。日本と中国に見られるほどの文化の輸入ないしは移植がイギリスとフランスの間にあったとは断定し得ぬが、フランスの文化や言語がイギリスのそれに与えた影響は大きい。これが近年どのような形態で相互的な影響関係に発展したかを検討する契機をフォスター氏が本書に導入したことも見逃せまい。ごく普通の自然の植物としてフォスター氏は *aubergine* (フランス語の女性名詞で、なすのこと) に関してやや神経過敏なほどに記録しているので、稿者の体験を示しながら補足しておこう。フォスター氏は「この語はイギリスでは今日、小さな握りこぶし大の紫色の実によってある程度知られており、また1950年度版の C. O. D. に

記載されている」と書いている。イギリスではある程度なのかもしれないが、カナダなどでは特にフランス語の影響もあってか、aubergine の発音 [obɜr'zɪn] の語尾はややくずれているようだが、非常に用いられている。試みに *The American Heritage Dictionary of the English Language* にも当たってみたが、見出し語として記載されている。ただし、フランスでも日本人から見るとかなり大きいなすまで aubergine と呼ぶこともある。

ドイツ語の影響に関する考察ではアメリカに移住して来たドイツ人の足跡を辿りながら、実証的にアメリカニズムを探求している。例えば、現在きわめて普通に用いられている 'How are we to get to see an important source?' (どのようにして、私たちは重要人物に会えるようになるのでしょうか) の 'get to' の起源がドイツ語のイディオムにあることをフォスター氏は立証している。すなわち、ドイツ語のイディオムが移民と共にアメリカに持ち込まれ、アメリカ育ちの英語表現となり、それがイギリスの英語に流入したわけである。このほかにも、'fresh' と 'frish', 'dumb' と 'dumn' など、ドイツ系のアメリカ移民の思い違いから英語の語彙を拡張することになった挿話も興味深い。

スペイン語の影響に関する記述はやや簡略に過ぎるくらいがある。しかし、the moment of truth が el momento de la verdad ないしは la hora de la verdad によるものであるとの指摘は傾聴に値しよう。この流行語句を「これは、虚勢や力量不足をあらわにして能力の限界に挑戦する、危機一髪の瞬間を意味している」と説明している。具体例としては Ernest Hemingway の *Death in the Afternoon* (1932) からの引用がある。

言語はある意味で文化の集約されたものでもある。外来語を受容し、それを自国語の中に育てていくためには、それだけの素地がなくてはならない。英語が豊かな文化に支えられていることを示した点でもこの著者の大きな業績をたたえることができよう。この章のしめくくりとしてソ連との関連に触れてみたい。

国際関係も言語には大きな影響を及ぼす。ソ連が第二次大戦後、国際政治の舞台で主役を演じるようになってからは、ソ連の言葉も英語の語彙の中で新しい地歩を占めるようになった。その展型的な例が 'sputnik' (人工衛星) であろう。しかし、ソ連の言葉が文化の根深い核心よりも政治的、経済的ないしは科学的なレベルで影響を与えていることは注目しておいてよいだろう。というのは 'troika' までも政治的ニュアンスを漂わすようになっているからである。例えば、Anthony Sampson の名著 *Anatomy of Britain Today* (1965) に次のような用例がある。'James Callaghan...the third in the troika' (ジ

ェイムズ・キャラハン、三頭政治の第三位に位する者)。troika 本来の牧歌的三頭立ての馬車は消え、血なまぐさい政治が顔を出しているのも20世紀の悲劇かも知れぬ。

「新しい社会」と題する章では現在各国の言語が当面している共時性を中心として種々の言語現象を英語を中心に展開している。科学技術の発達にともない新製品が考案されるにつれて、衣料品、化学薬品などはますます複雑になる。病名も一世紀前とはまったく変わってしまった。これらの変化は人間精神にまで影響を及ぼす。したがって、工学の専門語として知られていた 'stresses and strains' (圧力とひずみ) が 'the stresses and strains of modern life' (現代生活のストレスと緊張) のような用法が一般化して来る。最近の flyover (立体交差点)、underpass (地下道) などは「新しい社会」の要求として生まれたものであるが、かかる新語が今後どのような運命を辿るかも興味深い。わが国の奇妙なカタカナ書きと対比させながら本書に接するののも一つの読み方といえよう。

「語構造」の章では特に目立った特色はない。新しい接頭辞といわれる mini- がどのようにして mini-bra, mini-belt などの新語を形成し、現代文明の中で受容されるようになったかを考察した文化史的側面に注目すべきであろう。mini- と反対語の接頭辞、mega- については「mini- ほどに自明 (self-explanatory) でなく、また主観ではあるが、一般によく知られている語にはつかないからである」と述べられている。この問題はさらに社会心理学的な見地からもう一度メスを入れ直して見る必要がありそうに思われる。なお、動詞の語形変化などについてはやや独断的な意見も見られる。

「文構造」に関する考察は体系的ではないが、示唆に富む卓論が多い。現代英文の構成を再検討するために欠かせぬ一章である。最終章の「発音」は現代の放送英語などの実態を示しながら要領よくまとめられているが、この記述から論理的な結果を導くことはできまい。

英訳書としての批判は日本語の受けとめ方によって人それぞれの相違があろう。例えば、baby-sitter に「留守番子守り」という訳が与えられているが、日本語として熟していないためばかりでなく、拒絶反応を抱かせる。mini-bra も「小型ブラジャー」では意を尽しているとはいえない。胸をひろくくりとったドレス用のブラジャーであるからだ。しかし、これも主観による相違であろう。ともかく、言葉に関心を寄せている人々に読み易い形で原書を翻訳した訳者の労が読者を啓発する一巻である。

(早稲田大学助教授)

『英語教育の中の英語学』

安井 稔著, 大修館書店刊
xii+294pp., 1973, ¥ 1,200

MŌRI YOSHINOBU

毛利 可 信

本書は著者が昭和34年～47年の間に雑誌等に発表した論考のうち、英語教育ということに関係のあるものを選び、これを、〈I. 英語教育における語学的基礎〉〈II. 言語理論と英語教育〉〈III. 日本の英語教育〉の3部にまとめたものである。

〈I. 英語教育における語学的基礎〉は、英語の音声、つづり字、語い、英語史、アメリカ英語、英習字、の6章から成り、最後の章を除いては、だいたい各大学の英文科で行なわれている英語学概論のエッセンスを簡潔にまとめた、という趣きのあるもので、著者のねらいは、英語教育にあたる人たちに英語学的背景を提供することであろうが、英語学を専門にやるものにとっても示唆に富む論述が少なくない。というのは、これは、音声・音韻の研究書や英語史の本をいくつか読んで、それを適当につなぎ合せてダイジェスト版を作ったというようなものでなく、著者も言うように、「類書をただ漫然と読んでいただけでは見つけにくいような知識をできるだけ拾うように心がけ」て作ったもの、すなわち、取捨撰択や問題提起の角度に著者自身の個性と自主性が反映されているものだからである。そういう事例は枚挙にいとまないぐらいで、いくらでも列挙できるが、今、評者個人としてとくに印象深い点のおもなものをあげておく。たとえば：—

語頭子音に気音 [h] を伴うか、伴わないかの問題に関連して、〈at all〉と〈a tall (man)〉などの発音の相違への注意 (p. 10); 成節子音が英語らしく発音されるための条件 (p. 16); native speaker がものを言いためらうときに用いる〈場ふさぎ音〉の研究の重要さ (p. 21); 二重母音の特性 (p. 23); 「現在のつづり字は、皮肉なことに15世紀ごろの発音をかなり忠実に表わしている」ことの指摘 (p. 26); nite, hiway, thru, etc. の、いわゆるアメリカ式つづり字といわれているものの位置づけ (p. 34); 従来行なわれてきた意味変化の分類が「意味変化の推移過程に関してはあまり教えるところがない」という指摘 (p. 44); 屈折語尾と派生接辞との区別 (p.

47); “Anglo-Saxon” という語の用法 (p. 60); 語順の問題を歴史的に考えるとき「自由な語順」と「固定した語順」との対立だけを考えるのでは不十分である、という指摘 (p. 90)

などである。これらの中には、すでにほかで議論の対象になったものもあり、すべてが著者独自の意見とか、創見だとか言うのではないが、評者自身、英語学概論のようなものをずっと担当してきた経験から考えると、この種のことを圧縮してまとめるさいに、〈上記のような諸点を洩らさず織り込み得るということ〉は、それ自身、非凡なことであると思う。その意味において、このわずか100ページそこそこの〈第I部〉に、これらの諸点(またまだほかにかくさんある)を織り込み周到な解説をしている著者の力量と努力とは高く評価されなければならない。

若干、気づいた点を述べておく。p. 65 で〈助格〉にふれているが、ここではやはり、代名詞の助格に言及してほしいし、what と why の関係や The more, the better. の the の説明もほしい。それは、教室での指導に対し、直接的に役に立つ情報だと思われる。また、p. 70 の〈語中音消失〉の説明はわかりにくい文章だと思う。ME における複数語尾を $-eX_1$ とした上で、「語中音消失は、もしもそれによって、 $-X_2X_1$ という結合を生ずる場合には、生じない」といい、それから X_2 の説明をするから、趣旨がわかりにくいのである。私見では、ここを、たとえば、次のようにしてはどうかと思う。

複数語尾を $-eX_0$ とし、語幹の最後の音を X_i ($i=1, 2, 3, \dots$) とするとき、〈名詞に複数語尾をつけた形〉は

— $X_i e X_0$ [具体的には— $X_1 e X_0$, — $X_2 e X_0$, …]

となるが、ここで“=”を同音、または同種の音の記号として

$X_i = X_0$ ならば中間の e は脱落しない、

$X_i \neq X_0$ ならば中間の e は脱落する。

このようにすれば、もっとはっきりするのではなから

うか。次に、p. 83 の〈its の古形としての it〉については実例に言及したい所である。同じく p. 83 で「em は、一般に、現在では them の省略形であると誤り考えられている」というのは、その通りなのであるが、なぜそれが〈誤り〉であるかを納得させるためには、ここで、[h] は脱落しやすい音であるが [θ] の音は脱落するような音ではない、というような説明がほしい。p. 85 の、-th の形の説明では、今、われわれが A. V. などを読むときに、たとえば 'goeth' をどう発音するのかについて注意を促してほしかった。

〈II. 言語理論と英語教育〉は、英語教育と言語理論、どの文法がいちばんよいか、ことばとは何か、などの9章から成り、これらの事項と本格的にとりこんでいるが、また一面、変形文法ないし新言語学のよき解説ともなっている。著者は、一般に、言語理論はその性質からいって、英語教育に直接的に役に立つものではない、との見解をとっているが (p. 153 ほか)、これは穏健妥当な意見であるし、また、著者が〈深層構造〉というものの扱い方にも、じゅうぶん慎重で控え目な態度でのぞんでいるのも (p. 139 ほか) 適切だと思う。

一体、言語学においては、あるものの評価を求められた場合、それを白とか黒とかの両極端のいずれかに分類することはきわめてむずかしい。どうしても、〈それには利点もあるが、安易にそれにかつぎまわるには問題点もある〉というような見方にならざるを得ない。それがコトバというものの宿命であるのだが、問題はその言い方にあると思う。もしも、単に〈これこれにはプラスもあるが、マイナスもあるから、よく注意しなければならない〉というだけのことなら、実は何も言わないに等しく、このような発言を〈慎重な態度〉とは言いたくない。

安井氏の意見を、評者が〈慎重な態度〉と評したのは一つの問題を評価するのに、少なくとも数ページ、多いときは数十ページも費やして、その得失を科学的に追求した上で公正な意見を出しているからである。その具体例を求められるなら、評者は第一に〈文型概念とその問題点〉(p. 170ff.) をあげたいと思う。由来、わが国においては〈5文型〉の問題があまりにも安易に考えられてきたのではなからうか。中には〈5文型〉というものを、何か定理のような普遍的なものだと考えている人もあるらしい。〔余談を一つ言わせてもらおうと、評者がある文法書の中で、いわゆる授与動詞構文を第5型とし、いわゆる 'S+V+O+C' の構文を第4型として記述した所が、たちまち質問がきて、この順序は逆ではないか、と文句を言われたことがある。一体、5文型の順序など

というものをだれが決めたというのか? また、英米人さえもほとんど知らないこの5文型を、〈この順序で〉日本人の英語学習者に教えなければならない、というそのいわれは何なのか。〕そういうわけで、安井氏がここで Onions にさかのぼり、Hornby と比較しつつ、文型ないし動詞型の問題への正しいアプローチを示されたことは重要な意味を持つと思う。

また、p. 149 で語用論の研究がおこなわれていることに言及し、「英語教育というような問題にとっては、語用論が最も密着度の高い関係をもっている分野である」と指摘しているのは、評者にとっては、まことにわが意を得た一文であった。評者の私見では、およそコトバのやりとりの問題を、〔機械的に処理するのではなく〕〈人間のいとなみ〉として考えるのであれば、第一に問題とすべきは、対話の場において、話者・聴者のそれぞれに生ずる、そしてお互いに交換される、〈Belief・Knowledge〉のあり方という問題であろうと思う。人間の言語活動をすべてオートマトンに還元して考えるといういき方もあり得るけれども、オートマトンでは結局コトバの機械的側面しか解明できない。よって、これから後は、〈Belief・Knowledge〉をふまえた言語理論、すなわち語用論の研究が促進されなければならないと思うものである。

〈III. 日本の英語教育〉では「英語を学ぶと決めたらどういう覚悟が必要か」というような発想のもとに書かれた、6篇のエッセイを集めている。この〈発想〉は〈心の活性化〉を説いた部分によくあらわれていると思う。また〈4技能は一体であるか〉についても、先に述べたような意味で著者の態度は〈慎重〉である。それは pp. 275—6 の5行、すなわち、本文むすびの文章によく言いあらわされている。

要するに、本書は、〈第I部〉は、よく整理された情報のゆえに、〈第II部〉は透徹した立論のゆえに、また〈第III部〉は滋味に富んだ評論のゆえに、有用な書物であることは疑いないが、全体を通じて、やや気になる点がないでもない。それは、本書の内容的価値と直接関係がないことであるから、少々気がひけるけれども、あえて言わせてもらうなら、著者の論述の仕方ということにならうか。第一に、この著者にはどこか aloof な態度、つまり物事を遠観し、一定の距離をおいて〔読者との間にも〕、議論するというようなムードがあって、これは、もう少し、どうにかならないものかと思う。このムードでおもむろに——という感じがする——たとえば「どの文法がいちばんよいか」というふうに切り出されると何かよそよそしい感じを与えかねない。本書の表題から読 (p. 67 へつづく)

『英文学研究入門』

—Through a Looking Glass—Darkly—

David Hale 著, ELEC 出版部刊, 144pp., ¥ 580

Edmund C. Wilkes

David Hale, who taught at Tohoku University from 1966 to 1972, and is now a lecturer in the College of Technology and Art, Harrow, England, has playfully combined the celebrated and mystic phrase from St. Paul's Letter in First Corinthians, "for now we see through a glass darkly" with the title to Lewis Carroll's sequel to "Alice in Wonderland", the equally fantastic "Alice Through the Looking Glass". The resultant title is slightly puzzling, an attention-getter, of course, but I am afraid it is not a title that immediately reveals truly what he is writing about in the present book.

The subject matter as he sets it forth in his brief preface is directed to Japanese students of all levels who are engaged in "the fascinating but difficult task of studying a foreign literature", more specifically English literature.

A brief survey of his chapter headings informs us that he discusses the problems of scholar and critic, of language and literature, of the "business of literature" and in some detail the various backgrounds that are essential to a thoroughgoing effort in the field.

Hale's own qualifications are made clear by his erudition and his many references to recondite information, source materials and critical works which he generously lists, both in the text itself and in a practical appendix that gathers "a few useful reference books", mostly of the cheaper, easily obtained volumes that a thorough student would undoubtedly wish to own. I was impressed by his frequent insistence that Japanese students of literature should have, and should use constantly, not only the standard Japanese-English dictiona-

ries, but a good English-English one. Surely any foreign instructor of English has come across this problem of over-adherence on the *Ei-wa jiten*, and the complete trust in it that so often leads a Japanese student to insist that his sources are the only correct ones.

Mr. Hale advises the reader in literature to make himself as aware of the whole background of English literature as he possibly can, but this may well appear a Sisyphean labor, for if one follows this stricture logically, one would have to partake deeply of all knowledge; social, historical, linguistic, stylistic, even international elements would need to be considered before fixing upon a properly circumscribed area of study. Still there is much truth in his complaint that theses, books, and papers are being published that detail only the student's preoccupation with a limited part of an author's work, neglecting the whole oeuvre or ignoring it.

Ideally he would have everyone who attempts to write in Japanese about an English author, or even about some of his writings, have a command of English, as distinct from a knowledge about English. He would have students master the ability to read texts in the original language, though he insists this does not imply necessarily an ability to translate the same into Japanese. He points out the limited range of the non-fluent speaker of English who attempts to do effective work in the field of studies in literature. As he states so ably, "there are moments central to the study of literature which require a feeling for language which can be attained from gaining a command of the spoken word."

Surely this is true of poetry and the drama of Shakespeare. The burgeoning melodies of Oberon's lyrics, or the explosive thunders of the enraged Lear are not caught in any word-by-word analysis or translation. They must be savored in the original.

An amusing section of the text points out the parallel difficulties of a Japanese writer face to face with a not-so-well-known Britishism and the mistake of a translator of haiku who was not aware that there is a distinct difference between the "kemushi" and the "kaiko". A little knowledge is a ridiculously dangerous thing, is it not, Alexander Pope?

Hale analyses the tendency of many Japanese studies of literature to fall into one of two categories, the objective, fact-accumulating essays, and the subjective, highly personal, self-reflecting appreciations, wherein the "otherness" of the masterpiece, actually eludes the writer. He argues for a blending of both types of effort with both form and content, facts and spirit fully studied and described.

In the longest section of the book, Hale advises study of related backgrounds and cultures, the history of the language, the Christian tradition, literary and historical perspectives, and the essence of criticism. He castigates the penchant in Japan to study individual authors apart from their relation to their times and places in literature and in life. He offers good sound advice to writers and students on such essentials as note-taking, book-hunting and acquisition, reference books, precis-writing, organization, not only of studies but of final materials if they are to see print.

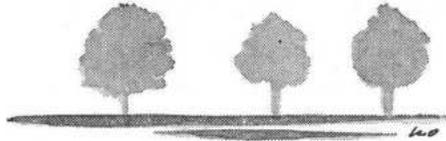
I suppose this little collection of scholarly essays will be read by a variety of students. Those who are bewildered beginners may be somewhat discouraged at the Herculean tasks that are suggested disciplines; those who are already advanced on scholarly paths and can read Hale in this vein without constant reliance on a dictionary will undoubtedly find many things to agree with and some new

suggestions to take to heart. They may feel, as I did, that his predilection for certain authors leaves some of us questioning his own completeness, but I suppose a close knowledge of such a congeries as Coleridge, Keats, T. S. Eliot, Emily Dickinson, Jane Austen, Henry James, D. H. Lawrence, Conrad and others is witness enough that he probably is as well acquainted with the entire field as with those hobbyhorses that he chose to ride in this limited collection. Surely he offers stimulating glimpses of several types of literary studies and critical works that will send us all to the bookshelves.

The book is well produced though a few typos have been allowed to remain that a proofreading by a native speaker would have eliminated. There are a total of 36 pages of very full notes in Japanese for the reader that needs them. I must say that some of these seem like arrant pedantry to me, for surely any English student or scholar who embarks on this book should not have to read biographical information and a list of "best-known" works of such figures as Keats, George Eliot, Jane Austen, Spenser, Henry James, Pope, Milton, etc. This excess of zeal seems vaguely insulting to the intelligence of the prospective reader. It is similar to writing a critical work on classical music and giving a note that explains that Beethoven was a German composer (1770-1827) who wrote nine symphonies of which No 5 is known as the "Fate" and No 9 as the "Choral", that he wrote 32 piano sonatas of which the "Moonlight" and the "Appassionata" are well known, etc. etc. Surely something can be trusted to the efforts of the interested reader who picks up this volume. Unless he is reading it on a desert island, I see no need to overinform him in materials he certainly should know already.

One does not need to read the notes of Hale's book, however. There is in its text plenty to chew on. (Senior Instructor, the ELEC Institute)

新刊紹介



■エレック選書

『国際感覚の構造』

金山 宣夫著

著者はすでに英語の通訳法や会議英語などについても数冊の著書があり、特に『国際適応学入門』（サイマル出版会、1970）の著者でもある。「適応学」(adaptology)とはこの著者自身が提案して命名した新しい学問分野であり、「国際的環境」への適応の方法を研究しようというもの。東南アジア、そしてヨーロッパ等々、到るところで日本人の悪名が高まると共に、最近ではあちこちでこうした問題が論ぜられているようだが、本書はこの課題について著者が日米のさまざまな分野の人びとと行なったいくつかの対談を中心に、あちこちに発表した論文を収録してある。これらのなかからピックアップして内容を紹介してみると、次のようなことになる。

どうも日本人は伝統的に自閉症的な精神構造を持っていて、国際会議の場に出れば三S主義 (silence, smile, sleep) でごまかしてきた。そして日本人ほど外国人に対する劣等感と優越感をあらわしている民族は見当らない。こうした欠点をカバーするためには、相手の文化と慣習をよく理解し、外国語をマスターすることがなにより必要となるが、「国際化時代の語学教育」と題して著者が小川芳男、前田陽一の両氏と行なった座談会の発言のなかから要約して引いてみると…

「日本の語学教師はあまり語学が

できないので、先生が先生たる権威を発揮するためにはシェクスピアに出てくる shall と will の数をかぞえたりするしかなくなってしまふ」(金山)

「しかしことばを教えるには文学的なものが一番いい。だがそうかと言ってシェクスピアなど、英文科の人にはよいが、それ以外の人にはいるまい」(小川)

「外国語の先生はむづかしいことばかりやって話せないという傾向は20年前は一般的だったが、今の40台以下の若い世代はちがう。外国人に対しても少しも構えずに自然に話す」(前田)。

各所に著者の広い知識と才能が現われていて感心させられる。

(ELEC出版部 B6判 284頁 ¥650)

(明治大学教授・文化人類学 祖父江孝男)

■エレック選書

『外来語のカルテ』

楳垣 実著

本書はいわゆるカタカナ語のうち、現在よく見聞する百数十語を取りあげ、これにわが国の外来語研究の第一人者である著者が、一般読者にも十分のみこめるような平易なスタイルで、興味深い解説を加えた「エレック選書」の1冊である。もともと朝日新聞の大阪版の婦人欄に連載した記事が根幹となっていることを知れば、それも領けることだろう。その百数十語のうちには、ランドセル、クリーム、ネックレス、チップのような以前から使われていた

古顔とともに、ヒッピー、シュプレヒコール、プレタ・ポルテ、ナウな、アレルギー、パンダ、アングラ、ポルノ、ミニ、ミディ、マキシ、コンビナート、パンタロンなど新顔がかなり注意深く集められているのも便利である。

従来ベース・アップとかレイン・ハットのような(構成要素は英語だが、全体としては英語になっていない)疑似英語を「和製英語」と一般に呼んでいる。著者も『日本外来語の研究』(p.172以下)ではそう名付けておられるが、本書ではこれを「和製熟語」と言い直すことを提唱しておられる(cf. pp. 21, 24, など)。ただし「和製熟語」では「銀行」、「会社」のような、わが国で漢字を組み合わせて作った複合語(『日本外来語の研究』p.38以下参照)を思い起させるのではなからうか? 漢字ではなく、カタカナ語(何も英語に限らないので)を要素にしていることを明示する必要はないだろうか?

本書を特に親しみやすい内容としているのは、著者の語りくちに、月2回医師の診断を受け(p.54)、眠れない夜には深夜放送を聞き(p.115)、テレビはほとんど見るひまがない(p.119)といった著者の生活の一端がさり気なく出ているのと、子供のころにはコーヒー糖があった(p.117)といった昔語りとともに、駅前の夜なきそば屋がいつのまにかホットドッグ屋に変わった(p.178)というように、世相の変化に敏感な叙述が随所に見られるためであろう。(ELEC出版部 B6判 190頁 ¥580)(武蔵大学教授 上野景福)



■『Speaklopedia 英語ハンドブック』

國弘 正雄編著

これは Speaklopedia (全30巻からなる膨大な英語会話シリーズ)の学習手引書として作られた *Speaklopedia, Condex* (A 4版, 304pp.)の中から、発音学習、英会話上達の技法、生きた英語表現の各章を省いて、その他は全く同じ内容のまま、B 6版に縮小したものである。学習者が常に携帯できるように考慮してできたものと考えられる。

内容は(1)和英発想別分類動詞辞典(80pp.)、(2)主題別英語百科辞典(66pp.)、(3)買い物(26pp.)、(4)海外旅行(5pp.)と付録からなっている。(3)では Shopping に関する品目を24項目に分類し各項目ごとに60から70品目の語いと関連する会話例が提示してある。(4)では海外旅行の旅程作成、渡航手続、出国までの説明と海外旅行に必ずついてまわる5つの場面に関する語い、会話例が(3)と同じ形式で納められている。

本書の特徴は何といっても(1)と(2)である。(2)では、単に衣、食、住といった日常生活の主題に留まらず文化的諸々のジャンルから国際政治、宇宙科学といった分野まで39項目に分けて現代人の必須要語をまとめてある。目まぐるしく変化する世界情勢について行くためには、最低これだけは英語で身につけておかなければならないだろう。

さて、本書の最も特徴とするのは(1)の発想別に分類した動詞辞典であるが、これは動詞が表わし得る意味の世界を、各動詞が持つ心理的側面から+イメージ、-イメージに分けその他の動詞を対人関係、対物関係、動作、自然に分けてまとめている。これは外国語学習に対する新し

いアプローチとして、将来より優れた会話教材の作成に多いに役立つと考えられる。ただ未整理な個所もあって「方針を打ち出す」が *strike out a policy*、「もちこたえる」*hold out*、「こだわる」*have a grudge against a person* 等、意味のずれている項目もある。(バナジアン B 6判 314頁 ¥620) (ELEC研修部次長 山本庄三郎)

■『英字新聞の読み方』

村田 聖明著

今日の日本の英語教育は、人間の言語活動全体の極く一部分にすぎない文学を中心に行なわれている。そのような教育を通しては、極めて狭い範囲の英語にしか接触できないことになる。このような偏食的な英語教育を改善するためには、新鮮でその内容も多岐にわたっている英字新聞を、英語教育の教材として是非使ってもらいたい。このような前提に基づいて書かれているのが本書である。

英字新聞の入門書というと、普通は、英文記事を項目別に分けてあげ、注と訳がついているありきりのものが多い。ところが本書は、前編(pp. 1—122)、後編(pp. 124—206)に分かれていて、まず英字新聞を読むために必要な知識がわかりやすく解説され、そのあとで英文記事の実際が紹介されている。

つまり、全体の3分の2近くにわたって英字新聞の読み方のコツがわかりやすく説明されているが、英語の実力をつけるために、英字新聞を読みたいと考えている人たちは、この部分を熟読玩味していただきたい。

時制の一致や関係代名詞の用法などに示されている学校文法と新聞文

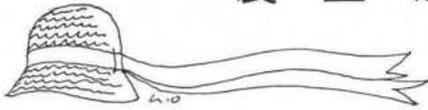
法との相違(pp. 34—46)がきわめてわかりやすく説明されている上に、イギリス英語とアメリカ英語の共通点、相違点(pp. 32—34)などが、実に要領よく、しかも正確に説明されている。なかでも第4章の「見出しの解読法」(pp. 71—120)は、著者自身も「意識的に時間をかけた」と述べていられる(*The Student Times*, July 6, p. 18 参照)だけに、本書の最もすぐれた特色になっている。

英字新聞の読者が最もこずるといわれている見出しの中に頻出する単語を解説したものに、読みやすく親しみやすい解説がついている。たとえば81頁の **Bar**「バー」の解説。見出しの中で、**Bar** というのは、カタカナで「バー」という場合の「酒場」という意味で使われる回数は殆んどない、あるいは106頁の **Suit**。見出しでは「背広」という意味の *suits* は殆んどなく「訴訟」である。*Worker's Suit Brought to Court* という見出しは、「労働者の背広が裁判所へ持ち込まれた」という意味に考えるべきでないなど、など…

著者の村田聖明氏は、*ジャパン・タイムズ*の編集長として、そのすばらしい英文社説や、署名入りの解説記事などで、すでにおなじみの方も多いと思う。書評子もその日本人ばなれした正確で読みやすい英文には、かねがね感歎を惜しまないもののひとりであるが、日本文も比喩表現に富んでいて、実にわかりやすく読みやすい。

たとえば、文学の英語がたんぱく質のたべものであるとするならば、英字新聞は栄養のかたよらない「完全食」である。肉ばかり食べていると動脈硬化になってしまうから、ビタミン、ミネラルなどの含まれている栄養の片よらない新聞英語もぜひ
(p. 67 へつづく)

展 望 通 信



◆第9回 ELEC 英語教育研究大会

今年の ELEC 英語教育研究大会はつぎの通り開催されます。

1. 期日 11月10日 (土)
2. 場所 ELEC 会館 (東京都千代田区神田神保町3の8)
3. 日程
 - 10:00-10:10 開会の辞 ELEC 専務理事
高橋源次氏
 - 10:10-11:00 講演 "Problems and Attitudes in the Teaching of English in Japan" Mr. J. J. Dunn, (Language Education Officer, The British Council)
 - 11:10-12:00 講演「英語教育50年の回顧」
黒田巍氏 (大妻女子大学教授)
 - 12:00-12:30 1973年度 ELEC 賞授与式
ELEC 同友会総会
 - 12:30-1:30 昼食・休憩
 - 1:30-2:20 実演授業
東京都立神代高等学校教諭, 大橋菊子氏および同校第一学年生諸君
 - 2:30-3:00 実演授業に関する質疑
 - 3:10-4:40 分科会 (午前の講演について)

◆ELEC 同友会月例研究会

ELEC 会館を会場として, つぎの通り月例研究会が開催されます。入場無料。

第66回 9月29日 (土) 2:30~4:30

講演「最近における言語心理学の諸問題」

ELEC 教務部長 松下幸夫氏

第67回 10月27日 (土) 2:30~4:30

講演「Testing の理論と実際」

ELEC 研修部次長 大友賢二氏

なお, 11月, 12月は休会とします。

◆ELEC 海外留学英語試験

海外留学希望者, TOEFL受験者, 海外出張者を対象とする英語能力検定・診断・指導のための試験が11月30日 (金) 午後1時から ELEC 会館で開催されます。受験希望者は「ELEC 海外留学英語試験」係宛, 願書をご請求下さい。なお申込受付は先着順とし, 定員に満ち次第締切ります。

◆ELEC 英語研修所「海外留学試験科」

米国留学英語検定試験 (TOEFL) 受験のための短期集中準備コース。Listening Comprehension, Structure, Vocabulary, Reading Comprehension, Writing の5領域に関して, テスト, 解説, 練習, 討議の順で準備の仕上げをするもの。週2回 (火, 木), 1日4時間, 週計8時間。研修期間は6週間。

第4期 11月1日 (木) ~12月18日 (火)

第5期 1月17日 (木) ~2月26日 (火)

第6期 2月28日 (木) ~4月11日 (木)

(p. 66よりつづき)

召し上がれ, といったような調子である。

しかし, 17頁に著者自身も指摘されているように人間の言語活動の中には, 会話による他人との意志伝達や, テレビ・ラジオなど音声による情報伝達も重要な要素をしましている。

英字新聞は読解や現代的な表現など目から学ぶ英語の好材料ではあり得るが, 耳から学ぶ英語教材にはなり得ない。したがって英字新聞はもちろんのこと, 耳から学ぶ「放送の英語」や英会話の表現なども併用することによって, それこそ本当の英語の完全食が摂取できるのではなからうか。(ジャパントイムズ B6判 206頁 ¥500)

(お茶の水女子大学助教授 長谷川 潔)

(p. 62よりつづき)

者が著者に期待したいものは, おそらく, もっと泥まみれでもよいから, 著者自らが具体的実践的研究の範を示されることではなからうか。

第二に, はじめから終わりまで, よく言えば重厚な, 悪く言えば重苦しい文体で書かれているのも, ひどく読者を疲れさせると思う。これは著者の用心深さからくるものとは察せられるが, これだけ variety に富んだ内容なのであるから, 時と場合に応じて, 何気なくサラリとした所ももっとあってよいと思われる。

(大阪大学教授)

◆ELEC 夏期英語教育研修会

ELEC 主催・文部省後援の「ELEC 夏期英語教育研修会」は、前期（ELEC 英語研修所，7月30日～8月11日）と後期（八王子大学セミナーハウス，8月18日～8月27日）に分かれ、それぞれ150名と64名の中学校・高等学校の英語科教員に対して、英語口頭訓練，言語教育に関する講義および教育実習を実施し、いずれも成功裡に終了した。

◆ELEC 夏期講習会

一般成人を対象とする夏期講習会は、7月30日～8月17日に ELEC 英語研修所で行なわれ、187名に対して英語口頭訓練を実施した。

◆ELEC 海外英語研修

ELEC, MSU, JTB の共催で、昨年に引き続き行なわれた「ELEC 海外英語研修」は、期間1か月（7月30日～8月28日）、参加者36名、ミシガン州立大学の English Language Center で今村茂男教授ほか8名の米国人教授、講師の指導のもとに、Pronunciation（3時間）、Aural Comprehension（15時間）、Writing（7時間）、Discussion（10時間）、Reading（6時間）、Lecture（10時間）、Orientation（8時間）など周到に用意されたプログラムにより3週間の英語研修に従事し、その間2泊3日の家庭滞在、1日の家庭訪問、タイガーズの野球見物、Niagara Falls 見物など多彩な経験をしたのち、Chicago, New York, Washington, Los Angeles, Honolulu に1泊ないし2泊して1週間に米国各地の見学に費やし、参加者一同にとりきわめて有益な海外研修が実施された。

◆『英語展望』の合本

『英語展望』の合本第2巻（第13号～第24号）および第3巻（第25号～第36号）の在庫が若干部あります。ご希望の方は ELEC 出版部へお申し込み下さい。定価は各3,000円。

◆English Teaching Forum の配布

ELEC では USIA 発行の英語教育専門誌 English Teaching Forum（隔月刊）の配布を行なっています。講読を希望される方は ELEC 出版部宛お申し込み下さい。講読料年額1,000円（含送料）。

◆ELEC 賞研究論文・実践記録の募集

ELEC では、わが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接役立つ実践研究を奨励する目的で「研究論文」または「実践記録」を広く一般に募集し

ています。

原稿の締切は毎年9月末日で、わが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接貢献するところ大と認められたもの一件に対し、ELEC 賞が授与されます。

◆原稿募集

『英語展望』では読者から原稿を募集しております。内容・分量とも制限がありませんが、未発表のものに限ります。掲載分には規定の原稿料をお送りいたします。

編集後記

◇長沼ナイキ基地訴訟の判決が出て、自衛隊が違憲であるとされた。思えば二十数年前警察予備隊が吉田内閣の手によって作られた時、何か再軍備への萌芽を直感的に感じとり、将来に対する不安を抱いた若者の数はかなりいたと思う。

◇憲法を素直に読み、制定当時の精神的原点に立ちかえって現在の自衛隊をみた場合、どのような解釈をしようか、その存在を合憲であると言いはることは不可能ではないだろうか。しかし、世の風潮は、この裁判も高裁から最高裁へと移って、何年か先には「合憲」という判決が下されるであろうことを予測している。どうしたわけだろう。どうせ、「古狸のプロ（old Pro）がしくんじゃう」とあきらめているのだろうか。

◇本誌の「ウォーターゲートをめぐる」に出て来る学生が「ぼくらはどうせ政治なんぞに期待をかけちゃいないさ。ほら、よくいうだろう、政治なんでもっとも汚ないビジネスだとさ」と言っている。

◇期せずして日本もアメリカも三権分立や Checks and Balancesの問題が大きく取り上げられている。ちょうどよい機会である。「政治なんぞから遠ざかれ」と言わないで、じっくり腰をおろして国際的視野において考えなおそうではないか。

(Q.Q)

英語展望 (ELEC Bulletin) 第43号

定価 350円 (送料 85円)

昭和48年10月1日 発行

◎編集人 中島文雄

発行人 竹内俊一

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の12

電話 (269) 1111 (大代表)

発行所 ELEC (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (269) 8911~8916

振替・東京 11798

ELEEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC